IS [Soul Reaper]

スマイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　［Ｓｏｕｌ　Ｒｅａｐｅｒ］

【Ｎコード】
Ｎ７９２０Ｗ

【作者名】
スマイル

【あらすじ】
ＩＳ二次小説。原作を読みながらの連載、投稿になるので……亀になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

登場人物にブレがありますが、一応伏線込みです。

第０話　「主人公」（前書き）

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）……世界を変え、世界を覆した存在。４６７しかない光の中に、ある異形が世界を切り裂く。漆黒の刃を持って…。

初投稿です。「何処かで見たことある」と思った方は即座に「戻る」をクリックして下さい。

第０話　「主人公」

第０話　「主人公」

名前：黒崎　一誠

ＩＳ：「　　」（高速戦闘型）

性格：年相応の喧嘩っ早さを見せるも、自分の主張は何があっても曲げない。

入学してからはメインキャラの良き相談役。大体はツッコミ。

（外見はほぼ黒埼一護【最後の月牙天衝を会得した姿】。ただし、髪の色はダークブラウン）

専用機持ちの中でも特異なＩＳを持ち、その機体特性上、瞬発力が高い。

（基本的な身体能力は全キャラ中トップクラス）←ここはチート過ぎ

ＩＳ：「　　」（作中では「無明」）：モチーフはＢＬＥＡＣＨの主人公、黒崎一護の卍解。

「最軽量・最低限装備による高速近接戦闘」をコンセプトに、浦原喜助によって開発された黒崎一誠の専用機。

開発時期、及びコアは不明（ノーナンバー）

シールドエネルギーを「展開」ではなく「衝撃感知による部分的な自動防御」のようにして使用することで、ユーザーにかかる負担をギリギリまで抑制している。更に、Ｓ．Ｅを攻撃に転換するタイム

ラグを極端に減少している。
武装は「天鎖斬月」のみ。後付武装の枠も単一仕様能力（ワンオフアビリティー）によって容量一杯なので使用不可。
尚、高速戦闘による機体特性がピーキーになり過ぎていて、一誠以外には全く扱えないモノになっている（テストパイロットによると「一歩歩いただけで１００ｍ先に移動してしまった」との事）。
ちなみにＩＳの生みの親である篠ノ之束は本機の存在、及び単一仕様能力を極端に嫌っている。

単一仕様能力（ワンオフアビリティー）：死神（ソウルリーパー）
Ｓ．Ｅをほぼ消費せずに高速移動、攻撃、及びエネルギー放出が可能。その能力使用の根幹はユーザーの「生命エネルギー」とも言われている。「強靭な肉体には強靭な生命力」をそのまま体現している。　エネルギー配分としては「Ｓ．Ｅ：生命エネルギー＝２：８」である。

第０話　「主人公」（後書き）

何か無茶苦茶な感があるけど、書きながら修正していきますので、よろしくお願いします。（ちなみに作者はアニメ見てません）

第1話　The Right of Distraction（前書き）

貴女が歩く。

僕が歩く。

だけど、後ろには道は無く、

あるのはただの血の海だけだ。

後ろを見る覚悟があるのなら、

僕は貴女を抱き締める。

第1話　The Right of Distraction

4月~April~

何時からいるのか解らない。ただ解るのは目の前に見える水平線に太陽が沈む姿だ。
黒いパーカーに白の無地のシャツ、ブルーのGパンとラフな格好だが、背丈はそこらの高校生よりも少し高いぐらいだ。

（……帰るか。）

太陽の光で目を細めながらも、重い足取りで帰路に着くと、煙草に火を点ける。もちろん成人式など3ヶ月前に終えたばかりだ。
重い足取りの理由ならある。決して誰もいない家に帰るのが辛い訳ではない
今から二ヶ月前、あるところからの入学案内が自宅に届いた。高校などすでに卒業しており、関係ないかのようにゴミ箱に放り投げようとした時、宛先に目を疑った。

『IS学園』

何かの間違いかと思い、宛先にあった事務局に電話したところ間違いないとの事。ついでに言うと、家族構成を鑑みての学費免除、

専用機を譲渡、しかも自分自身のオーダーを出しても構わないという。

ここまでくると新手の詐欺かと思うが、試しに試験会場に行ってみると、何と筆記試験を免除、実技試験を合格するだけで良いといったものだった。実技の前に簡単な適正試験を受けてみると、判定はA。

来てしまった以上は、実技でもやってみるか、と軽く考えていたが、始めてみるといきなり試験管が自滅。しかも自分の後ろの壁に激突してはい、終了。

その数週間後に、自宅に合格通知が届いた。元々体は丈夫で、人よりちょっと身体能力があるだけで入学できるのかよ、とツッコミながらも、ご丁寧にまた事務局に電話して合格通知が届いた旨を伝えた。

まあ、立派な社会人の一人としてはこれぐらいは礼儀に反してはいないだろう。それからは正にてんてこ舞いだ。何故か会社には知れ渡っており、一部の社員からは白い目を向けられながらも、社長だけは手放しで喜んでくれた。が、その分キッチリ仕事をこなせよ、とアメとムチを有難く頂戴した。

「社長には感謝…だな。ここまで気持ち良く送り出してくれるんだから、な」

ボロアパートの階段を上がり、自分の部屋の鍵を開ける。『黒崎』の表札もたった19ヶ月しかいなかったのにもう擦れ始めており、懐かしさも何も無い。

ここともおさらばだと思いながら扉を開けると、すぐ近くからクラクションが聞こえた。

道の譲り合いか、何とはなしに見てみると、車から女性が顔を出して自分を呼んでいた。知り合いではなかったが、一度会ったことが

ある。

ＩＳ学園教諭　織斑千冬。

凛とした声に、黒のスーツが似合う格好良い女性。誰でも憧れるし、目標に掲げる程の女性。

自分もそうだ。但し、尊敬の方が強くなりそうだが。

階段を下りて、車のそばまで来ると織斑さんも車から降りる。

「すまんな。自宅の前まで来てしまって……。連絡事項なのだが、私は私用があって外にいてな、直接会って話したほうが良いと思ったのだ」

「……はぁ」

「何だその返事の仕方は。もっとしっかりしろ社会人」

「”入学”が決まった時点で、社会人もクソもないと思いますが…」

「なら今日から変えろ。謙虚さは時として自分を取り繕う『嘘』になる。それは既に目に見えない毒と一緒だ。それを乗り越えてこそ自分らしさが生まれる。これがお前への最初の授業だ。もうすぐお前は”生徒”、私は”教師”なのだから。だが、その歳でそんな事を教わるようならお前はただの『男（グズ）』だな」

腕を組んで呆れていた織斑さんに、評価を下された。人間として最低の。

だったら変えてやろうじゃないか。男かもしれないが、ＩＳ（どこ）学園に

行こうが自分だけは貫き通してやる。
意地っ張りと言われればそれで終わりだが、上り坂で立ち止まっても落ちてくる石ころは止まらない。だったら意地だろうが何だろうが上り続けてやる。どんな場所でも、どんな人生(みち)でも。
その心の内を見透かしたかのように織斑さんも顔が綻んだ。

「それだけの決意ある表情なら問題無いな。ならば連絡事項を伝える。お前の入学だが、少しだけ延期という形になった」

「…？何でまた？」

「今年は男が一人、我がＩＳ学園に入学したのは知っているな？」

「ええ…確か、織斑一夏って名前……もしかして…」

「ああ。残念ながら、私の愚弟だ」

今度こそ呆れたと言わんばかりに右手を腰にあてる。いや、呆れたというよりは、頭痛の種だっていう顔してる。

「寮の部屋割りや割り振られるコアの調整……その他諸々を考えた結果、お前だけは基礎知識、ＩＳの基本操縦、加えて戦闘訓練を二週間程みっちり叩き込んでやる」

既に決まったこととはいえ、二週間という無茶振りには流石に脱帽モノだ。だけど……。
目を閉じて、両親の顔を、家族の顔を思い出す。もう一度学校に行っても…良いよな？

「解った……やってやる」

まるで自問自答したかのような決意ある声。思い出した…”俺”の本当の声(けつい)を。

「良い声だ……改めて自己紹介だ。私は織斑千冬。ＩＳ学園で教鞭をとっている」

差し出された手はとても細く、だが力と情熱を感じさせてくれる程の印象だった。俺はその手を握るフリをして…叩いた。
それには流石に驚いた顔をしていたが、俺の表情を読み取ったのかその顔は優しくも呆れたような笑顔だった。

取り繕った世界を抜けて……

太陽は顔を出す。

「俺は……一誠」

俺の心の中の雨は……

「『黒崎　一誠』だ」

雨は……止んだ気がした。

第1話　The Right of Distraction（後書き）

設定ぶっ飛びすぎ（＝＿＝）

ちなみに前書きをBLEACHのコミック風にしてみました。

詩はオリジナルです。

感想お待ちしております。

第2話　At Moment（前書き）

私は出会った。

貴方という人に。

怒鳴っても、泣いても、手を差し伸べてくれる貴方を。

けど、ただ待っていただけじゃない。

私の全てを見て。

私の全てを知って。

そして、私の全てを受け止めて。

第2話　At Moment

あの日から15日。

基礎知識から実戦訓練、果てには学園の規則すらも叩き込まれた”俺”は、無事にIS学園に入学できた。
正確に言えば『入学』ではなく、『転入』という形だったが、それでも授業内容に遅れることなくそれを消化していった。周りもそれに苦もなくついていっているようだ。

……若干一名を除いては。

授業が終わるたびに頭を抱え、その傍に来たポニーテールの娘に泣きついてる。あれで良く入学できたな、と苦笑しながらも、俺も一夏の席に向かった。

「そこを何とか……お願いします！箒さん」

「入学前に渡された参考書を捨てたお前が悪い」

こいつ……そうしてまで教わりたいのか？

確かに参考書とは呼べないほどの厚さだったが、授業終わってからでも読めるだろ。っていうかどんな脳細胞してるんだよ？お前は……。

「ん？……確かあんた、黒崎サン…だっけ？」

「んな他人行儀になるなよ。一誠か黒崎で良い」

「じゃあ、黒崎。どうしたんだ？」

「いや、哀れな脳細胞を持った男の顔でも見ておこうか、と」

「初めての会話がそこからかよ？っていうか、あんなのどうやって覚えるんだ？」

「書いて覚えるとか、考えなかったのか？」

「確かに……」

書いて覚える、という行動（ケース）も考えつくだろうが、それには膨大な量、時間が必要になってくる。そこに自分なりの解釈も含めると広辞苑や六法全書並みの厚さになるだろう。だが、こう考えれば楽ではないだろうか。

「”覚えない”よりかは遥かにマシだろ？」

俗に言う『割り切り』だ。

「それは良いけど、何か用があるんじゃないのか？それ教えるためだけじゃないだろ？」

「そうだった。挨拶が遅れたが黒崎一誠だ。よろしくな」

「俺は織斑一夏。一夏で良いぜ」

互いに名乗った所で握手を交わす。周りは「あれが男同士の友情

か…」「あれはあれで……良いわね」とか言ってるが無視無視。

「それとこっちが篠ノ之箒。俺の幼馴染だ」

「…篠ノ之だ。よろしくな」

何だか……仏頂面似合わないぞ？

思わず口から出そうになったが、苦笑して握手を…

「……」

避けられた……。第一印象からコレって、かなり悲しい。

次の授業でも、後ろの席から一夏をたまに観察していたが…大丈夫か？青スジの量が異常だぞ？

教科書に四苦八苦しているのを見てると、丁度俺の視線を遮る形で織斑先生が出席簿で一夏の頭を叩く。

アレ…出席簿で叩く音じゃないだろ？

その休み時間、俺の後ろからツカツカと一人の女子が歩み寄ってくる。

イギリス国代表候補生、セシリア・オルコット。

初見から高飛車な女だと思ったが、その予想の通りの口調で食って掛かってきた（・・・・・・・・）。

「貴方が転入生ですわね。このワタクシの質問に答える権利を差し上げますわ」

その言葉に、言いようのない不快感（きもちわるさ）を覚えた。不満とも、イラつきとも言える不快感（きもちわるさ）を。

「天下の代表候補生が何の用だ？」

「あら、ワタクシをご存知なのね。ですが、質問に答えるだけで結構。そちらが質問する権利はありません」

「だったら、答えることは何も無い。俺は只の一介の高校生だ」

「聞き及んでおりますの。貴方が専用機を持っている事を」

席を立とうとした俺の行動が”止まった”。それを知っているのはここの学園の教師と整備士、ひいては「あの人」だけだ。

「イギリスの紳士淑女ってのは随分とお喋りなんだな。初めて知ったぜ」

平静を保ちながらも、席を立ち上がる。が、仁王立ちかのように彼女が行く手を阻む。

「お待ちなさい。ワタクシの質問に答えてからにしなさい」

右に行こうものならセシリアが正面に、左に行っても正面に。

どうしても引く気は無いらしい。どうやら実力行使しか残っていないようだ。

「なあ、ＩＳ学園てのはどんな学園だ？」

「え？」

いきなり当たり前のことを聞かれたセシリアは目を点にしている。が、すぐにその意図を察したようだ。

「そうですわね。大なり小なりそのようなことを解決するなら……”決闘”ですわ！！」

今まで溜めていたかのように思いっきり指差された。若干引いたが、こっちの土俵に乗ってくれた。

「ああ、いいぜ。あんたが勝ったら洗いざらい話す。質問に答えずにな。俺が勝ったなら……俺の言うことを一つ、聞いてもらう。それで良いな？」

「もちろんですわ。まあ、ワタクシが負けるなど、万に一つも無いでしょうけど」

「何時にする？」

「勿論、今日の放課後ですわ。今なら撤回できますわよ？」

フン、と自信満々に勝ち誇るセシリア。何処にそんな自身があるんだか……だが、『自分の吐いた唾は戻らない』が『天に唾吐く行為』ではない。こっちだって勝敗がわかる戦いは挑まない。

「何言ってンだ？こっちだって勝つ気はあるんだぜ？」

そう。戦いは”戦う”だけではない。

「そうですか。こちらとて負ける気は毛頭ございませんもの」

”戦いたい”だけでもない。

「それじゃあ……」

”負けない”でもない。

「でしたら……」

あるのは、ただ一つ。

『勝負！！！』

”勝ちたい”

第2話　At Moment（後書き）

すみません。

本当にすみません。（T＿T）

ほぼ終盤がBLEACHからの引用です。

次はバトルかぁ……どう書こうかな？

感想お待ちしております。

第3話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ（前書き）

天を仰ぎ、地を背に、空を漂う。

其処は我が縄張りなり。

天の神は言う。だが、俺は逆らう。

何故なら空は鳥のものでもなければ、人のものでもなく、

ましてや神のものではない。

空はただのモノではなく、憧れのものなのだ。

第3話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ

その日の放課後、第３アリーナ。

交差するように配されたカタパルトのピットに三つの影がある。

一夏、篠ノ之、一誠の三人である。

何故ここにいるのか、と二人から聞かれた一誠はあの休み時間の経緯を話した。すると篠ノ之が、

「お前はまともだと思っていたが、ここまで馬鹿だとはな…別の意味で驚きだ」

呆れてモノも言えぬ、という感じで腕を組んでそっぽを向く。不快感丸出しですよ箒サン？

「そう言うなよ箒。やるのは俺じゃないがワクワクするぜ。どんなＩＳ使うんだ？」

「その事なんだが……」

子供のように無邪気な一夏を止めるように、一誠が言いよどむ。篠ノ之も「どうした？」と表情で返す。

自分が言い出した以上は実行しなければ、彼等の人生の先輩とは言えない。だが、

「この機体はちょっとクセが強い機体でな。こいつを見ても、笑わずに、目をそらさずにみていてくれ」

そういうとズボンのポケットから”ある物”を取り出す。一誠の

手のひら程の大きさの五角形のストラップに×印のような模様がある。そして、そのままカタパルトの先まで歩いていった。

「って…おい！！」

「何処へ行く？！」

一夏と篠ノ之の静止を聞かず、セシリアが見える位置まで歩いていく。そして……

「やっと来ましたわね。まさかＩＳも無しで戦おう、とでも？」

セシリアを見上げる。決意（たたかい）の眼差しで。

「あんなトコで立ち止まって…何する気だ？あいつ」

『織斑、篠ノ之。こちらへ来い』

後ろを見上げると、管制室から千冬が顔を出していた。思いっきり楽しそうな表情で。

『特等席で見せてやる』

その顔を見た一夏が察した。あの顔は自分の思い通りになった時の顔だと。

管制室に入ると、赤い証明に照らされた室内に千冬と真耶がいた。真耶はオペレーター席に、千冬はその斜め後ろに立ってモニターを見上げている。

「さて、あいつの初戦はどんなものになるのやら」

今入ってきたばかりの二人に問いかけるわけでもなく、ただモニターに映る一誠だけを見据えていた。

「……さて、始めるか」

俺は待機状態のＩＳを前に突き出す。そして突き出した右腕を支えるように左手を添える。

「行くぜ！」

待機状態のＩＳから何かが漏れ出る。得体の知れない黒い奔流が俺を包む。何も見えない”真っ黒”。

漆黒と言えばいいのだろうか。だが、俺のＩＳにそんな格好良い言葉は要らない。

全てが見えなくなるほどのただの”黒”でいい。

どれぐらい経ったか、黒の奔流は衰えることなくカタパルト内部を黒く覆いつくしている。

驚きつつもイラついているセシリアには何が起こっているのかが全く解らない。

（何時までこんなものを……これだから男というのは…）

そうめぐらせた瞬間、

―――敵ＩＳ熱源確認。１２時の方向に上昇。

セシリアはウインドウの表示を見て構えを直す。いくらＩＳ同士の戦闘でも相手は未知数。スペックは解っててもそんなものは役に立たない。が、その考えはすぐに吹き飛んだ。

あの黒い渦から”何かが”出てきたのだ。まるで黒い膜を突き破るかのように。そしてそれがセシリアと同じ高さで止まったところで、彼女の顔が驚愕に変わる。

「な……何ですの？そのＩＳは…」

一誠の姿を見たセシリアはそれしか言えなくなった。何せ目の前の彼は服しか纏っていなかったのだ。

が、ちゃんと装甲はある。

肩当のように服に密着している装甲もあるし、前腕部は脚部スラスターにあわせて延長されているし、装甲とよべるものはあった。だが、それよりもいままでのＩＳと全く違う特徴が見て取れた。

ウイングスラスターが、無い。

通常、姿勢制御の補助や加速性能、武装の反動制御等のためのウイングスラスターを装備していないのだ。

そんなものがＩＳであるわけがない。立っているのがやっとの機体バランスと言っても過言ではない。更に言えば、武装は細身の日本刀一本のみ。しかもＩＳという戦闘兵器を斬れるのか不安な程の細さである。初見でのセシリアの一言目は、

「そんなアンバランスな…しかも、その申し訳程度の武装で勝てるとでも？」

完全に見下していた。

そうしなければ、相手に呑まれる。そうしなければいけない、と彼女の直感が告げていた。

が、予想に反して一誠から出てきた答えは意外なものだった。

「その申し訳程度の相手にお前は負けるんだぜ？屈辱だろ？」

「…っ！！どうやら蜂の巣がご所望のようですわね？」

主兵装『スターライトＭｋ－？』を構え、ロックオンする。だが、それより先に気付いたのはプライベート・チャンネルから送信されてくる一誠の声だった。

「構えを解くな」

「……っ！？」

「動揺もするな。臆するな。集中力を切らすな」

一誠は未だに構えていない。まるでそれが構えであるように。

「そして…敵から目を離すな」

その言葉と共に、跳ねる様にセシリアに急接近する。

「っ！！」

反射的に引き金を引いたセシリアから放たれた青い光と、

「…はあああぁっ！！」

一誠が振るった黒い斬撃が、

轟音とともに、ぶつかり合った。

第3話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ（後書き）

バトルになってないし！！

プロット作成しないと、まともに書けない自分に失望中。

こんなでも見てくれる人には感謝の一言を送ります。

感想お待ちしております。

第４話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ　２（前書き）

これは、夢じゃない。

これは、自分ではない。

これは、何かの間違いだ。

だが、現実は夢でも現でもない。

それでも……『否定』は人を縛る。

第４話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ　２

～第３アリーナ・管制室～

「あれが……黒崎の、ＩＳ……」

千冬を除いたその場の全員が、一様に驚きの表情を見せる。確かに既存のＩＳの規格を逸脱しているとはいえ、冷静に彼の戦闘スタイルを見て取るのは、今は難しい。幸いなことに観客席には一組の生徒のみしかいない。何故か。理由は単純。内輪揉めに他のクラスを巻き込むわけにはいかない、という建前で、千冬は他の生徒が観戦するのを防いでいたのだ。

「あれが奴のＩＳだ。奴は『無明』と呼んでいるが……ただの愛称だ、と言われたよ」

子供の悪戯にあったように「仕方ない奴だ」という表情。
そこにスペックデータを閲覧していた真耶が驚きの声を上げる。

「あんな兵装…しかも軽量機で他のＩＳよりも防御力が高い」

そのスペックデータには打鉄の基本スペックとの比較が表示されているが、打鉄よりも防御力が約４０％程高いのだ。本来の軽量機は、防御力を犠牲にしてスピードで攪乱、複数の攻撃によって蓄積ダメージを与える、所謂『手数勝負』なのだが、その防御力を損なうことなく逆に防御力を上げての軽量機として完成されたのが……

『黒崎　一誠』のＩＳ……『無明』

「……だが、所詮はただの試作機止まり。あんなピーキーな機体が量産されてたまるか…だが、奴の『無明』には試験的に搭載されているシステムが二つある」

そう。『軽量機にして高防御力』……この矛盾を解消するシステムがある。それは……

「一つ目は、あの兵装での防御力の向上……その理由は、あのＩＳの『誘発式防御システム』だ。

これは通常のＩＳのＳ．Ｅでも実装出来るほどの高水準でもある……。

通常、Ｓ．Ｅは常時展開され続けている。これは敵からのダメージ、加速時の空気圧、さらには姿勢制御やＡＭＢＡＣ機能によるユーザーの身体への負荷の緩和等さまざまな事象から守り続けている。ただし、使った分だけ消費するのは当たり前で、徐々に０になっていくものだ。更に言うと、攻撃にも使用しているのだから更に燃費が悪い。そこで考え出されたのが、『誘発式防御システム』だ。

これはＳ．Ｅと自らの間にある空間を極小サイズまでに圧縮することで、Ｓ．Ｅを『纏う』ようにして戦闘できる。更に、例えダメージを受けようとも、その部分だけにＳ．Ｅを瞬間的に集中させることで、稼動効率は極端に上がる。これは『ラファール・リバイヴ』では２０％、『打鉄』では１８％もの運用時間の向上が見られた」

早い話が、Ｓ．Ｅを『バリアー』の役割から、目に見えない『鎧』にレヴェルが上がった、という事だ。常識的には鎧ならば重くなり、その重量分だけ動きが遅くなるのに、逆に動きやすくなった。とい

う、一誠のＩＳの矛盾を解消するための大きなアドバンテージとなる。

「二つ目は……一体どんなシステムを…？」

「それは教えてはくれなかったよ。あいつからは『教えたら貴女は絶対にこのＩＳを使わせないだろうから』と言われた。ただし、それは単一仕様能力（ワンオフアビリティー）であることは聞いている」

疑問符だらけの三人は、ただただモニターに視線を戻すしかなかった。

「そら。そろそろ終わるぞ」

ギャリン……ッ！！！

何合目かの鍔迫り合いも、滑るように避ける。

既に主兵装『スターライトＭｋ－？』も破壊し、俺の独壇場に近い戦いだった。彼女もＢＴ（ブルーティアーズ）を使って距離を取りつつ、防御にまわっている。しかも一度目の砲撃直後から即座に主兵装を破壊したのだ。優位に立てなくなった彼女はその先は防戦一方。しかも不慣れな近接戦闘だけでの防御など後数分で終わってしまう。

「何故ですの？ワタクシのＳ．Ｅは後１６２……なのに、何故……あの方はあんなに動けますの？」

苦虫を噛んだような表情を向けるが、あえて視線を合わせない。何故なら……

「こんなモンかよ……代表候補生」

まるで玩具に飽きた子供のように興味すらなくなったのだ。その言葉を聞いたセシリアは憤慨する。

「何を…解りきったかのような言葉……貴方に、貴方にワタクシの何が解るというのですかっ！！？」

そんなありきたりな言葉に溜息をつき、地上に降りる。確かに、何も解らないさ。アンタの事なんて何一つ知らないし、聞いたことも無い。

土煙を上げ、着地するとこの戦いの最初に見せた決意（たたかい）の眼を向ける。

「何も知らないさ……アンタが…君が何も教えてくれないから」

「…っ！？」

「君は自分の強さに絶対的な自信があるようだけど……誰もが君のように強くも自信も無い」

その言葉にセシリアは自らの過去を反芻する。

両親が死んだこと…

二度と何も失わないように努力を続けたこと…

そして、代表候補生に選抜されたこと…

この15年間の記憶を僅か数秒で思い出した。

「君は高みへと登りつめた。けど……その天辺は恐ろしいぐらい不安定な足場だったろ？自分の力だけで頂点に立った瞬間、誰にも助けを求められない程に……だから、精一杯の虚勢でそれを隠してた……違うか？」

君は…過去の『俺』だ。境遇は違えど、誰にも助けを求められなかった自分に。それを断ち切るかのように黒い日本刀（ざんげつ）の切っ先を彼女に向ける。

「君の暗い…たった独りだけだった過去を……俺が……背負う。これが最後の一撃だ」

全ては君を『助ける』ため……君に『勝つ』のではなく、過去の俺（セシリア）を断ち切るための一撃。

手首を支えるように低く構え、”力”を振り絞る。黒いエネルギーが鍔から柄へと登っていく。さながら、片翼の悪魔の黒い羽根のように。レギュレーターが振り切れる寸前で彼女にプライベート・チャンネルを接続する。

「……覚えてるか？俺が勝ったら、俺の言うことを一つ聞くって……」

「…はい…」

振り絞るかのようなか細い声での返事。彼女自身が過去という鎖を砕くのを拒んでいるようだった。

「……俺が勝ったら、セシリアの笑顔を見せてほしい。これから先も、ずっと……心からの笑顔を」

「…もう…見せていますわ……」

涙で濡れた、それでいて晴れやかな……笑顔。それを見せられたら…やらなきゃ、戦士（おとこ）じゃない！

―――単一仕様能力（ワンオフアビリティー）：死神（ソウル・リーパー）、発動。

ウインドウの表示と同時に俺の足元を中心に黒いエネルギーが円を描く。それを上空に逃がすかのように上段の構えを取る。切っ先全てがエネルギーに包まれると、アリーナ全体が揺れ始める。

俺が、助ける――――

「月牙……」

俺が、必ず――――

助ける！！

「天衝ォ！！！！！」

そのエネルギーを、セシリアに向けて振り抜く。恐らくセシリアの視界全てが真っ黒に染まっているだろう。だが、当のセシリアには見えていない。

何故なら、そのエネルギーを全て受け止めるかのように…受け入れるかのように……

爆音と共に勝負は決した。

『勝者――――黒崎一誠』

第４話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ　２（後書き）

何やかんやで第４話です。

やっぱバトル描写も上手く書けないな…いっそ修行の旅に！！↑

嘘です

感想お待ちしております。

閑話休題　Ｉｍａｇｅ（前書き）

ここまでの登場キャラを表現するような曲を選んでみました。

これ違うンじゃね？と思ったら、ご指摘等お願い致します。

閑話休題　Ｉｍａｇｅ

織斑一夏：明日への道～Ｇｏｉｎｇ　Ｍｙ　Ｗａｙ～　Ｂｙ　Ｍａｓａａｋｉ　Ｅｎｄｏｈ
これはもうこれしかない、と。イメージではなく原作の動向を考えた結果こうなりました。
頭弱いのはちょっと悲しいですけど（^＿^；）

篠ノ之箒：Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｍｉｎｄ　Ｂｙ　Ｎａｎａ　Ｍｉｚｕｋｉ
隠そうとしても隠し切れない女性らしさ、愛らしさとは逆なら如何だろうか？と。
専用機持ち始めてから変わり始めてますけどね。

セシリア・オルコット：Ｒｙｕｕｓｅｉ　Ｌｏｖｅｒｓ　Ｂｙ　ＪＡＭ　Ｐｒｏｊｅｃｔ
蒼雫（ブルー・ティアーズ）と相まって良いのではないでしょうか？
軸ブレ過ぎはご愛嬌、ということで。

凰鈴音：じょいふる　Ｂｙ　Ｉｋｉｍｏｎｏｇａｋａｒｉ
活発さを表わすならコレ、かな？
人によってはウザったいかもね。この娘の性格は。

織斑千冬：Ｆｒｉｅｎｄｓ　Ｂｙ　Ｓｔｅｐｈａｎｙ
曲名とは違うけど、大切なものを護る姿勢は憧れます。
皆ブラコンって言うけど、家庭の事情を考えるとこうなりませんか？

山田真耶：Ｃｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ　Ｂｙ　ＡＡＡ　Ｄｅｎ－Ｏ　ｆｏｒｍ
曲調と彼女の性格からこんな感じ？
あのスタイル反則……ですよね？

ついでに、

黒崎一誠：Ｎｏ．１　Ｂｙ　ＵＶＥＲｗｏｒｌｄ
一つにまとめようとする姿勢を出したくて……すみません。
次からはオリジナリティを追求したいですね。

閑話休題　Ｉｍａｇｅ（後書き）

以上です。

感想お待ちしております。

第5話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ　３（前書き）

太陽が昇る。

空は青く、雲を白く照らす。

太陽が沈む。

空は黒く、雲を灰に染める。

それは必然。しかし、常にそうとは限らない。

空も、そして人の心も。

第5話　Black　Impact　3

一週間前、ＩＳ学園内

いつもの『打鉄』を渡させると思い、ピットへ向かう。が、その途中整備士に呼び止められ、ピットとは逆の方向へ連れて行かれる。向かったのは、ＩＳの格納スペース。

中には訓練で使用される『ラファール・リバイヴ』や『打鉄』が格納されているが、その中に異様に小さいＩＳが眠るように『主』を待っていた。黒い布に包まれていたＩＳ（それ）は何故か懐かしく、それでいて小さいながらも力強さを感じた。

「あの……コイツは？」

整備士がハンドライトで照らすと、それは、確信に変わる。脚部を布に包んだソレは腕部装甲を交差させるようにしている待機状態で、本当に『眠っている』かのようだった。

「コレが、今日から君が動かすＩＳだ。……名前はまだ無いけどね」

手に触れなくても解る。コイツが……俺を待っていた。俺を…。その場で、俺はソイツに向けて手をかざす。すると……、

ガシャッ…！

腕部装甲が俺の掌に触れる。早く動かしてくれ、とせがむ様に。

「馬鹿な……触れなければ反応しない。ましてや触れてもいないのに……」

「大丈夫ッスよ。コイツは……完成してから、ずっと待ってたみたいなンで」

まるで意思があるかのように、ＩＳが立ち上がる。

「さぁ……今日から、暴れまわるぜ！！覚悟しろよ？」

コレで……俺は、俺の周りの常識を……打ち破ってやる！

～ＩＳ学園・第３アリーナ～

アリーナ内にアナウンスが響く。

煙は未だに晴れることなく、ただただそこを漂うかのごとく。

流石に代表候補に譲渡されているＩＳを完膚なきまでに破壊するのは、ちょっと気が引けたけど……やっぱり、やりすぎたかな？

すると、煙の中からあるモノが墜ちてきた。いや、正確にはモノではなく、人だ。

「チッ…！」

それがセシリアであるのに気付くのは刹那ほどだった。落下予想地点がウインドウに表示されると、そこまで『たった一歩』で跳躍する。放物線を描いて辿り着くと、セシリアを抱きとめる。ホッとするのもつかの間、慣性の法則を破ることは出来ない。なぜなら視線の先にはアリーナのコンクリートフェンスだった。
反転して、地面に刃を突き立てると、梃子の原理で着地する。だが、安堵よりも先に黄色い声がアリーナを支配する。

「カッコイイイィィィッ！！！！」

「私もああいう風にされたぁ～い！」

「新聞部！！！写真抑えて！！焼き増しもよろしく」

何つーか、流石年頃の女子高生…だけど少しはクラスメイト心配しろよ？
眠るように気絶しているセシリアに今度こそ安堵する。まぁ、護れただけでもめっけモン、かな？

翌日、学内新聞にこんな一面が掲載された。
『セシリアＶＳ転校生、転校生の勝利に終わるもその姿は姫君を護る黒衣の騎士（ナイト）！！』
勿論ビリビリに破いてやった。

その後、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』が開催された。何でも俺とセシリアの決闘の翌日が、クラス代表を決める試合だったらしい。何か、無駄にタイミング悪いな…俺。しかし、その試合の朝に織斑先生にセシリアがこの試合を棄権すると言い出したのだ。それには織斑先生も難色を示したが、先の決闘でのダメージレベルを考えても今日は無理だ、ということで自動的に一夏がクラス代表に。その後、折角の一夏専用機『白式』のお披露目を無駄にされたことで、先生からキッツ～～イ御指導がありましたとさ。
更に数日後、俺と一夏の試合の日程を作ると言い出したのだ。気が乗らないが、アイツの訓練がてら丁度いい、か。

今はそのパーティーの真っ最中。俺はといえば少し離れた席で一

人で飲み物に口をつけている。あんまり騒がしいのは好きじゃないし、先日のことがあるからな。空になったグラスに飲み物を新しく入れようと席を立つと、そこにはセシリアがいた。二人分の飲み物を持って。

「ご一緒して、頂けますか？」

肩の高さまで飲み物を持ち上げるとおどけたような笑顔で誘ってきた。それぐらいまで回復すれば大丈夫そうだな。

「是非に……エスコートさせていただきます。Ｍｓ．オルコット」

小さく会釈するとセシリアが席に着く。俺の隣に。

飲み物を渡されると、口につけることもなく先日のことを切り出された。

「決闘の際は……申し訳ありませんでした。あの時は頭に血が昇っていた、というか…何というか……」

何だか歯切れが悪い…やっぱり自分の態度のことが気になっているのだろうか。性格から考えるとあと一言足りないようだ。

「……あの、さ」

「はっ…はいっ！？」

「あれは……あんま気にすンな。そっちの挑発に乗った俺も悪いんだし…」

「…ですが…」

やっぱり歯切れが悪い。さっきよりも表情が曇っている。というより、落ち込んでる風にも見える。

このままじゃあ禅問答だ。

吹っ切るように、セシリアの頭を……叩く。

ハイ？というような顔。面食らったような表情の後、涙目に……逆効果か？

「落ち込んでる時に…ソレはどうかと思いますが？」

やはり逆効果だった。何か上手くいかないぞ……落ち着け、俺。

「いや、あまり深く考えるな、というか……違うな。俺はただ、皆が……セシリアがＩＳ（ココ）学園で笑って過ごせるようにしたいだけなんだ」

「……」

口をつけることなかったグラスの縁をなぞる。自分がしたかった生活を暗くさせないために、そうしたかった。

「確かに、今は女尊男卑の世界に染まってる……だけど、今だけは…ココにいる間だけは、ソレを忘れた生活をしてほしい。ココは学校だ。皆仲良くなんてすぐには無理かもしれないが、皆がそうなってほしいと……俺は思ってる」

「……」

ここに来てからずっと考えていた事を口にする。こんなに年の離れた少年少女と寮生活を含めて過ごしていくのに何が必要なのか。学校生活には、いがみ合いや喧嘩はあるかもしれない。誰かが気に食わないというのも出てくる。正直なところ、それだけの生活はしてほしくないから……。

「それには……貴方は入っていませんの？」

「俺は良いんだ……この先の未来にはここで育った皆が…笑って過ごすことができるようにしたいんだ……俺が”教師”ではなく、”生徒”としてきた意味は…そうなんじゃねぇかって」

「それは変えることは出来ないんですの？貴方がそれでは学園生活に張りがない、といいますか……」

それ以降、俺もセシリアも黙ってしまう。後ろの喧騒とは逆にこちらは重苦しい。ただ聞こえてくるのは一夏への質問ばかりで、当の本人も何を答えていいのか四苦八苦しているようだ。

時間にしてどれくらいだろうか。とても長く感じる。その沈黙を

破ったのは、セシリアだった。

「では、ワタクシが…貴方がより良き学園生活を送れるように致しますわ！」

そう言って立ち上がると、彼女も自分に言い聞かせるように決意を示す。かつて織斑先生に向けた声（けつい）のように。

「何があってもそれを曲げないって覚悟……あるか？」

「当たり前ですわ。それに……」

後ろを向くと、その喧騒の真ん中にいる彼（いちか）に視線を向ける。

「貴方の学園生活に張りがあるお人がそこにいるではないですか？」

「……」

そうだな…確かに一夏（アイツ）と同じ場所なら…退屈しないな。

席から立ち上がると、セシリアと眼を合わせる。向こうも決意ある顔で見据えている。

「そういやぁ……自己紹介がまだだったな。俺は黒崎……黒崎一誠だ」

「イギリス国代表候補生、セシリア・オルコット。セシリアとお呼び下さい……一誠さん」

堅く、堅く握手を交わす。これからの生活を間違ったモノにしないためにも…こいつらと同じ場所なら必ず出来る。

ＩＳ（ココ）学園なら……楽しくできそうだ。

「約束……だな。セシリアも、笑顔でいれるように…な」

「……はいっ」

真っ直ぐな優しい笑顔と…

真っ直ぐで一途な決意が……

今、重なった…。

第5話　Ｂｌａｃｋ　Ｉｍｐａｃｔ　３（後書き）

この終わり方は、ｌｏｖｅ的な終わり方ではないです。

まだだぁ～～れも出てきてないですから。

感想お待ちしております。

第６話　Ｒｏｏｍ　Ｍａｔｅ（前書き）

誰かと一緒にいる空間。

安らぎもあれど、諍いもある。

だけど、その誰かを完全には憎めない。

理由はただ一つ。

それは安らげる人であること。

第6話　Room　Mate

４月も半ばに入った頃、

俺と一夏の試合も近くなった頃の放課後、山田先生が教室に顔を出した。一夏に座学を教えていたので、向かい合う形の俺達を見て、顔を真っ赤にしている。この先生も、よくＩＳ(ココ)学園に入れたよな……。

「またもやお引っ越しです」

だから先生？主語無しで話すの止めませんか？

冷静なツッコミを抑えるかのように冷静に返事をする。

「引っ越しって……誰のですか？」

そう言って立ち上がると、山田先生の顔が更に赤くなる。この人……男の人に免疫無いんだなぁ。からかってみたいけど、後で織(お)斑先生(に)が来そうだし。

「えっと、黒崎さんのお引っ越しです」

「え？けど俺って年齢の都合上からまだ先送りって聞きましたけど…」

まがりなりにも二十歳。自立してるし、食べるところも住むとこ

ろも困らない。が、先生は言うには一応学園の生徒だし、社会人ではあるが寮生活には多少なりとも慣れていただかないと……ということらしい。しかも、織斑先生が私物など着替え、その他諸々も寮に運んできたらしい。人のプライバシーを何だと思ってるんだか……。

「まぁ…決まったモンはしょうがないとして、部屋は何処ッスか？」

頭を掻いて呆れるが、話がトントン拍子過ぎる。何かあると思い意を決して切り出してみる。

「ハイ、一応相部屋になる人にも了解を得ているので、後はその人に聞いて下さい。これが部屋の鍵です。コレ一つしかないので失くさないでくださいね？」

部屋の番号は……後で見るとして、一夏に今日はここまで、と伝えて教室を出る。

「おい一誠。鞄は？持っていかないのか？」

「持っていかねぇよ。盗まれるようなモノは大して無いし、第一荷物が寮にあるってことは、荷解きしなきゃいけねぇしな」

振り向かずに手を振って教室を後にすると、案内表示にしたがって寮に向かう。

@@@@〜@@@@

「ハァ……何故こうまで上手くいきませんの？」

ワタクシは今日起きたことを思い出してみる。今朝教室に入れば、一夏さん、篠ノ之さん、一誠さんが談笑していて、挨拶したはしたが、あまり会話に入れず…休み時間になれば、一誠さんは一夏さんに勉強を教えたり、お昼には同席できましても、あまり会話らしい会話が出来ず食堂を後にし…放課後は今日の復習ということで一夏さんと教室で居残り。しかも今は日が沈みかけていて、一夏さんはまだ寮には戻らず。

「一誠さんは女性には興味がないのでしょうか？女性としては少し自信を無くしますわ」

日が暮れる。茜色に染まる外の景色に見とれていると、ノックが聞こえる。珍しくノックされて少しだけビックリした。相部屋の人以外は誰もお客様はいらっしゃらないのに…

「はい……どちら様でしょう？」

ワクワクするのを抑えながら返事をするも、何も返ってこない。誰かの悪戯でしょうか？もう一度返事をしようとすると、外から意外な人の声がした。

「えっと……黒崎、ですけど」

@@@@〜@@@@

「案内にしたがって来たはいいけど……いくらなんでも近すぎるだろうが…」

距離にして５０ｍ……本当に近い。近過ぎる。教室を去り際に山田先生が『迷わないようにして下さいね〜？』という言葉を頂いたが、この際言おう。どんな方向音痴でも迷うほうがおかしい。

「着いちまったもんは、仕方ねぇか…」

寮の大きさと案内の細かさに呆れながら寮に入る。

考えてみると、寮生活ってしたことないなぁ。高校だって自宅通学だったし、何処かで晩飯っつったって買い食いレベルでしかお世話になってない。コンビニ弁当の晩飯なんて両手じゃ数えられないくらい。あ、食堂の場所はわかるか、この前行ったし。

「……」

鍵の番号を見ると、数字の後に何かの記号が書いてある。これって何か意味があるんだろうか？首を傾げながらその部屋に行ってみると、

「一誠さ……は興味な……か？……自信を…」

何だか訳の分からない言葉が聞こえてくる。何だか馬鹿にされているようでイラッとする。ちょっと強めのノックで脅してやるか。そ

のノックに気付いたのか慌てたように返事が返ってきた。

「はい……どちら様でしょう？」

……え？今の声は……

部屋用の名札には『セシリア・オルコット』。ふ～ん、セシリアか…セシリア！？

「えっと……黒崎、ですけど」

返事はしたが、ドアを開けてくれる気配はない。何か物音は聞こえるけど…気には留めない。女の子だって身だしなみは大事にしたいでしょ？聞き耳はたてていない。だって、嫌じゃないか？人として。

数分してからドアが開く。そこにはドレスのような私服を着たセシリアが立っていた。

「お待たせしました、一誠さん。今日はどういったご用件で？」

顔がほんのり赤い。何か焦っているようだが…身支度で急ぎすぎたか？

「あ、あぁ……用件っていうか、何ていうか……部屋に戻ってきた、っていうか」

「えっ……？もしかしてお部屋にある荷物は…」

「…多分、俺のだ」

ついに顔が真っ赤になるセシリア。人の顔ってあんなに真っ赤になるんだなぁ……って冷静に分析してる場合じゃない！！

「ということは…セシリアと、相部屋ってことか……それにしてもこの鍵、一体誰が持ってたんだ？」

キーホルダーを持ったまま、ぶら下げてみるとセシリアが首を傾げる。

「あら？それは先生方用の合鍵ではないでしょうか？非常時に備えて先生方が持っている鍵のはずですが…何故一誠さんがお持ちで？」

成程、ホテルでいうグランドマスターキーってやつか。山田先生、そんな大事な鍵渡すなよ。一応生徒だぜ？

「さぁ……それより立ち話もなんだし、部屋、入っていいか？」

「あっ…失礼いたしましたわ。それでは、どうぞ」

部屋に入ろうとするが、何かがおかしい。が、その違和感が解消されるとその場に立ち止まる。セシリアも？？が二乗で飛び回っている。一つ深呼吸すると、

「ただいま。セシリア」

「……っ！」

その言葉にセシリアが真っ赤になる。そんなに頻繁に真っ赤になると体温上がるぞ？

「お、お帰りなさいませ……一誠さん」

モジモジしながらも返事が返ってきたが、まだ顔が真っ赤なままだ。その仕草、男からすれば反則なんですけど……。まぁ、しばらくは我慢するか。

荷解き中、煙草が無いのに絶望した。寮にいる人全員が未成年だから仕方ないけど……。

第6話　Ｒｏｏｍ　Ｍａｔｅ（後書き）

山田先生、馬鹿にしすぎました。

ファンの皆様、申し訳……あぁ！止めて！石を投げないで！！

本当はシャルが出てくるまでは一人でも良かったんですが、一誠のヤニの都合上セシリア、ということで。

感想をお待ちしております。

第7話　White night VS Black Fang ［bigin

黒猫が踊る。

無邪気に、気のままに。

一人の男の眼に留まるも、踊り続ける。

まるで飼ってくれ、といわんばかりに。

第7話　White night VS Black Fang ［bigin

「五日後……ですか？」

クラス代表就任パーティーの翌日、織斑先生に呼び出された俺は職員室に呼び出された。思いっきり出席簿で叩かれた後なのでまだ頭が熱を持っているが、冷静に話を聞ける状態ではある。

「そうだ…いくらお前でも初心者相手では少々気が引けるだろうが、お前へのペナルティには十分だ」

まぁ…代表決定戦をフイにしたんだ。これぐらいは覚悟してたさ。軽い運動がてら訓練みたいにあしらえば上等だろう。何より…接近戦では教えられることが山ほどある。簡単に『白式』のスペックデータも閲覧済みだし。ちなみに織斑先生立会いの下だが。

「解りました、やりましょう。反省文よりかはマシですし…何より教えることが多分にあります」

「ほう…あんなピーキーな機体で教えることがあるのか？」

「簡単な戦闘訓練みたいなモノッスよ。難しい事は自分で応用利かせるようにしますから」

教える側の基本は、あえて例を実践し、応用はそれぞれ個々に理解させていくことだ。いきなり実践させると意外な事故や失敗で貴重な時間をフイにしてしまうからだ。だからこそ、一日の長である誰かが教えなければならない。

「後は、精神(メンタル)面の部分をちょっとばかり……」

「あまり虐めてやるなよ？あれでもナイーブでな」

「知ってます」

「……以上が寮内の大まかな説明ですが、何か聞きたいことはございますか？」

「いや…特にはねぇよ」

部屋に通され、荷解きを終えてからはセシリアの講義という名の説明を受けていた。いや、別に説明自体には不満は無いが、自分なりの解釈も含めた説明は最早講義に近い。セシリア…教師だけは絶対に目指すな。生徒が可哀想だ。

「では、丁度いい時間なので食事に参りましょう」

「いや…俺はいい。シャワーだけ浴びて寝るよ」

「ですが…食事はこの時間以外は出ませんわよ？」

寮内も含めて学園外での買い食いは厳禁である。学園の規則にも

バッチリ載っている。しかし……。

「今日はいい…セシリアだけでも行ってこいよ。俺は明日からのこともあるから」

そう、明日。明日は一夏との試合の前日。なのだが、大事な日の二日前辺りからは自分のメンタル面などを整理するために、あえて食事などをしないことにしている。そうすると自分の、ひいては相手への気持が鈍ってしまうから。これだけは変えられない。

それを伝えると、セシリアは大袈裟に肩で溜息を吐いた。

「わかりましたわ。何か考えがおありのようですし……では数日の間はワタクシだけで食事に行ってまいりますわ。楽しい学園生活のために」

「あぁ…悪ぃな。なんとか埋め合わせだけは考えておくよ」

「べ、別に見返りが欲しくて言っているわけではありませんわ」

顔を赤くして部屋を出て行くセシリア。何かマズい事言ったかな……とりあえずシャワー浴びるか。

その二日後、何と授業二時間分使ってＩＳの実技演習を行うこと

になった。何でも生徒にとっては待望の一夏の専用機のお披露目なので、コレぐらいのサービスはあってもいいだろう、という織斑先生談。

それは良いけど、承諾したとはいえほぼ巻き込まれた俺は罰ゲームに近いんですけど……。

「…何か言ったか？黒崎」

「いえっ！何でもありません」

そうだった……読心術みたいなのが使えるんだったな。

グラウンドに集まっているのは一組と二組の生徒。それに山田先生に織斑先生である。ちなみに先生方以外は全員スーツ着用である。俺も勿論着用済み。袖の無い着物のような上着に、下はハーフパンツの右足側に十字のラインが入っている。

「そういえば、一夏（アイツ）のＩＳって、最適化（フィッティング）と初期化（フォーマット）は終わってるんですか？」

「ああ、アイツの特訓の時間を使ってな。すぐに始められるぞ」

いらないお気遣いどうも、です。

「一夏、先に準備してろ。後で俺も行く」

「？……わかった。早く来いよ」

先にＩＳを展開して飛び立っていく一夏。あれが『白式』か。手にしている剣からすると接近戦主体の専用機、か。

「織斑先生。ちょっと…」

「？何だ？」

@@@@～@@@@

「？何やってンだ？あの二人」

遠目からは何やら相談してるみたいだけど、何か寒気が……二人揃って何か企んでるな。

「そんなの関係無い。真正面からぶつかってやる！」

気合を入れなおして構えると、千冬姉から通信がとんでくる。

「よし、では始めるぞ」

「え？だって、黒崎はまだ下に…」

はるか下では黒崎がまだ準備もしていない。やっぱり何か話し合ってたのは間違いない。

「質問も貴様の言い分も聞かん。さっさと構えろ。でないと……大怪我をするぞ？」

@@@@〜@@@@@

「やっぱり、慌ててやがンな……あいつ」

はるか上空にいる一夏を一瞥すると、山田先生が「皆さん下がってて下さ〜い」と何とも頼りない言葉が聞こえてくる。説得力ないぞ、山田先生。

まぁ、確かに危険だな。俺のＩＳの起動には大量のエネルギーが放出される。これはＳ．Ｅを最大圧縮、高密度にするために必要なんだとか。あんまり説明聞いてなかったし。

「さて……暴れるか」

先日とは違い、待機状態となっているストラップを真下、足元に向ける。起動するように思いっきり力を入れると、黒いエネルギーが渦を作る。まるで黒い竜巻である。地上にブラックホールが出来るとこうなるんじゃないんだろうか。

「それでは……」

織斑先生が片手を上げる。そろそろ始める頃合いか……いつまでも甘ちゃんみたいな面構えしてると……

「始め！！！」

痛い目見るぜ。

試合開始の合図とともにその竜巻から飛び出す。一夏へ向かって一直線に。

「っ！！！？」

開始僅か一秒で一夏の剣と交える。恐らく経験したことのない衝撃と相手の高速移動で頭の中はパニックだろうが……知ったことじゃない。

鍔迫り合いの中、一夏の腹に蹴りを入れると、その反動で後ろへと距離をとる。ある事を伝えることと…この姿を見せるために。

初めて俺の姿を確認した一夏の表情は…驚きと、恐怖に染まっていた。

「何だよ……ソレ」

距離にして１０ｍ。その先にいたのは、黒い装束を纏った……

髑髏の仮面を付けた男だった。

第7話　White night VS Black Fang　[biginning]

虚バージョンのＩＳ設定も考えてありますが、無茶苦茶感は拭えません。

感想お待ちしております。

第8話　Black is Shout　[My life is a……]

闇夜の中、僕は叫ぶ。

痛みを、絶望を、

命とは何かを。

その全てを知ったとき、

僕の心は、闇夜より深い闇が包む。

第8話　Black is Shout　[My liife is a……]

「あれが……黒崎君のＩＳ…」

「何か…前見た時より、怖い気がする」

『黒』と『白』の出会いを下から見ていた生徒から不安の声が聞こえる。

戦っている姿を見たことのあるものには、何だか護られているような大きな背中に見えたに違いない。だが、今見える黒いＩＳは安心感より恐怖心の方が強い。

恐らくは彼が付けている仮面のせいだろう。左側半分を爪痕のような模様があるのだ。ただそれだけの模様なのに、とても……怖く感じてしまう。

（何故……そのような姿をしていて、何も言わないのですか？）

胸に手を当てて、セシリアは悲しそうな表情をしている。確かに怖い。でも、何故そのような姿をして、何も言わず…ましてや自分を取り繕うのを一切しない彼に、不安とも言い切れぬ黒い感情が渦巻いていた。

（いつも笑って過ごせるような学園生活を望んでいた貴方が何故……？それが、貴方の本当の姿なのですか？……どちらが貴方なのですか？一誠さん）

それを口にすれば全てが壊れてしまうだろう言葉を飲み込む。流れそうな涙を堪えるように見据える。その黒装束の男、黒崎一誠（おもいびと）の

背中を。

「それが……お前のＩＳの本当の姿、ってやつか？」

搾り出すかのような一夏の声。そうか……お前も『怖い』んだな。その言葉に俺は何事も無かったかのように語りかける。

「そうだ、これが……『俺』だ」

冷静に、言葉を選んで答える。ただ、仮面を付けているせいか声がくぐもって聞こえるだろう。

「この仮面は相手のメンタル面を揺さぶるためだけじゃない。高速戦闘時に送られてくる膨大な量の情報を処理するために仮面型にしただけだ。模様は完全に俺の好みだけどな」

ユーザーにとっては、情報処理能力の向上のためのシステムかもしれないが、俺はコレが嫌いだ。コイツのおかげでどれだけの模擬戦相手が泣いてしまったことやら……。だけど…。

「今のお前になら、コレを付けても良いんじゃねぇか、って素直に思える」

「ああ、俺もお前の全力と……戦ってみたかった」

まぁ、俺が教えるのは『そこ』なんだけどな……。

「何があっても……恨みっこなしだぜ！！！」

ただ一歩を思いっきり…踏み出す。

その瞬発力は、従来の高速戦闘用とは比べ物にならない程。たかだか一歩で一夏の懐に飛び込んでいた。本当ならここで一撃与えれば終わりだろうが、そこで一瞬だけ止まる。あえて二歩目を踏み込み剣を振るう。ぶつかり合った衝撃の反動で後ろへ飛ばされそうだが踏ん張る。その反動を押し切る形で振り切るが、一夏は後ろへ体ごと飛ばされている。剣道有段者なら互いに振り切るぐらいはできるだろう。しかし、相手は剣道経験者であってもＩＳは初心者、しかもヨチヨチ歩きであろう男だ。

「……」

呆れるような溜息を堪え、完全に飛ばされかけている一夏の足を掴み下へ全力で投げる。これが通常のＩＳ、初心者の最大の欠点である。ウイングバインダーを駆使すれば、空気抵抗を調節して地表スレスレで姿勢制御するだろう。が、使わなかった場合、Ｓ．Ｅが守っているとはいえ一直線に地上に激突する。相手に飛ばされれば尚の事、どうにも出来ない。想像以上の風圧で姿勢制御が間に合わないだろう。下手をすれば、片手で数を数えている間にあの世行きだ。

だが、俺はあえて手を貸さない。全力を望んだ相手にそれは侮辱に等しい。心を鬼にして追撃にかかる。刀身に黒いエネルギーを纏わせて。

一一一単一仕様能力（ワンオフアビリティー）：死神（ソウル・リーパー）、発動。

ウインドウに表示されたのは、俺にとっての『諸刃の剣』。この黒いエネルギーを飛ばすことで、距離というアドバンテージを一気に無くすことが出来る。だが今はあえて飛ばさず刀身に纏わせたまま切りかかる。その時視界に入ったのは、姿勢制御に成功した一夏だった。そしてあろうことか一夏も切りかかってきている。

「おおおおおおおおおっ！！！！」

「はあああああぁぁぁぁぁぁっ！！」

ぶつかり合った衝撃で地上は土煙を上げ、火花はスパークに変わり、天へと昇る。振るうのが数瞬遅かった一夏は苦い表情で必死に押し返そうとしていた。だが微動だにせずＩＳの補助もある腕力ではビクともしない。

純粋な力と力のぶつかり合いの末、軍配は俺に上がる。

地表へエネルギーを逃がす、という形で。

クレーターのように陥没したグラウンドは未だに土煙が晴れず、中を確認できない。周囲の生徒もいつ出てくるのかハラハラしながらも、織斑先生だけは上空を見上げている。視線の先には気絶している一夏に肩を貸している俺だった。

「勝者……黒崎一誠！」

周りの生徒は何事かと周囲を見渡すが、事情が飲み込めているの

は篠ノ之とセシリア、織斑先生だった。

「……」

ただただ無言の俺は彼女達の方へ着地し、山田先生に一夏を医務室へ送らせようとしたが、先生が数歩手前で止まる。いつものように顔が赤くなるのではなく、逆に蒼白に近かった。

その視線は一夏ではなく、俺の『仮面』だった。しかも瞳孔以外は真っ黒な眼を山田先生に向けて。

これがこの仮面の副作用。膨大に送られてくる情報を処理しきれなくなるとユーザーの身体に顕著な身体異常が見られる。それが『これ』だ。

「一夏を……お願いします」

その仮面を黒い霧のように変え、手で拭うように消すと山田先生に一礼する。でも、山田先生はまだその表情のまま固まっている。

「黒崎、今の仮面は何だ？そのようなハイパーセンサーは聞いたことが無いぞ」

知らなかったことのように聞いてくる織斑先生。えと……一応先生も知ってるはず…あぁ、そういうことか。

「わかりました。話しましょう…特別講習ってことで」

自分の事を話すのはあまり好きじゃないが…仕方ないか。

第8話　Black is Shout　[My life is a……]

今までより短い気がする…。

文才、他の人より無いかなぁ？

感想お待ちしております。

第9話　Dance and Songs 〔A Beautiful v

声が聞こえる。

僕くも、それでいて優しい声が。

でも『今』は聞こえない。

それは、未来の自分への警告なのだから。

第9話　Dance and Songs ［A Beautiful v

「環境情報演算システム？」

大半の生徒から『仮面』についての質問が多かったために急遽始まった講義だが、その単語が出たと同時に首を傾げる娘がいた。まぁ、システムとしては聞いたことがないだろうな。

「簡単に言うと、自分、もしくは相手が起こしたアクションが現環境にどのような影響が及ぶかを処理するシステムだ。環境予測の方が正しいかもしれない。これを応用すると、相手の行動を先読みできるように設定できる」

要は『環境』を演算対象にしているのを『相手』に置き換えることで、システムの要求に頼らず行動が可能になる。ざっと噛み砕いて説明してもこんなもんか。

「だが、ハイパーセンサーの方が精度が上だろう。何故そんなシステムを使う？」

今まで黙って聞いていた織斑先生が口を開く。確かに慣れた人ならばハイパーセンサーからの情報だけでアクション出来るかもしれない。ただし、そうなるまでには膨大なまでの経験とＩＳの特性を十分に理解しなければならない。

「単体ならそっちが上だろうけど、このシステムの肝はハイパーセンサーと『併用』することなんです。ハイパーセンサーからの情報に上乗せする形で運用するとさっき言ったように『先読み』でき

るようになるんです」

こっちは『環境』、設定しだいでは相手の行動も含まれる。ハイパーセンサーは相手ありきの誘発情報だ。与えられる情報を瞬時に把握しそれを予測、自らが環境に与える情報を即座に拾い上げ、相手が次にどのように行動するか、この順を絶対に間違えなければ俄かエースが出来上がり。

「まぁ、仮面はオプションパーツって事で。ちなみに設定をいじれば仮面以外に変更できる」

それを聞いてホッとする娘がチラホラと。そんなに怖かったのか……感受性の高い年頃だから注意しないと。

「自分にとってはいいことずくめのシステムだけど、欠陥はある。与えられる情報は自らのアクション次第で増減する。遠距離砲撃タイプに載せれば演算対象は少ないけど、近接戦闘タイプでは対象が増大する。これは自らが『環境』に与える影響が強すぎるからだ」

S．Eも含めると、高速移動だけでも５００以上。これほどの情報が一気に頭に流れ込んできてウインドウに常時表示される。日常生活ではこれだけの数のちょっとした『環境の変化』には気付かないだろうが、これを使うとそんな些細な行動の影響が一遍に処理される。神経接続によってこれほどの情報を勝手にストップ出来ない。そうすると頭は情報だらけで飽和状態なってパンクするに決まってる。

「情報自体は止める事ができない。そうなるとユーザー自体にちょっとした身体異常が発生する。俺の場合は瞳孔以外は真っ黒になる。ここまでで理解できたかな？」

ほとんどの生徒が頷く中、セシリアだけは全く違う表情を浮かべていた。それは簡単に読み取ることが出来る。

「あ、ちなみに蒼雫（ブルー・ティアーズ）にはこのシステムは向いてないぞ」

まるで読心術のようにやってみせると、セシリアは顔を真っ赤にした。だって考えてることが丸分かりなんだけど。

「な……何故、でしょうか？先程申し上げたとおり遠距離タイプならばさほど負担はないようですが？」

「確かに砲撃仕様なら演算処理自体は問題ない。けど問題はその誘導システムなんだ」

俺の言葉にセシリアはハッと表情を曇らせる。

確かに遠距離攻撃タイプならば情報量は格段に少ない。だが、セシリアのＩＳには無線遠隔ユニットが搭載されている。一歩間違えれば遠隔ユニットも『環境』として計算され、情報量が近接戦闘タイプのざっと三倍ほどの量になる。

「一度でも遠隔ユニットを起動させると一瞬で頭がついてこれなくなる。それでも使う気はあるか？」

その言葉にセシリアはぐうの音も出ない。

自分の使ってるものに絶対の自信なんて誰もがあるわけじゃない。あるのは『使い方を絶対に間違えない』という『信念』だけだ。それはこの先教えていけば良い。今はまだ早い。

「今のことは頭の片隅にでも置いておいてくれ。こっからは自分

たちの授業が優先だ。俺からの講義は以上。後は織斑先生にバトンタッチ」

「分かった。区切りが良い時間なので、休憩を挟んでＩＳによる授業を再開する。予鈴が鳴ったらまたここにすぐ集合しろ」

その後授業は恙無く進み、一夏の目が覚めたのは昼休みになってからだった。

「あの……どちらへ行かれるのですか？」

昼休み。俺は一夏の目が覚めたということで医務室に向かっている。あの授業で伝え切れなかったことを伝えるために。手には簡単なサンドイッチ、コーヒーがトレーに乗っている。両方とも俺の昼飯になる予定だったものだ。

隣のセシリアも一夏が心配だったらしく、曇った表情のまま授業を受けていたが目が覚めたことを聞くとホッとした表情に戻った。

「ちょっと医務室に、な。一夏自身のことで話しがあるんだ」

「あくまでも怪我人ですのよ？傷に塩を塗りこむおつもり？」

「そこまで信用ないのかよ？ま、ちょっとした提案ってやつだ」

そう言うと、医務室のドアを空いている片手でノックする。返事の後にドアを開けると篠ノ之がいた。

やはり一夏の様子がきになっていたようだ。何だか邪魔されたような表情の後に席を離れると「では今日の放課後にな」という言葉と共に医務室を出ようとする。が、それを俺が片手で制すると所在無さげにどあの傍に背中を預ける。

「気分はどうだ？」

「少し寝たらスッキリしたよ。あんな負け方したのに」

「そうか……昼飯だ。簡単なのだが、食わないよりはいいだろ？」

トレーを渡すと、一夏はキョトンとしている。誰が作ったのかわからない顔してるな。

俺が作ったのを伝えると三人揃って「は？」と声を出して驚く。そんなに不器用な人間に見えるか？一応炊事関係は慣れてるぞ。

「それより、少し話しいいか？今日の試合についてだけど」

話を切り出すと一夏が俯く。まあ、あんな変な負け方した上に最後の方は記憶がないんだ。

「あの試合……あれでお前は何を感じた？」

「俺は…悔しいけど仕方ないか、って。専用機を持って、箒にも教えてもらっておきながらお前の相手をして、正直勝てたら嬉しいと思った。けど、現実はそんなに甘くはないんだな」

トレーを持つ手が震えている。悔しいのを抑えているのか、教えを請うておきながら全力を出せなかった自分が不甲斐ないと思っているのか。

「頭ではお前には歯が立たないことは解ってたけど、それでも『負けたくない』って気持ちが強かった……」

「『負けたくない』、か…」

「え？」

「『負けたくない』ってのは逃げだ。それは負けた後の言い訳だ。お前自身の言葉じゃない」

「……」

図星なのか、何も言い返せない一夏。何がしたかったのか、それは聞かない。だが、お前が『白式（ソイツ）』で何をするべきなのか。

「退けば老いるぞ。臆せば死ぬぞ」

俺の言葉に誰もが言葉を失い、俺以外の全員が俯いてしまう。これは深く取れば『逃げれば全てが衰える』とも取れる。篠ノ之はこの中で一番暗い顔をしている。心当たりはあるのだろうが、俺は一夏に向けてさらに言い放つ。

「戦って『負けない』のは誰だって出来る。何事にも『逃げて』いないから。だけど、戦って『勝つ』のはそれより難しい。解るな？」

この際、無言は肯定とさせてもらう。

「けど……『護る』は違う。勝敗に関係なく、親しい誰にも傷を負わせないことは『勝つ』ことよりも違う絆(もの)になる。お前には…それを教えたかった」

今までで一番暗い顔してるな…俺。この中じゃ完璧(チート)超人かもしれないけど、『外』に出れば何も出来ないただの『人』なんだ。出来ないことの方が多い。前までなら愛想笑いで受け流せるけど、ソレは出来ない。

だけど、『やれる』事はいくらでもある。

「お前はどうしたい？『負けない』のか？『勝ちたい』のか？それとも…」

立ち上がって問いただすかのように一夏に投げかける。

コイツも悩んでいるんだ。だったら選んだコイツのために何かしてやるのが……俺の役目だ。

「護りたい……俺は千冬姉も、箒も、俺に関わった全ての人を…護る」

真っ直ぐな瞳。恐らくはここで最初に口にしたであろう決意。それを曲げない強い『声(つよさ)』を聞いた。

ーーーあぁ…俺はソレが聞きたかったんだ。ーーー

「解った……だったら俺もお前を鍛えてやる」

その言葉に全員が驚く。何も知らされていなかったセシリアも二人と同じように驚いている。まぁ、伝えてなかったからな。

「鍛え方は違うかもしれないが、俺でも出来ることがあればやるつもりだ。何かあれば俺に話せ。何かなくても俺に話せ。三人共、良いな？」

俺も負けないように言い放つ。生徒として来たなら、おれにはコイツ等を支えるのが…俺の役目だ。

「良いのか？」

まるで初対面の人間みたいな事言ってくるな。だから頭弱いって言われるんだよ。

「何言ってんだ……友達（ダチ）だろ？」

さも当然のように言ってみせる。

「だったら改めて……俺は、織斑一夏だ。よろしくな」

一夏が握手を求めてくる。ついこの間俺がしたように。なら、俺なりの友好の印として……。

俺はその手を握ることなく…叩く。織斑先生…千冬さんに最初に会った時のように。

コレで、こいつの中の雨も止んだ気がした。

「俺は……一誠」

決意の顔ではなく、笑顔で応える。

「『黒崎　一誠』だ」

俺の、ＩＳ学園では二人目の『友人』が出来た。

第9話　Dance and Songs 〔A Beautiful vo

何事も平和に行きたいですけど、無理ですね。

読み方変えると喧嘩腰なんですよね。

感想お待ちしております。

第10話　The Cat ［Shall We Dance?］（前書き）

見つめて下さい。

僕を、私を。

その手で触れて、その唇で伝えて。

私への想いを。

でも、その心で感じないで下さい。

だって私は、アナタの中にしか存在しないのだから……

第10話　The Cat ［Shall We Dance？］

学園内・剣道場

「もう一歩、前に出れるはずだろう！？もっと強く踏み込んで来い！！」

「…ック！！」

日も暮れかけている放課後、篠ノ之と一夏の訓練にも熱が入っている。

あの日以来、一夏の訓練に対する姿勢が変わった。日頃からＩＳの基礎知識に頭を抱えている姿とは大違い、とは言えないが、一歩前へ出る姿勢が見て取れる。

しかし、全国大会優勝者にはやはり及ばず。

汗臭い面を取ると、汗だくの一夏の顔は悔しくも清々しい表情だ。やはりハッパをかけて正解だった。

「ふぅ……やっぱり箒には敵わないな。もう一歩前に出れれば良かったけど…」

「何度も懐に入られてたまるか。まだ精進が必要だな」

「何とも手厳しいお言葉……でも、これでＩＳを使っても一体何が変わるんだか……」

確かに疑問に思うだろうな。篠ノ之の訓練にあえて口出しせずに見

守っていたが、まぁ、怪我らしい怪我はしていない。精々筋肉痛にはなっているだろう。だけど、それでも物足りないような顔をしている一夏に、俺はタオルを放る。

「まずは試合形式での訓練で生身を鍛えていくのだ。使っているＩＳ（モノ）がＩＳ（モノ）だから、あえてこうしている」

「でも、何だかセシリアに悪い気がして……」

「それは俺から話しておいた」

二人の話に割り込む形で入っては見たが、一夏……その「何で？？」って顔はやめろ。

「アイツには次の日にＩＳの基礎知識…つまり座学をお前に教えるためにまとめをやってもらってる」

ここは本当だ。彼女曰く「できれば一夏さんの訓練の進み具合をこの眼で確かめてみたい」だそうだが、横槍が増えると後々面倒が増えるので遠慮してもらった。口実としては十分だ。

「そうか……遠距離タイプについて教えて欲しかったけど」

「お前にはまだ早い。やっていく上で教わったほうが効率が良い。何より……」

「何より？」

「竹刀で打たれまくってズタボロになったお前を見るのが楽しいからな」

「イジくるトコはそこかよ？！」

勢いで面を投げつけてくるが、首だけを動かして避ける。あれって軽いけど、結構硬くて痛いんだぞ？

まぁ、手元に何かあれば反撃してるが。

「だけど、解ったろ？自分の得手不得手が」

「そりゃあ、痛いほどに」

腕の痣を見る限り、言葉通りらしい。訓練を始める少し前に、千冬さんからマンツーマンの特訓があったようだが、それを含めると自分のＩＳ（ちから）を理解したようだった。

「今日はここまでにして、シャワー浴びて来い。篠ノ之、ちょっと良いか？」

「？……ああ、構わんが」

頭の上を？マークだらけにしている一夏はそそくさとシャワールームへ足を運ぶ。途中、腕をさすっていたが、明日あたりには綺麗な青痣が出来上がってるだろう。

二人だけになったところで俺が篠ノ之に話を切り出す。

「何か、あったのか？」

「……いや、別に、何も」

箒サン？言葉が途切れ途切れでも、『何かありましたよ～』って顔

してますよ？隠し事出来なそうだな、この娘。
その言葉を無視して話を続ける。
「何がどうした、までは聞かない。けど、何か悩んでいるのなら話してみろ。言ったよな？『何かあったら話してみろ。何もなくても話せ』って」
「それは……」
ほとんど尋問のような聞き方をして、やっと話してくれた。何の為の年上なんだか……。何でも、一夏の事で不安を抱えているようだ。あんな朴念仁によく惚れたよな？ある意味異性でも尊敬するぞ？
「そうだな……思い切って告白してみたらどうだ？」
「なっ……ななななっ！」
呂律が回らず、数歩後ずさる篠ノ之。大丈夫だよ、告白したらしたで取って食いはしないから。
「付き合え、でも何でも言ってみれば、自分の目標が出来ると思うけどな。お前はどうしたいんだ？篠ノ之。」
「わ、私は……別に」
「ふぅ～ん…セシリアと一夏がくっついてもなにも言わないんだな？」
「そっ、それは駄目だ！！！」

そんな耳元で大声出さんでも…だけど、年頃ならそれぐらいは慌てるだろうな。何せ、久々に会った幼馴染だったら尚更、な。

「だったら徹底的に攻めてみろよ、自分なりに。剣道みたいに一本取るだけじゃ終わらないんだぜ？恋愛ってのは」

「だが……」

「自分は女らしくない、ってか」

「そうだ…剣道だけ、スポーツだけをやってきた私を、一夏は女として見てくれるのだろうか…」

結局そこに行き着くわけだ。いくらスポーツ選手でも、ユニホームや道着を脱げば一人の女性だ。恋愛したいのも解るし、結婚もしたいだろう。

だが、今目の前に居るのは十五の、今までスポーツに身を投じ続けてきた女の子だ。他人から見て十人十色の答えはあろうとも、共通して言えるのは『可愛い女の子』だ。自信がないにも程がある。

「なら、自分で答えを探してみな。時間がかかったっていい、振り向いてくれなくてもいい。自分なりの答えと、自分なりの言葉で相手に伝えればそれで良いじゃねぇか」

「私なりの……言葉…」

「それに…恋愛事は、ちょっと苦手だな。どういう答え方がいいのか、あまり思い浮かばないし」

相談事は、相手に話す時点で解決している、って聞くけどアレは

間違いだな。相談される方は、相手の言葉を客観的に捉えることが正しいとは言えない。
あくまで相談する人の立場を考えて聞かなければ相談としては成立しない。それを無視して解決したというのならば、はっきり言って相談される側の自己満足、悪く言うと保身にしかならない。面倒事を避ける人間は絶対にこの言葉を使うだろう。
はっきり言って、俺もこの部類に入るかもしれない。けど、役に立てるなら、という自己満足ではなく義務感でもなく、『この娘が泣くようなことは絶対に言いたくない』という本心からだ。
恋愛相談は流石に俺の専門外だけどな。
「解った。なら私は私の言葉で、一夏にぶつけてみる。なに、伊達に幼馴染として過ごしてきたわけじゃないからな」
先程とはうってかわって、すごく自信に溢れた表情をしている。
照れ隠しかどうかは解らないが。
でも、何かを心に決めたのは確かだ。
「それでいい。そろそろ一夏もシャワーぐらい終わっただろう…待ちくたびれてるんじゃないか？」
時計を見ると、一夏が剣道場を出てから既に二十分程経過していた。我に返ったように篠ノ之も慌てながら防具を片付け始める。俺は先に行って一夏と待っていると告げると、急いで更衣室に向かった。
そこにはふてくされながらも、しっかりと待っていた一夏が。何か申し訳ない。今度何か奢るよ。

その後、寮に戻りがてら、擬音まじりの篠ノ之の解説にチャチャを入れていると、ボストンバッグを背負った一人の女の子とすれ違った。

この時期に転校生だろうか……まぁ、後で挨拶すれば良いだろ。

「ねぇねぇ、聞いた？二人とも。二組に転校生が来るって噂」

翌日、自分の席に着こうとした俺達に一人の女子生徒が話しかけてきた。この時期に転校生は珍しいとの事に加えて、中国の代表候補生らしい。

「まぁ、流石にワタクシの存在に危ぶんでのことでしょうが…気にすることはございませんわ」

フン、と鼻で笑い、高飛車なセシリアに話の輪に居た人たちそれぞれが首を振って、違うだろう、というジェスチャーで応える。それを見て憤慨するセシリア。そこだけは変わらないな、解ってたなら自分で言うなよ。

「こっちには専用機持ち三人に、クラス代表は織斑君だもん」

「頑張ってね、フリーパスの為にも」

ちなみに、フリーパスとは学食で利用できるデザート専用引換券みたいなものだ。まぁ、女の子だったら誰だって目の色変えて応援するだろうよ。俺は甘いもの苦手だし、興味ないけど。

「ーーーその情報、古いよ」

その声が聞こえてきたのはちょうど教卓に近い出入り口からだった。そっちに誰もが視線を向けると、俺には覚えがあった。昨日学園内ですれ違った女の子。

「鈴(リン)？お前、鈴(リン)か？」

ん？一夏の知り合いか？

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音(ファンリンイン)。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「どうでもいいけど、何格好付けてるんだ？似合わないぞ」

「う、うっさいわね～。何てこと言うのよ。アンタは…って、そっちは誰？」

恐る恐る指を差す鈴音。欧米では失礼に値するぞ、ソレ。

まぁいいか。聞かれたからには答えなきゃな。

「一年一組、黒崎一誠だ。よろしくな、代表候補生サン」

「な、何よ、偉そうに。あんたなんて一夏のおこぼれで入学できたんでしょうけど、専用機持ちのアタシの方が立場は上なんだから」

これまたえらく嫌われたような口だな。いつまでも一夏におんぶに抱っこの立場からは卒業するか。

「な……何よ？」

触発されたように立ち上がった俺は、そのまま教卓へ。そこのコンソールを操作すると、ボードに自分の名前が表示される。

自分の名前、『一誠』。『一つのことに、一人の人間として誠実に生きろ』という言葉とともに親父が付けてくれた名前。それは俺の…誇りだ。

「一年一組、黒崎一誠です」

そこにいる皆に聞こえるように、心に伝わるように自分の名前を教える。見渡せば教室中の視線が俺に向けられる。肩幅まで足を開くと、思いっきり頭を下げる。

「よろしくお願いします！！！！！」

教室が揺れるんじゃないかってぐらいの大声で挨拶する。それは

ココに来たときとは違う挨拶。一人の生徒としての改めての挨拶。
いつもの違う自分を皆に見せる。

「ど、どうしたんだ。一誠」

今まで耳を塞いでいた一夏がおどおどしてる。皆もどうしたのか、
という顔をしているし、鈴音に至っては、頭をクラクラさせている。
流石に至近距離ではどうにもならねぇか。

「別に。何も」

堂々とした顔をしてるんだろうな。でも、これが俺だ。誰でもな
い、『黒崎一誠』としての日常は……

ここから、始まる。

その後、鈴音と共に出席簿アタックの餌食になったのはご愛嬌、ということで。

第10話　The Cat ［Shall We Dance?］（後書き）

やっと鈴音登場。

何かやたらと長かったような…。

前振りレベルでは到底すまない長さだ…。

感想お待ちしております。

第11話　Flight　of　Friendlry（前書き）

誰か、誰か。

助けを求めてはいない。

だが、呼んでいる。

それは、自分の想い人への一途な願い。

第11話　Flight of Friendlry

「貴方のせいですわ！」

「お前のせいだ！！」

「……俺にどうしろっていうんだよ…」

授業後、セシリアと篠ノ之からの理不尽な言い分を受ける一夏。ご愁傷様、お前への理不尽がこれ以上ありませんように。二人が何やら物思いに耽っているのは見ていたが、まさか織斑先生の授業でやるとは思わなかった。二人して出席簿アタックを喰らって頭を抱えているのを、何だか気の毒に見ていた一夏だが…そもそもの原因はお前だと自覚したほうが良い。

「いつまでも詰め寄ってねぇで、メシ行くぞ。次喰らわなきゃ良いだけじゃねぇか」

「そうですけど……何だか一誠さん、妙に言葉遣いが…」

「これが元々なんだよ。いいから行くぞ？」

吹っ切れた俺を見ていたセシリアが怪訝そうに聞いてくる。言葉遣いは乱暴だけど、根っこは変わってねぇぞ？

疑問符だらけのセシリアの手を取り、引きずるように学食へ連れて行く。これぐらい強引でも許してくれるよな。それには遅れんとばかりに一夏と篠ノ之も早足でついてくる。いつまでも無駄に言い合っている時間よりかははるかに効率が良い。

学食に着くと、やはり出遅れていたようだ。何人もの生徒が食券売り場の前で列を作っている。チャイムと同時に出なきゃマズいようだ。うん、学習しよう。

「あの…一誠さん？」

そこで俺もようやくセシリアの手を掴み続けているのに気付いた。てか、気付くの遅すぎだし。

「あぁ、悪い……痛かったか？」

慌てて手を離すが、痛がる仕草ではなく顔をただ赤くしているだけのようだ。こういうの、フラグって言うんだっけ。今はどうでもいいか。

「待ってたわよ、一夏」

列の先には、先程宣戦布告をしてきた凰鈴音（ファン・リンイン）。仁王立ちして偉そうにしている。一夏じゃないが、妙に格好付けようとしているな、この娘。

「そこに立つなよ。食券買えないだろ？」

「う、うっさいわね、解ってるわよ。あっ…さっきはすみませんでした」

一夏の指摘の後、列にまわろうとした鈴音だが、一誠を見つけるとおずおずと謝ってきた。あの後、織斑先生から年齢の事を聞いたらしい。年齢を盾にするのはどうも嫌いだ。

「気にすんなって、そっちの方が逆に気持悪い。てか、止めてくれ」

「でも年上だし、何ていうか色々失礼なこと言っちゃって……」

女尊男卑でも礼儀正しい子はいるんだなぁ。誰しもそうじゃないのは知ってるけど。

「だったらせめて、謝ろうとおもったんですけど…迷惑ですか？」

「あぁ、迷惑。年齢（とし）を気にしてるようだけど、俺は気にしない。どうしてもってんだったら…メシ奢れ」

話の中にいた全員が「は？」って顔してる。

「え…それだけ、ですか？」

「何か言葉遣いが妙に遠慮がちだな…親父が言った言葉だけど『年が離れた奴と仲良くするにはメシを奢らせろ。人はそれでも仲良くなれる』ってな。変にお人好しになるな。女が下がるぞ？」

その後、列に並ぶと鈴音、一夏、篠ノ之、セシリア、俺の順で並ぶ。ま、俺の分は鈴音の奢りだけど。頼んだメシを待っている最中、

鈴音がひっきりなしに一夏に質問していたが、怪我病気しろってのはちょっと…。その間、ずっと眉をひそめ続けている篠ノ之とセシリアには話しかけづらかった。
席に着いても、一夏と鈴音の話を隣の席からずっと聞いている二人。食事している気分にはなれないし、楽しく食事しようぜ。

「なぁ、二人とも。気になるのは結構だけど、メシ食えよ。一緒にいる奴はともかく俺が食いづらい」

「ですが…何故か気になってしまって」

「私もだ……聞いていないと腹の虫が収まらん」

「ワタクシも同じくですわ」

メシ食って腹の虫を大人しくさせろ。あと篠ノ之、変に殺気立ってないか？変なアドバイスしたのは俺だけど。
かと言って、あの状況に入るのも正直難しい。思い出話に花を咲かせているみたいだし、余計に水入りしたくないからな。

「そういえばアンタ、ISちゃんと動かせるの？よければアタシが教えてあげようか？」

「ああ、それはたすかーーー」

と同時に二人がいるテーブルを叩く音が。あいつ等早過ぎ。ってか、無駄に身体能力高いな二人とも。

「一夏には私がついている。問題はあるまい」

「それに貴女は二組でしょう？敵からの施しは受けませんわ」
二人揃って鼻息荒いな。そんなに一夏が大事かねぇ…友達（ダチ）としては、ここで助け舟でも出すか。
凄い剣幕で言い寄る二人の襟を掴んで元の席まで引きずっていく。勿論負けないぐらいの力で。
「はいはい。向こうで仲良くメシでも食うぞ～。反論は聞かない」
「は、離せ、黒崎！！！まだ言っていないことが山程……」
「離して下さいまし！ワタクシは一夏さんの為を思って…」
なんて聞こえるが、この際無視。聞いてたら埒が明かないし、余計な火種ははっきり言っていらない。
「ああ、それと鈴音」
「？なに……何でしょうか？」
「コイツラの意見には賛成だが……あまり一夏（ソイツ）を下に見てると、痛い目見るぞ？」
振り向かずにそれを伝えると、元の席へ二人を連れて行く。放るように席に着かせると俺は彼女たちを威圧しながら自分のメシを消化していく。ただ黙々と。
それに気圧されたのか、二人も黙って食事に手を付ける。隣とは打って変わって重苦しい雰囲気が漂う。
自分の分を消化し終えると合掌し、ご馳走様、と頭を下げる。お茶に手を伸ばしたところで俺は口を開く。

「気に入らねぇのは解るが、一夏も人だ。モノじゃねぇんだぞ？」
「……解ってはいるが、その、一夏が放ってはおけない、というか…」
「ワタクシも同意見ですわ。何だか、大切なものが盗られてしまったような……」
「二人して独占欲丸出しじゃねえか。そんなんじゃ一夏は振り向かないぜ？」
その言葉に二人はテーブルを思いっきり叩いて立ち上がる。
「ちっ違う！！！私はただ…一夏が心配で……」
「わっ、ワタクシは彼ではなくて…っ！」
「あん？セシリアは違うのか？」
意外な答えだった。二人とも一夏が好きだから、一夏に振り向いて欲しいからという理由だと思ったが、どうやらセシリアは違ったようだ。何だか話した俺が拍子抜けだ……あれ？そうすると……
「セシリアって…誰が好きなんだ？」
「えっ…いえ、その、あの…」
顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。何か、こういうのって聞き方が反則みたいで気が引けるな。言い出しておいてアレだけど。

「まぁ、今はその話じゃなくて一夏の方だ。あまり過保護になるなよ、たまにはアイツの一存で決めさせたらどうだ？どうしても気になるなら見に行くだけでも十分だろ」

その言葉で食事の席はお開きとなった。ちなみにそんなこととは露知らず、一夏は何も考えずに鈴音と訓練をしたいと言っていたようだ。

この際、大声で言っておこう。

だぁから、お前はアホなのだぁぁぁ！！！

第11話　Flight　of　Friendlry（後書き）

食事の席だけでもここまで書けるのに…。

バトルになるとからっきしなんです、ワタシ（T_T）。

感想お待ちしております。

第12話　Don't say four or five!!（前書き）

心に誓う。
それは偽り。

人に誓う。
ただの言葉。

神に誓う。
以ての外。

誓うは一つ。

それは自分自身の『魂』のみ。

第12話　Don't say four or five!!

その後はまあ、えらい事だ。

一夏の気軽な発言を撤回してほしいがためにわざわざ二組へ行き、鈴音に頭を下げてまでお願いしてきた。休み時間中ずっと。

へそ曲がりのお姫様を宥めるのに一体どれほど時間を使ったことか。やっと機嫌が直ったのは放課後になる前だ。一夏、奢るのはチャラにするから何かしらの見返りを要求する。

そして放課後、様子見がてら顔を出してみると、ズタボロにされている一夏が。こりゃ天罰か何かか？二人揃って手加減なしの猛攻。そりゃ専用機持ってる一夏は不利な上に、理由が思い当たらないだろう。

面白いぐらいにサンドバックされてる。訓練じゃなくて八つ当たりに近いな。止めてやれよ、二人とも。

日も暮れる頃にはすでに立ち上がれなくなっている一夏を尻目に息を切らしていないセシリアと篠ノ之。鬱憤が晴れたのか、訓練を切り上げると二人はアリーナを去っていく。いまだ立ち上がれずにいる一夏の顔目掛けてタオルを放ると、顔の真上でキャッチした。

「酷い目にあったみてえだな」

「途中から見てたなら止めろよな。ってか、何で止めなかった？」

「訓練を止める意味なんて、必要かよ？たまには実践オンリーでの訓練もいいだろ？」

「その度にボロボロにされるのは勘弁してほしいんだけど…っと」

上半身だけを起こすと、渡されたタオルで顔を拭く。息が整ったのか、大きく息を吐くと拭いたばかりのタオルを俺に投げてよこす。

「さぁて、と。シャワー浴びて帰るとしますか」

「もう日も暮れてっからメシにはちょっと厳しいぞ？」

「それは解ってる。何とかメシだけにはありつきたいな」

「じゃあ、先行ってるぜ？俺だってメシぐらいゆっくり食いたい」

「この薄情者～！！」なんて聞こえるけど、俺だって急いで戻る理由ぐらいある。アリーナに顔を出す少し前、織斑先生から、俺に客が来る、と伝えに来たのだ。ＩＳ学園に、しかも生徒一人に客は珍しいらしい。

早足になりながらも、寮の食堂に辿り着く。入り口からかなり離れた壁際の席には、織斑先生ともう一人…つまりは俺への『客』が来ていた。その客に俺は驚かされた。

なりは四十あたり、作務衣の上から半纏を肩にかけた風体に帽子をかぶっているその姿は俺がよく知る人物だった。

「浦原……さん」

「お。いや～、お久しぶりです、黒崎サン」

浦原喜助。

俺の親父の知り合いで、数年前から政府直轄のＩＳ研究に携わっ

ている人。小さい頃には護身術のような武術を習った記憶がある。簡単に言えば、俺の師匠にあたる。親父が亡くなってからはめっきり顔も合わせなかったが、俺がＩＳ学園に入学するのを何処から聞いたのか、俺に専用機まで作ってくれた。確かコアの取引って違法じゃなかったっけ？まぁ、今となってはどうでもいいか、過ぎたことだし。

「お元気そうで。ＩＳ（アレ）、使いこなせてますか？」

「振り回されそうになるのはあるけど、一応上手くやってる」

「そいつは何よりです。ここに来たのはそれも気になってたンスけどね。早速ですが、本題に入らせていただきます。あ、先生もご一緒にどうぞ。貴女にも関わることなので」

話を切り出そうとしたところで席を立とうとした織斑先生を止める。この人絡みなのか？それとも…

「本来は機密事項にあたるので、ここで話すのはどうかと思うンスけどね……『奴等』が、また動き出しているようなんです」

『奴等』……何のことかはすぐには解らなかったけど、織斑先生の表情でそれはすぐに解決した。ちょっとだけ親父と浦原さんが話しているのを聞いたことがあったけど、その話に出てくる『奴等』ってのは、確か……『亡国企業（ファントム・タスク）』だったかな。

「何故今頃になって……まさか」

「ええ、そのまさかです。動きが活発になってきたのは、貴女の弟サンの入学が原因か、と」

「アイツの入学はニュースにもなったし、切っ掛けとして十分ってか」

「恐らくは表立った行動に移るでしょう。何しろＩＳを起動できる男です。向こうも無傷で、というわけにはいかないでしょう。最悪の可能性も考慮したほうがいいかもしれません」

この人の真剣な表情は久々に見た気がする。いつもは飄々としたただの変態オヤジなのに…。

それは今考えないようにしよう。今はこっちの話が優先だ。

最悪な可能性……一夏が再度奴等の手に墜ちることか。流石に場所が場所だから大っぴらな発言はしないだろうけど、俺と織斑先生はその『最悪の可能性』はすぐに理解できた。

「で……対策はあるんだろうな？」

内心焦りまくりなのか、苛立つような声で浦原さんに聞いている。たった一人の弟なんだ。動揺しないほうがおかしい。

「対策としてはいくつかあります。一つは彼からＩＳを取り上げ、特定の場所で大人しくしていてもらう事。これは彼の性格上、無理に近いでしょう」

「頭は足りないが、そこは強情でな…」

納得するように腕を組む先生。そこだけ自信もたれても……

「二つ目は彼をその脅威に立ち向かえるほどに強くする事。かなり無茶はしますが実現可能ではあります。ただ、一週間という短い時間内でそこまで鍛えられるかは期待薄ですけどね」

確かに可能ではある。しかし、それは飲まず食わずで戦い続けるのと同義の訓練かもしれない。そんなにしてまで強くなりたいとは誰も、一夏も思わないだろう。

「三つ目は……黒崎サン、貴方にお願いします」

「…そこで俺かよ…」

「ええ、貴方が強引に介入してしまえばこの案件はクリアしたといえるでしょう。驚異的であり、非常識なＩＳを操る貴方であれば」

その驚異的で非常識なのを作ったのはアンタなんだぞ？解ってるのか、この人。まあ、このセリフは伏せるとして…やってやるしかないか、一夏にはとびきり旨いメシでも奢ってもらうか。

「三つ目で行くしかねぇか……多少は気が引けるけどな」

「それでいきますか。先の二つはアタシが強引でもやればいいだけですけどね」

扇子広げて何得意気に煽いでんだよ。それと、無精ヒゲ何とかしろ。何気に危ない事も口走るな。隣の織斑（おに）先生が黙ってないぞ？

「何を言うか……まあ、それしか手段はないか」

アレ？何か大人しい……もしかして、二つともこの人なら可能なの

か。実の弟を何だと思ってやがる。

事態の収拾方法が決まったところで、俺達はそこで解散となった。浦原さん曰く「もうちょっとこのハーレムを見学してきますね」なんてぬかしやがった。そっちにゃハーレムに見えてもこっちは地獄だっつの。

第12話　Don't say four or five!!（後書き）

何だか中途半端な気もしますが、前編って事で。

早めに更新するようにします。

感想お待ちしております。

泣いているアナタ。

涙を拭いて、立ち上がって。

今、目の前に見えている道は、

決して消えはしない。

涙は消え、笑顔になった時、

アナタの道は澄み渡って見えるはず…。

第13話　Don't say four or five!! 2

5月～May～

その後何があったのか……皆目見当がつかない。五月に入ってからというもの、正確にはクラス対抗戦の日程が張り出された日から、一夏と鈴音の関係は悪化の一途をたどっていた。
一夏が話し出そうにもクラスに顔を出したが本人はおらず、鈴音がこちらに顔を出しても一夏がおらず、の繰り返しで何が何やら。

「なあ、篠ノ之。アイツ等、何かあったのか？」

「さあな、ただ『馬に蹴られて死ね』とは言ってやった」

篠ノ之に関しては、最初の頃に比べれば物腰が柔らかくなった方だ。こういう風に気軽に返事を返してくれるだけでも有難い。
が、篠ノ之からそんな言葉が出るってことは一夏自体に原因があるようだ。そして当の一夏は何も理解できておらず。
アイツ……どんだけ自分の脳細胞殺してるんだ？

「結局、一夏さんが原因なんでしょうか？」

「さあな。本人に聞こうにも時間がない上に対処しようもねえ」

クラス対抗戦の前日、その夕食後。
俺とセシリアは食後のティーパーティーを開いていた。たった二人のパーティーだが、落ち着ける時間としてはちょうど良い人数だろ。流石にもう慣れたし。
定番として、俺が下座でコーヒー、セシリアが上座で紅茶だ。時間はその日によってまちまちだけど、一日を振り返るには十分だ。
話題は例によって一夏と鈴音の不仲だ。もう一週間以上もあんな状態だと鈴音はよく神経が持つな。

「明日はクラス対抗戦ですから、あまり顔を合わせないほうがよろしいでしょうね」

「ＩＳ使うんだし、殴り合いの喧嘩にはならないだろ」

「それもそれで問題があるかと…」

乾いた笑いを漏らすセシリア。まあ、殴ったらそれこそ退学モノだな。

「けど、本人同士にしかわからねえことなのは解る。些細なことであそこまではなんねえよ」

「こういう風にお茶を飲む時間でも作れればいいんですけれど、そうもいきませんわよねぇ」

悩みながらもティースプーンで紅茶をかき混ぜ続ける。味壊れないか？

「今更外側の人間が騒いでも意味無えよ。明日に任せよう」

「……ここで話題を変えましょう。当人以外が悩んでも仕方ないですし」

「そうだな…さて、今日は何の話題だ？」

「そういえば、クラスメイトの娘がですね……」

そうして対抗戦の前夜は幕を下ろす。明日、あんな事が起ころうとは誰も予想していなかっただろう。

翌日、クラス対抗戦・一回戦

アリーナの観客席が満席になってしまった為、ピットでリアルモニターでの観戦となった俺、セシリア、篠ノ之。その隣には織斑先生に山田先生。

こうまで関係者が一同に介するってのもどうかと思うけどな。

「そういえばセシリア。鈴音のＩＳってパワータイプって聞いたんだけど……全く違うじゃねえか」

「いえ、あれはどう見てもパワータイプの装備ですわ」
「黒崎の言うとおりだ。あれは……」
「中・近距離戦闘型。しかもあの非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）…まだまだ実用段階じゃないな」
「良い目をしているな。さすがは浦原博士が見込んだ男だ」
「褒めても何も出ないっすよ、先生。あと、付け加えるならアレは理論の域を出てねえと思う」
第三世代機と聞こえはいいが、要は実験機。既存の基礎フレームに最新一とは言っても初めて実用するシステムを前世代機に搭載し、外面を変えただけ一の技術を投入した各国代表機だ。それを壊しました、ゴメンナサイ。ではすまないのは当たり前。碌にデータも取れないままお蔵入りでは次世代機にはなり得ない。国が承認したとはいえ、開発した人たちのエゴの塊だとしか思えない。
「そ、そこまでお考えでしたの？初見ではそこまでは見れませんわ」
「…」
セシリアはともかく、篠ノ之は何か嫌うような視線を向けてくる。知り合いにそういう人でも……あぁ、篠ノ之博士の妹だから、か。そういう目を向けたくなるのもわかるな。
「試合が始まるぞ。黙って見てろ」

試合開始と同時に一夏の剣『雪片』と鈴音の『双天牙月』がぶつかる。火花がいくらか散った後、距離を取ったのは鈴音。すると、非固定浮遊部位が一夏をロックオンする。とほぼ同時に何か見えない壁に弾かれたように一夏が地上に叩きつけられる。

「な、何だアレは？」

驚く篠ノ之とは違い、セシリアと織斑先生は冷静だった。

「『衝撃砲』ですわね。空間に圧力をかけて砲身を作り、その圧力の余剰エネルギーを打ち出すものですわ」

「だが、一定の連射後はシステム自体の冷却機能のせいで使えなくなるがな」

「言ったろ？理論の域を出ない、って。まぁ、威力は数段上だったようだけど」

やはりそこだけはパワー重視の設計をしていたようだ。中・近距離戦闘での要は中距離からの攻撃だ。間の抜けた攻撃では相手は止まらないし、簡単に避けられれば懐を相手に許してしまう。威力だけを相手に解らせれば、それだけで相手の接近を許さない。ただし、それは近距離戦でもパワーを付けないと理想的なオールラウンダーとは言えない。それを両立させるには相当の時間と労力が要るだろう。

ただし……

「力が上イコール武器がデカいじゃ、バランスが悪過ぎる。作った奴は相当のパワーバカらしい」

取り回しが考慮されていないような武器『双天牙月』を見て、織斑先生が毒づく。そこは賛成だ。しかし、さっきから一夏が距離を詰めず、這うように地上スレスレを飛んで回避している。アレは、何か狙って…まさか。

「アイツ、瞬間加速（イグニッション・ブースト）を狙ってるな」

「何ですか？それ」

「加速に使ったエネルギーを取り込んで推進部内部で循環させて急激な加速を得る事だ。使いどころを間違えなければ一介の代表候補生に並ぶことが出来るが、通じるのは『たった一度きり』だ」

最後の言葉だけは織斑先生と重なる。

ユーザーには掛け算式にGがかかってくるような衝撃を、たった一ヶ月しかISを動かしていない人間が使うとなると、計り知れないだろう。だが、それは相手の慢心を衝く『奇襲』にはうってつけだ。

隙を見つけた一夏が加速体勢に入った瞬間、何かが割れるような音と共にアリーナ中に轟音が鳴り響く。何かが落ちてきたのは解るが、遮断シールドを破るにはそれ相応の質量とエネルギーが要るはず。落ちてきた『それ』を確認するより早く俺はピットを後にしようとすると、

「待て。何処へ行く？」

止めたのは織斑先生。話には聞いてるはずなんだけど……

「止めに行くだけっすよ。それに、多分浦原さんが言ってた『奴』かもしれないんで」

「『アレ』が、そうだと？」

「多分っすよ。二人に無理するなって伝えるだけで良いんで、お願いします」

そう言うと俺はピットを後にする。

何故狙う？

何故襲う？

何故？

そんな事ばかり考えるが、ＩＳ（ココ）学園に来ても変わらない根っこの部分が叫んでいる。

戦え、戦え。

けたたましいぐらいに自分の中から聞こえてくる声に、うんざりしながらもそれに応える。

戦ってやるよ。俺は生まれ落ちたときから……ずっと、

戦いを、求めてきたんだから。

第13話　Don't say four or five!! 2（後書き）

はい、一応中篇です。

一度も感想が入ってきてないのは何か寂しい。

でも、お気に入りに入れてくれただけでも感謝、です。

後編、お楽しみに。

第14話　Don't say four or five!! 3［At

黒い牙が、空に浮かぶ月を穿つ。

第14話　Don't say four or five!! 3［At

「なあ、あいつ…なんか機械じみてないか？」

その一夏の言葉に、鈴音が反論に近い言葉を返す。

「何言ってんの？ＩＳは機械よ」

「そうじゃなくて、アレ、本当に人が乗ってんのか？」

「……そういえば、アタシ達が話してるときって一度も攻撃してきてないわね。なんか、興味があるみたいに…」

一歩も動かなくても、視線を向けたままピクリとも動かない相手は不気味としか言えない。

ましてや、『ＩＳは人が乗るのを前提で作られている』『人が乗って当たり前』の機械なのだ。人が乗っていないのは在り得ない。

「仮に……仮に、だ。無人機だったらどうする？」

「はあ？無人機だったら勝てる、って思ってんの？」

その言葉が一夏を頷かせる。単一仕様能力（ワンオフアビリティー）『零落白夜』は自らのＳ．Ｅを犠牲にして相手のＳ．Ｅを消滅、無効化させる威力を持っている。そして、『ヒト相手に使うには威力が強すぎる』のだ。もし本当に無人機であったなら完全破壊が可能な現時点での最高火力である。

「なら、アレを無人機と『仮定』して攻めてみましょうか」

「鈴、俺が合図したら衝撃砲をアイツに向けて撃ってくれ。最大出力で」

「…解ったわ。いくわ―」

「一夏ァ！！！」

突然の声に攻撃体勢を緩める。ハイパーセンサーを凝らしてみると、ピットから出てきた箒がこちらに焦っているような表情を向けている。恐らく観客席か、ピットから走ってきたのだろう。肩で息をしていた。

先程の声に反応したのか、『無人機』がターゲットを二人から箒に変更したのだ。その証拠に彼女に砲口を向けていた。一撃で終わらせようとしているのか、エネルギーチャージが長い。

「箒！！」

彼女に逃げるように叫ぼうとしたが、その言葉が終わる前にハイパーセンサーからの警告が一夏の目に止まる。

―警告！！敵ＩＳよりのロックオン、及びセイフティーロックの解除を確認―

「何で！！？」

今まで箒を狙ってたのに…そんな疑問は自分に向けられた一条の光によって消え去ってしまう。

気付いた時には、自分はアリーナの壁にめり込んでいた。その影響でＳ．Ｅは一桁に。

「一夏ァ！！！コンのぉぉぉお！」

双天牙月で切りかかるが、読まれていたかのように『片手』で受け止められる。『その気になれば、ここまで出来る』と言わんばかりに、そのまま大きく振りかぶって投げ飛ばす。一夏目掛けて。

「ぐぅあああ！！！」

ありえない速度で飛んできた鈴音と壁にはさまれた一夏から苦痛の声が漏れる。と同時に自分の体から拉げるような音が響く。絶対防御を発動しても防げなかった衝撃で肋骨がいくらか折れたらしい。

「一夏！！！」

そんな音を聞いて動揺しない人などいない。涙を浮かべそうな箒を尻目に、その砲口が再び彼女に向けられる。

意識が朦朧としてる鈴音に、口の端から血を流し、気絶している一夏には既に戦う力、S．Eも残されていない。

自分はこんなにも無力なのか、誰も護れないのか…そんな考えが箒の頭を過ぎる。自分の無力さを痛感してしまったのか、彼女はそのまま膝から崩れ落ちる。それに合わせたかのように、一条の光が彼女の視界を埋める。

誰か、二人を……助けてっ！！

「篠ノ之さん！！！」

ピットにいる山田先生と織斑先生も驚愕の表情でそれを見ていた。箒のいた場所は、まだ黒煙でその様子を確認できない。最悪の状況を考えていた二人の思考を遮るようにレーダーに新たなＩＳ反応が確認された。

「織斑先生！！」

涙声の山田先生に、織斑先生もホッとした表情を浮かべる。

「まったく……つくづく英雄（ヒーロー）体質だな、アイツは」

黒煙が未だ晴れぬ中、箒はその場にへたり込んで座ったままだ。まだ煙は晴れないが、それよりも黒い装甲が彼女の視線を埋めている。

「ったく、無茶しやがって…」

頭の上から聞こえる声に視線を動かすと、見知った男がそこに立っていた。

「く、黒崎……」

ＩＳ学園にて二人目の男、ダークブラウンの髪に同じ色の瞳、そして異形のＩＳを身に纏って戦うその姿を学園中の生徒は彼をこう呼んでいる。

『ブラック・インパクト（黒い衝撃）』

「黒崎……」

「何もそこまでしなくてもいいんだよ。意地になって命落としたって、誰も嬉しくねぇぞ？」

憎まれ口に聞こえるようでも、何処か気遣うような言葉。一夏の事を話したときのような頼もしく強い声。頼れる年上の人に出会えた箒にとっては『良きお兄さん』という印象に変わった。
彼はしゃがみ込むと、そんな箒の頭を撫でてやる。

「けど、よく頑張ったな。あとは…俺がやる」

立ち上がると同時に、彼のハイパーセンサーにロックオンの警告が表示される。数秒だけ環境予測システムを立ち上げると、ロックオンの標的な一誠ではなく一夏達に向けて、だった。
頭だけを動かして、視界の端だけでそれを確認すると斜めに振り下ろすように刀を投げつける。

『無人機』の射線上に。

バチィィィィン！！！

ビームのエネルギーに勝てなかったのか、それに弾かれるようにしてあさっての方向に刀が飛んでいく。地面に突き刺さると同時に、

瞬間加速（イグニッション・ブースト）を超えるスピードで二人の前に降り立つ。意識がはっきりしていなかった鈴音が彼にようやく気付く。

「あ、アンタ…」

「後は任せな。すぐに片付けてやっから」

そういうと、手を大きく広げる。それに反応するように、柄頭についている鎖がカチャカチャと振動し始める。

「……Ｃｈａｉｎ」

その言葉と同時に、刀が跳ね上がるように一誠の手へと戻る。通常の兵器では考えられない事が起こっているが、そんな事はお構い無しに現実は進む。
奪い取るように刀を掴むと、勢いそのままに斜めに振り下ろす。

「ここまでしといて、勝手に終わらそうとしてんじゃねぇよ」

鈴音に見せないようにしていた形相で『無人機』を睨みつける。
まるで人を殺しに来たかのような、そんな貌。

「一瞬で…終わらせてやる」

その言葉の後、全てが終わった。正確には『無人機』にとっての、すべてがおわった。

「な……何が、起きたんだ？」

私（箒）が知っているのは、黒崎が何か言い放った後、その場から姿を消した。いや、正確には移動したんだ。私の目にも止まらないほどの速さで。

気付くと奴は相手の後ろに、しかも平然と立っている。何をしているのか、と思ったが一歩、二歩と離れた瞬間、

相手は……跡形も無く、『爆発』した。

理解できない。何故あんなスピードで、いつ攻撃したのかも解らない。しかも、力に鋭さを感じた。何か『覚悟』のような……あれが、私達が知る『黒崎一誠』の姿なのか。本当の…。

そして私は映像記録を見るまで気付かなかった。あの時、あの数瞬の間だけ黒崎が仮面を付けていたこと。そして、その仮面の模様が違っていたことを。

第14話　Don't say four or five!! 3 [At

長い!!長すぎた!

流れは考えていたけど、よもやここまでとは。

駄文ですが、「Don't say four or five!!」終わりです。

ちなみに直訳すると『四の五の言うな』です。

感想お待ちしております。

第15話　The Scar（前書き）

痛い、痛い。

身体も、心も、全てが痛い。

薬や暖かい言葉も、全て効かない。

特効薬は、ただ一つ。

それは…相手への『苦しみ』だけ。

第15話　The Scar

-その後、ＩＳ学園内にて-

あの後、一夏と鈴音は医務室へと運ばれ治療を受けた。鈴音自体に大きな外傷はなかったが、一夏は肋骨を3本と上腕骨亀裂骨折、打撲多数の重症で、一ヶ月程安静にしていれば大丈夫、とのことだ。ただし、『白式』はダメージレベルがＣに達している。半月程あれば修復できるので、丁度6月に入る頃には両方とも治っているだろう。

避難せずにその場にいた俺達ー正確には俺と篠ノ之は現場にいたので当事者扱いーには簡単な事情聴取に誓約書を書かされただけで終わった。実質的には織斑先生（現場）の指示で俺の出番となったので、それだけで終わっただけでも有難かった。

そして、当の俺は医務室へ。無人機を解析不能なまでに破壊してしまったので一番最初にして一番時間をかけられた。今のだけで誓約書何枚書いたんだか。ちなみに、浦原さんの許可まで取って、ＩＳの無期限没収までされた。代替機は後日、浦原さんから直接受け取る話にまとまった。

あの人が、まともな、ＩＳを、渡すと、思ってんのか？あのお偉いさん方……

そんなん振り返りつつ医務室に到着。まぁ、誰も居ないだろう。

ノックせずに入ったのが悪かったのか、ベッドの脇には篠ノ之が。慌ててこちらを振り向いた拍子に、流れ出る涙が夕日に照らされる。

「く、黒崎…か」

「ああ、一夏は？」

「まだ……眠ったままだ」

やはり傷が酷かったようだ。どうやら最大出力だったらしく、顔にも多数の擦過傷がある。身体自体は診断内容を聞いたが、体力だけはここまで擦り減らされたみたいだ。

ベッドの脇まで来ると同時に、織斑先生が入ってくる。

「失礼する。篠ノ之に黒崎か、二人とも来てくれて助かる」

そこには、いつもの厳しい表情ではなく、実の弟を心配する姉の顔だった。あれだけの傷なんだ、どんな教師（おに）でも心配するだろ。

「…黒崎、後で反省文を書かせようか？」

「何でッスか！？？」

「いや何、失礼な事を言われたような気がしてな…」

やっぱり読心術使えるンじゃねぇか？この人。

「ところで黒崎…お前には損な役回りをさせて、悪かったな」

「いいッスよ、もう終わった事ですし。それにそんなん、前から決まってたじゃないっスか」

「それはそうなんだがな、たきつけたようで申し訳ないというか…な」

いつもよりずっとしおらしい。この人も人の子であり、一人の姉なんだなぁ…。

「さて…湿っぽいのはここまでだ。二人に通達事項がある」

その言葉だけで、医務室の空気が変わる。何か重要なことなのだろうか。

「篠ノ之箒。お前には案件が案件なだけに、乱入したという程度ではすまない事態を引き起こした。よって教師陣の判断により、お前は反省レポート八十枚の提出がペナルティとして課せられる」

「わ、わかりました」

「黒崎一誠。お前の適切な判断により、我が校の生徒を救ってくれたことに感謝する。が、学園側への有益な『情報』を破壊してしまったことへの責任は大変重い。よってお前は政府直轄機関へのＩＳ引渡し、期限は１ヶ月だ。それまでの間は部屋で大人しくしていろ」

篠ノ之は比較的軽くて助かった。

だが、教師達の問題は俺への処罰だな。あの爆発でコアは解析できないぐらいに損傷してしまったのだ。加えて言えば、素体パーツすら残らないほどの破壊だ。痕跡でも記録（ログ）だけでも確認できれば、と

淡い希望だったがそんなモノすら残されておらず八方塞がり状態。
ここまでやってしまった自分に後悔、そして反省。

まぁ、それだけじゃすまない処分だけどな。

「あら、一誠さん」

織斑先生との『お話し』を終えた俺は、医務室を出るとセシリアに声をかけられた。彼女もピットに居たとはいえ一部始終を見ていたので、事情聴取されていたのだ。ちなみに俺より遅い時間に。

「今は入ンねえほうがいいぞ。篠ノ之と織斑先生が診てる」

「そうですか…容体が気になるのですが……」

「後で話す。それより、腹減らねえか？昼から何も食ってねえんだ」

「では、まずはお食事と参りましょう。コホン……！」

軽く咳払いをして、何かモジモジしてる。何かを待っているよう

な。そんな仕草……そういうことか。
半歩下がって、仰々しくお辞儀してみる。

「では……謹んでエスコートさせて頂きます。Ｍｓ．オルコット」

「！…はい、喜んで」

その後は、まあ恥ずかしい。腕を組む形でエスコートしたのがいけなかったのか、学園内、正確には食堂までの道中、思いっきり注目の的だった。二人でちょっとした言い合いをしながらも、しっかりと腕を組んでいたので、『恋人同士ですか？』なんて聞かれてセシリアが顔を真っ赤にしたりして、そらまあ恥ずかしいったらありゃあしない。それまで自覚してなかった俺も俺だけど。

「自室待機……ですか？」

「ああ、半月程な。ホレ、セイロンティー」

夕食後、いつものティーパーティーの始まりで俺が話を切り出した。お茶の中身は俺はブルマンでセシリアはセイロンティー。その日の気分で二人して葉と豆を変えているので、レパートリーとしては飽きないだろ。たまにお茶を交換したり、スコーンを用意したりしてアクセントをつけている。

話題は、俺の処遇について。それについてはセシリアも驚いていたが、ＩＳの引渡しはともかく自室待機に関しては軽い処分だろう、と話した。

「それについては、織斑先生に感謝しませんと」

「何か、足を向けて寝れないな」

「…？何ですの？それ」

「あれ？わかんねぇか。つまり、頭が上がらねえって事だ」

「そうでしたか。そのような言葉は聞き慣れていないので…」

慣用句だったっけな？ともかく、感謝しきれねえな、もう。

「それより一夏だ。もうちょっと早く対処してれば良かったんだけどな……」

「過ぎたことを悔やむのは仕方ありませんが、ワタクシもそれは同じですわ。あんな光景を見てしまったら、足が竦んでしまって」

確かに十五歳の娘には酷な内容かもな。人の体からあんな音が聞こえれば、誰だって動転するに決まってる。

「でも、ワタクシは…見てるだけは我慢できません。今度は仲間を……アナタを『助けて』みせます。もう心構えも出来ておりますわ」

「『助ける』ってことは、誰も傷つけずに『護る』のと同じなんだぞ。それでも『助けたい』か？」

「…はい…」

もう止められねえな。火を点けたのは俺だし……今更後には引けないか。

「わかった…今度からはセシリアにも手伝ってもらう。それでいいな？」

「ええ、伊達に『代表候補生』という肩書きは背負っておりませんの。他の生徒の見本になれるよう努力しておりますので」

「の割にはあっさりと俺に負けたよな」

「そ……それは言わないでくださいまし…」

あ、心の傷抉ったかな…いつも一言多いんだよな……。

「あ、あのさセシリア…今度の日曜、暇か？」

「……は？」

おい代表候補生、あまり間の抜けた声で返事するな。実力が疑わしく感じる。

第15話　The Scar（後書き）

とりあえずプロット投入。

感想、及び指摘ありましたらお願いします。

第16話　Lonly Wolf（前書き）

独り、ずっと独り。

第１６話　Ｌｏｎｌｙ Ｗｏｌｆ

４日後

つまり、日曜日。
セシリアと街に出る日。俺達は学園の正門前で待ち合わせすることになった。『それって、デート…ですか』なんて、照れたように聞いてきたが多分そうだろうな。何処かの鈍感（いちか）のように買い物に付き合うってのじゃない。

（多分、と信じたいんだろうな）

一人毒づくように考えながらバイクを暖気する。長時間放っておいてもバイクは冷え続ける。たまに運転する時ぐらいは暖めてやらないとすぐにエンストするし、エンジンが壊れる。ちなみにバイクは『ＨＯＮＤＡ・Ｓｈａｄｏｗ　Ｐｈａｎｔｏｍ　４００』である。この日のために二つ分のメットも買っておいた。今の手持ちではちょっと高かったぐらいだ。

「お待たせ致しました」

ちょうど時間ピッタリにセシリア到着。動きやすい服装で来いとは言ったが、フリルスカートって動きやすいのか。俺は青いラインが入った白のポロシャツに黒いジーンズだけど。

「時間ピッタリだな。似合ってるじゃねえか、セシリア」

「あ、あの……ありがとうございます」
お世辞じゃなくて本心だ。お世辞は嫌いだし、苦手だ。わざわざ人の服装や言葉を無理して持ち上げたりしたくない。
「あんまり時間ねえし、早く行くか」
「あら、このまま街に行くのでは？」
「ちょっと待ち合わせしてんだ。まずはそっちに行く」
「待ち合わせ、ですか？ちなみに女の人と…でしょうか？」
それを聞くセシリアの顔はちょっと暗い。というより嫉妬の表情だろうか。
「違う違う、男だよ。ついでに言うと、俺のＩＳを作った人」

数分後、街より少し離れた駅前。ロータリーの外にはファーストフード店やコーヒーショップなどが軒を連ねているが、喧騒とは違ってなんだか閑散としている。
腕時計を見ると、時間より2、3分遅いぐらいだ。着いている頃に

は居るだろうと思ったが、あの変態科学者のことだ、遅れてくるに違いない。と踏んで来てみたが遅いこと遅いこと。
それから十分して、浦原さんが駅から出てきた。

「いや～、遅くなってしまって申し訳……『ガキョッ！！』鼻が痛い！！」

「おっそいっつの」

出会い頭に、空になった缶コーヒーを投げつける。リアクションにしては面白いな、ちゃんと当たった場所を言うんだから。

「調整に手間取りましてね…ちゃんと『専用機』、持ってきました？」

「あるよ、ホレ」

そう言うと、尻のポケットから待機状態のＩＳを投げ渡す。少しの間の別れにしてはサッパリしてるかもしれないけど、離れてるだけでも十分寂しい。

「念の為言っておきますけど、預かっている間にちょっとだけ設定をイジらせてもらいますね」

「…？何か不具合でもあンのか？」

「そうじゃないンスけど、ただ搭載されているシステムのアップグレードを、と」

「そっか」

どれを改善するんだろう…思い当たる節がありすぎて解らん。

「おや？そちらサンは？」

「彼女…って言ったら笑うか？」

「ええ、そりゃあもう、思いっ…『ゴガンッ！！』目が痛い！！！」

だから、当たった場所わざわざ言うなっつの。手で顔を覆って痛みを堪えているがぜんっぜん可愛くもねぇ。それでも四十か？アンタ。セシリアはセシリアで顔を真っ赤にしている。冗談も程々にしないとこっちも怒りそうだ。一応事実……なのか？俺にもよく分からない。

「冗談ッスよ、冗談。たしか、イギリスの代表候補生サン…でしたね」

「あっ…はい、セシリア・オルコットと申します」

やっと現実に戻ってきたセシリアが会釈する。そこだけは英国淑女だな、切り替えも早い。早くないときもあるけどな。

「よろしく。アタシは浦原喜助。黒崎サンのＩＳを作った者です。以後お見知りおきを」

「まあ、礼儀正しいのですね。科学者みたいですけど…無作法な方かと思いましたわ」

「あんまり威嚇するなよ、セシリア。そういえば浦原さん、代替機ってあんのか？」

「ええ、コア自体はアタシがスペインに居た頃に政府から譲渡された分があったので」

だ・か・ら、コアの取引って違法なんだろ？自覚しろよ、ＩＳ研究者。

「これッス。この子もクセが強いんで気をつけてくださいね」

渡されたのは、リング。狼のレリーフがついたリングだ。すべてシルバーの何の色も無い、狼。

「アナタの『専用機』とは逆の射撃型ですので、ちゃんとカタログスペック見といてください。ベースはほとんど変えてないので」

つまり、スペック上では同じだけど射撃型に切り替えたんだな、しかも『最強』の。

ホラな、まともなの渡す気ゼロだよ、この変態（ヒト）。

「じゃあ、アタシはこれで。デートの邪魔はしたくないので」

と言ってスタスタと去っていく。まるで他に用事があるように淡白かつ足早に。一体何がしたかったんだ、あの人。

「さて、用事も終わったし…早く街行こうぜ？」

「はい…でも、案外早く終わりましたわね」

「そうだな、ちょっと早いけどメシにするか」

渡されたリングを左手中指に通すと、バイクに跨る。メットを投げ渡すと、キーを回して心臓を動かす。俺のもう一つの『相棒』に。

「メシ、何処がいい？っつったってこの辺りは何があンのか解ンねえし」

「でしたら、ワタクシが道案内しますので、運転、お願いしますわ」

「了解」

そう言うとアクセルを吹かす。車では味わえない空気がとても心地良い。歳を取るとドア付きの自動車が欲しい、と言うけど俺はこっちが好きだ。

バイクで数分。すぐに閑散とした風景から、喧騒の中へと入っていく。街行く人達の中には家族連れやカップルもいる。近くの駐車場にバイクを停めると、その中を歩いていく。腕を組んで。

「時間間違えたかな…いやに人が多いな」

「流石にお昼が近いと、人も多くなりますわ。こうしていれば逸れずにはいれますが」

まあ、否定はしないけど……ここで織斑(おに)先生に会ったら百年目、俺はどうなるんだろう…。

第16話　Ｌｏｎｌｙ　Ｗｏｌｆ（後書き）

一応ここで一区切り。

狼＋ＢＬＥＡＣＨ＝何でしょう？

読んでいる人なら解るはずです。１番サンですから。

感想及び指摘ありましたらお願いします。

第17話　Bad tea time［unlucky］（前書き）

さあ、お茶にしよう。

用意するのは、真実という名の苦いお茶に。

夢のように、甘い砂糖だけだ。

第17話　Bad tea time［unlucky］

さあ、昼にしよう。

ってところで、俺の携帯から軽快なメロディが流れる。一度慣れてしまえば問題ないが、俺の携帯は最近突発的に鳴ることが多い。てか、気軽なことでは鳴らないような気がしてきた。

「もしもし？」

電話の主は織斑先生。本当に気軽なことでは使えないな、この携帯……なんてのは後にして。

@@@@〜@@@@

隣の殿方は何も言わずに電話し続けている。女性を放っておいて、電話しないで下さいまし。腕を抓ってやりましょうか…でもこれで嫌われたら嫌ですし、不本意にも程があります。
何も言わず、ただ通話が終わるのを待っているワタクシは可笑しいのでしょうか？文句の一つぐらいあってもいいのでは？

「悪ぃな、折角の休みなのに…」

「いえ、構いませんわ。それより、何の電話だったんですか？」

つとめて平静を装って聞いてみると、一夏さんが今朝方目を覚まし、部屋で休んでいるとのことだった。連絡しなかったのは申し訳なかった、の一言を添えて。

「そうですか、一夏さんが……」

ようやく胸の痞えが取れましたわ。その事でここ数日はまともに睡眠出来ていなかったのですが、ここにきてやっと一段落ですわ。

「……そんなに一夏が気になるんだったら、今日は寮に戻るか？」

「え、そういう訳では…」

いきなり何を言い出すんですか、この方は。いつもいつも一夏さんを引き合いに出してはワタクシを困らせて…。

「それより、ワタクシは…一誠さんと……」

「どうした？ボソボソと」

何でしょう、このイラつきは。言わなければ気が済まないような、お灸を据えてやろうというか。言ってしまえばどれだけ楽なのか……

「早く行こうぜ。急がなくても店は逃げねぇし」

「っっっっ……！」

もう、無理ですわ。限界の限界です！！

「黒崎一誠様！！！！！」

@@@@@〜@@@@@

「早く行こうぜ。急がなくても店は逃げねぇし」

しどろもどろ、ってか百面相に近いセシリアを急かすようにして先を行く。頭切り替えてさっさと行かないと……

「黒崎一誠様！！！！！」

大声を通り越して、耳に響く。てか『様』って？周りは痴話喧嘩か何かと通り過ぎてはこちらを見ている。あぁ、衆人監視とは正にこの事。

怒り心頭のセシリアの顔には雫が光っては落ちる。もしかしなくても…泣いてる？

「ワタクシは……貴方が、貴方が大好きです！！言葉では表現しきれない位に。それを見て見ぬ振りのように振舞っていては流石に弄ばれているのと一緒ですわ」

「……」

呆れた、っていうか、ビックリした。まさかまさかの告白。そういえば以前に言葉を濁したままスルーしちゃったから判らずじまいだったけど…一夏じゃなく俺だったのか……それよりも！！

「と、とりあえず、場所変えようぜ。ここは流石にちょっと……」

街のど真ん中での告白は一昔前のドラマであったけど、現実はそんなに事通りには進まない。表情を変えないセシリアの手を強引に引いて近くのカフェに連れて行く。一刻も早く、この人だかりから脱出しないと。

それから少しして。

先程の場所から五分ほど歩いたところのカフェに入った。時間も時間だからここのランチで十分か。適当に注文して、お冷を口にする。ここに入るまではとてもじゃないが生きた心地がしなかった。噂の

ように伝播し、街中に知れ渡っているころだろう。人間の情報網って怖い、怖過ぎる。
二人分のランチがテーブルに並んだ頃にはセシリアも落ちついたのか、紅茶に手を伸ばす。俺はと言えばランチだけを口に運んでいる。花より団子ではなく、気恥ずかしさからこうしているだけだ。こっちの皿が空になるころにはやっと一心地ついた。

「それにしても…何だって、あんなこと」

食後のコーヒーに口をつけようとしたところで切り出す。不意打ちに近い告白、というのもそうだが、話の脈絡というのがちょっと読めない。

「それは……」

「あまり言いたくないのか？」

「そうではなくて、ですね…その……一緒にいるのに、『独り』でいるような…感じになってしまいまして…」

忘れてた。
セシリアは小さい頃に両親を亡くしてたんだ。『孤独』という虚無感をこの歳まで味わってきたのに、俺がそこから『助けた』のに…いや、『助けた』と思いたかったんだ。こんなにも意思が強い娘だというのに安心してしまった。

「その、やっと心を開いてお話できた方なのに…一方的に離れてしまうと……どうしても…」

最後は涙声だったが、言いたいことは言わなければすまないのだろ

う、声を絞り出して話そうとしても涙が溢れてきている。やっぱり『孤独』には耐えられる年頃ではないようだ、あんな過去があっても。

「悪ぃ、そこまで気にしてたとは思わなかっ……違う」

「…え？」

「本当はただ見て見ぬ振りをしてたのかもしれない。日頃のセシリアを見てると、安心しきっちまったんだと思う。セシリアの場合はただそれだけじゃすまねぇ過去を背負ってっから、こういうのは気軽に答えちゃいけねぇ気がしてたからな」

「そんなこと…ありません、わ…」

「それじゃあ、俺の気が済まないんだよ」

「ですから、あまり深く考えないで下さい。ここにいるのは『孤独を背負った少女』ではなくて『たった一人の女の子』なんですよ？それとも、あそこまで恥ずかしい告白を蔑ろにして終わる気ですか？」

ぐっ！

なんて卑怯な聞き方だ。これだったらこの間の事情聴取の方がまだ楽だ。

っつったって、セシリアの言葉にも一理ある。深く考えすぎてそればっかりに囚われていた。そうじゃなくて、ここにいるのは、俺の目の前にいるのはどこにでもいる『一人の女の子』なんだ。まあ、お嬢様ってのが後ろあたりにつくけど。

それでも、そう考えると…流石に答えなきゃマズいか。

「俺は……」

「どんな答え方でも構いません。貴方が納得する答えを、お聞かせください」

お茶を飲んでいるときの仕草、負けず嫌いな表情、戦う時の凛々しくも綺麗な顔……。

もしかして……好き、なのか？

…なんだろうなぁ。

「俺も…そうかもしれない。俺はセシリアが……好きだ」

小っ恥ずかしい食後のお茶を終え、カフェを出ると予定通りにショッピングモールを歩いて回った。何着か買ったところで寮に戻ると、昼間の噂を聞きつけた女子達が群がってきた。
逃げなきゃ報道られる、と思いフルスロットルで部屋に戻った。
その間中は、着飾ったように腕を組んではおらず、手を繋いだままだった。絶対に離れないように、と。

第17話　Bad tea time［unlucky］（後書き）

ごめんなさい！！！！（T－T）

何かおかしいですよね？？おかしいですよね？

構成上、こうなっちゃいました。

まだ一巻分が終わったばかりなのに。

感想及びご指摘、ありましたらお願いします。

第18話　Believe the Lovers day（前書き）

添い遂げましょう。

貴方と共に、この夜を。

死が二人を別つ、その日まで。

第18話　Believe the Lovers day

６月～Ｊｕｎｅ～

朝。

一夏さんが目を覚ましてから一週間。晴れて恋人同士になったワタクシと一誠さんは、部屋割りも変わることなく過ごしてきました。流石に夜伽まではちょっと…年頃ですし、まだ早いですわね／／／かといって、話に聞くような甘いひと時はなく、ティーパーティーの時間が少し延びたぐらい。夜更かしは大敵ですが一誠さんとの時間の為なら苦ではありませんわ。

「……」

リボンを整えて、と。今日も滞りなく支度を終えると誰もいないベッドに視線を移す。もう一誠さんは朝食を終え職員室へ。代替機の申請自体がまだ終わってなかったらしく、その為ここ最近は起きてすぐ職員室へ向かっているご様子。

いつまでも不安になっていても仕方ありませんわ。よりよき学園生活のため、一誠さんとの約束の為にもワタクシが笑顔になりませんと。

@@@@〜@@@@

「だぁ〜。やっと終わったぁ」

山のような、というか本当に山に見えたぞあの書類。本当にマンガに出てくるような『山』だった。書き上げるのに放課後まで使ってしまうとは。

「お疲れ様でした。後はこちらで提出しておきますから、ゆっくり休んで下さい」

「っていっても、この後授業なンスけど…」

申請書を何十枚か毎に分けている山田先生。授業の後にも書かなきゃいけなかったから尚更疲れが出てくる。
何か、一夏が目を覚ましてからというもの、不幸が次々に俺に降りかかってないか？部屋に戻ればオアシスだけどな。
ちなみに、一夏は数日前に復学している。ＩＳはまだ修復中だから訓練には見学でしか参加できない。加えて、遅れた分の授業は補習ってことで放課後に何時間か残っているようだ。
ま、こっちも代替機の調整に集中できるし、いいか。
気だるそうに教室に入ると、既に一夏と篠ノ之、それにセシリアが談笑していた。

「おはよう、一誠。大丈夫か？」

「ああ、申請書がやっと終わってな。それとセシリア、声かけずに先に出ちまって悪かった」

「構いませんわ。大事なことですし、仕方のないことですわ」

あれからセシリアとは進展が無いように見られがちだけど、お互いの他愛の無い会話には時間を割いている。ティーパーティーだって自然となってきたし。今までは何か社交辞令のような感じだったからな。

「そういえば、黒崎達は最近何かあったのか？」

「「…は？」」

だから代表候補生（セシリア）、そういう返事は止めろって…てか、気づくの遅いぞ、箒サン？

「いや、お互いに砕けた感じだから気になってな…」

「これに関してはお前等で察しろ。この朴念仁共」

「『共』って、俺も入ってるのか？」

「当たり前だろ、朴念仁。お前『だけ』は違うのか？」

「……最近、千冬姉からそのことで軽く説教された…」

「自覚があるようだな…私は違うので訂正してくれ」

黙れ堅物。そういうのはもうちょっと素直になることをお勧めします。

なんてなことをやってると織斑先生と山田先生が教室に入ってくる。ＳＨＲの時間か……何か最近こんな光景無かったような…気にしたら負け、か。

「おはようございます！今日は皆さんに、転校生を紹介します。しかも二人です」

「「「「「えぇ～～～～～！？」」」」」

そんな山田先生の一言と、教室の喧騒から一日が始まった。てか、何人転校生詰め込むんだよ。足りるのか？机の数。

教室に入ってきたのは二人。一人は『シャルル・デュノア』。金髪にエメラルドグリーンの瞳、『美少年』と呼ぶにはふさわしいかもしれない。非常に大人しい男だ。アレ？デュノアって確か……

「「「「「きゃあああああぁぁぁぁぁ！」」」」」

思い出そうとしたらコレだよ…このクラスの担任、誰だか忘れてるだろ？てか、音圧だけで人飛ばせそうだったな、今の。各々好き勝手言ってると、山田先生がクラスを宥めはじめる。大変だな、あの人も。

「静かにしろ馬鹿者共。まだ一人残ってるんだぞ」

その一言で、シンと静まり返る教室。学校の教室ってこれで合ってるよな。静かなのが一番だ。

「ラウラ、自己紹介しろ」

「はい、『教官』」

「ここは学校だ。織斑先生と呼べ」

「はい」

もう一人堅物が出てきた。これ以上こんなん増やすなよ、俺がハゲる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……あの、以上ですか？」

「？…以上だ」

あ～あ、山田先生泣きそうだぜ。あんなんで良いのかねぇ軍人って。何で軍人って解ったかって？姿勢、肩幅までしか開かない足、ついでに織斑先生を『教官』と呼んだこと。ＯＫ？

「！！！…貴様…っ！」

ん？誰か見つけた…って一夏か。何かありそうだな…仕方ない…。ここで俺の出番かよ…っつっても、動けるのは俺だけか。

ボーデヴィッヒが一夏の席まで歩み寄ると、右手で一夏の頬を叩く。はずだった。

その前に俺が振りぬかれる寸前の右手を握り込んでいた。ボーデヴィッヒの後ろに立つようにして。

「貴様！！！何をする！？」

「そりゃこっちの台詞だぜ？友達（ダチ）が殴られるのを黙って見てるほど、お人好しじゃないんでな」

「お前には関係無い事だ！！邪魔をするな」

振り解こうと必死になっているが、俺だって力負けしない。折れない程度までに強く手を握ると、ボーデヴィッヒの顔が歪む。軍で訓練してたって女だ。骨まで鍛えられるか、と聞かれれば『ＮＯ』だろう。

「っく……」

「……」

「二人ともそこまでだ。ここで闘り合うつもりか？」

そこで試合終了、てか強制終了か。手を離してやるとそのままツカ

ツカと指定された自分の席へ向かう。殴られるのを止めたのに出席簿は喰らいたくはないので、ソソクサと自分の席に戻る。

「ＳＨＲはここまで。織斑、黒崎。デュノアの面倒を見てやれ」

そういや、最初の授業は訓練だっけか。急いで行かなきゃな……あそこまでがまた遠いの何のって。

何故その時気付かなかったのだろうか、奴の眼は『一夏を殺す』って眼をしていたのに。

そして、その転校生達はまた一波乱起こしそうな方々だったのに。

第18話　Believe the Lovers day（後書き）

短いかもしれませんが、一応更新です。

タイトルと内容が合ってないって？申し訳ないッズ。

感想及びご指摘ありましたらお願いします。

第19話　Ｍｅｔｒａ　Ｊｅｔｔａ（前書き）

弾を籠め、引き金は指で引く。

人に当たっても、物に当たっても、

命は消えてゆく。

もしかすると…絆も。

第19話　Metra　Jetta

学園内・グラウンド

授業内容はＩＳを使った実技演習。
皆揃ってＩＳスーツを身に纏い、集合している。一人は俺達の移動中に捨ててきた。もとい、生贄にした。さっきのは酷過ぎる。ＳＨＲが終わると、どこから聞きつけたのか、他のクラスの娘達が廊下に犇めき合いながら迫ってくるのだ。そんなの誰だって怖いに決まってる。そんな中に一夏という尊い犠牲を払って更衣室に逃げ延びた。アイツの場合は日頃の行いの所為だな、間違いなく。
着替え中、デュノアはずっと背中合わせの形で着替えていた。何がそんなに恥ずかしいのか…いいトコのお坊ちゃんはちょっと解らない。「変わったスーツだね」ぐらいしか会話していない。
グラウンドに集合すると授業開始一分前。織斑先生には「犠牲になってくれました」とだけ伝えておいた。

遅れて一夏が合流してきたと同時に出席簿アタックが火を吹く。叩かれた記憶は無いがとても痛そうだ。それとも音だけなのだろうか。

「では本日より、ＩＳを使った射撃、及び格闘を含む実戦訓練に入る」

「「「「はい！！！」」」」

てな感じで授業開始。はいいんだが、鈴音とセシリアが頭を抱えて何かブツブツ言ってる。どうやら一夏の事で言い合ったようだ。誰が授業受け持ってるか、そろそろ勉強した方がいい。

「今日は戦闘を実演してもらう。ということで、凰、オルコット。前へ出ろ」

「な、何でワタクシまで！？」

「専用機持ちはすぐ始められるからだ。いいから前へ出ろ。それと黒崎」

ん？なんで俺？

「お前もすぐに始める準備をしておけ。代替機とは言え、最適化（フィッティング）と初期化（フォーマット）は終わってるだろうが、慣らし運転も必要だろ？」

確かに、最適化（フィッティング）と初期化（フォーマット）は微調整時には終わってるけど、実際には戦闘訓練すらやってないからな。この時間で慣らすのも手だな。

「わかりました。準備しておきます」

「一誠さん？先日渡された代替機ですけど、遠距離タイプですわよね？大丈夫ですか？」

「ああ、スペック上は俺のとあまり変わらないからな。後で浦原さんに聞いてみたらコイツがベース機らしい」

とてもじゃないが戦闘スタイルすら違うかもしれないが、コンセプトとしては「最軽量、最低限装備での高速戦闘用ＩＳ」らしい。

その試験機として開発されたものだそうだ。

「無駄話はするな。準備しろと言ったはずだが…」

「「しっ、失礼しました！」」

二人揃って注意された。こういうトコだけは恋人同士らしい、なんてのは違うな。

「で、先生。アタシ達の相手って誰なんですか？アタシはセシリアでも良いんですけど」

ちゃんと挙手までして織斑先生に質問。最後だけは挑発にしか聞こえない。

「あら、挑発のつもりですか？生憎と、そんな安い挑発では相手にはできませんわ」

成長したな、セシリア。いつまでも以前のままではないようだな。

「慌てるな馬鹿共。お前らの相手は……」

言葉を遮るように、どこからか風切り音が聞こえてくる。判っていたのか、織斑先生が視線を上に向けるとそこには……

「どっ、どいてくださいいいいいい！」

山田先生、ＩＳあってもドジッ娘なンスか、貴女。飛んでいるとは思えない体勢ですよ。しかもスピード殺せてないまま俺の方に…って俺か！？

「出ろ…『一誠』」

それだけで、俺はＩＳを部分展開する。右腕だけを。

ガシャキンッ！！

金属同士がぶつかるような音を立てて、山田先生が空中でぶら下がっている。否、光る獣がＩＳの足に噛み付いて山田先生を捕まえていた。先生は鼻先数センチのところでやっと止まったのだ。

『グルルルル…』

ゆっくりと、噛み付いたまま獣が着地すると、地面に寝転んだ山田先生の頬を舐めてやる。

「ひゃぁっ！？く、くすぐったいです…って黒崎君？」

俺の影で気付いたのか、今の状況をやっと理解した。

「あ、ありがとうございます…それが代替機、ですか？」

部分展開した上半身の右側は白く、前腕、首元、展開しているコートの裾部分がファーとなっていた。

「ええ、後で全部見せますから。授業進めましょう」

展開解除すると散らばった生徒の中に戻る。それを見た織斑先生が開始の合図を告げる。「言っておくが、山田先生は元代表候補生だからな、お前等ならすぐに負ける」の一言を加えて。

「さて、今の内に…デュノア、山田先生の使っているＩＳについて説明できるか？」

いいように手玉に取られている二人の戦闘を見ながら、デュノアが先生の『ラファール・リバイヴ』について解説している。予備知識として知ってはいるが、たしか後付装備が豊富で、汎用性に優れていなかったっけ。出てきたのは第二世代後期だったはず…にしても、ＢＴ兵器のエネルギーがすぐ切れるな。燃費が悪い動かし方でもしてるのか、セシリアが動いては止まり、動いては止まりを繰り返している。

死角からの牽制のつもりなのだろうが、個人の性格を解っているとああいうのはすぐに読まれる。鈴音に至っては衝撃砲を使わずに接近戦ばかりを挑んでいる。あの二人、前世は鳥と猪だったんじゃないか？

なんて考えていると、ぶつかったままの二人に先生が止めのグレネ

ードを見舞って試合終了。爆煙の中から二人揃って地上に激突する。一番に口を開いたのは俺だ。

「何やってんだ？二人して」

「く、黒崎！！！アンタこいつに何教えてんの？馬鹿みたいにビットばっかり使って…」

「そういう貴女こそ！猪みたいに突進するだけしか能がないのですか？」

「止めろ、みっともねえ。反省して次に活かせばいいだけだろうが……山田先生、S・E、どれぐらい残ってますか？」

「え…あ、はい。ほとんどダメージもないのでまだまだ残ってますよ？」

空中で待機していた山田先生に聞くと、織斑先生に視線を向ける。

「このまま始めても、支障ないッスか？」

「いいだろう。ただし、お前はやりすぎる傾向があるからな…程々にしろよ？」

「了解ッス」

そういうと、目覚めたように光りだしたリングを手の平に乗せる。眩く光るソレは今にも咆哮を上げそうなほどに光を強めていく。ある程度皆が離れたのを見ると、ある『言葉』を放つ。命令するように。

「蹴散らせ…群狼（ロス・ロボス）」

そしてもう一つのＩＳが目覚める。名前と違い、『孤独』を背負った狼となって。

第19話　Ｍｅｔｒａ　Ｊｅｔｔａ（後書き）

ほとんどオリジナルで進めちゃいました。

感想及び指摘ありましたらお願いします。

閑話休題　代替機&Ｉｍａｇｅ　２（前書き）

ここでは、二巻以降に登場するキャライメージ曲と代替機の紹介をします。

閑話休題　代替機&Image　2

代替機
『群狼（ロス・ロボス）』：モチーフはＢＬＥＡＣＨに登場する破面（アランカル）、コヨーテ・スタークの刀剣開放状態。

コンセプトは「最軽量・最低限装備による高速戦闘と射撃戦」。専用機『　』（無明）の前身にあたる機体として浦原喜助によって開発された。
砲撃戦闘と高速戦闘に特化しており、軽量ながら最高火力の搭載に成功している。機体バランスは従来のＩＳより著しく悪化しており、テストでは「立っているのがやっと」という意見も出ていた。
武装はデザートイーグル並みの砲身に、砲身下部には小型ブレードを取り付けてある。弾装はなく、左右の肩から両腕前腕部にかけて伸びている帯の中には小型の粒子加速器を装備。これにより、光子エネルギーのみを使用しての砲撃が可能。さらにはそのエネルギーを刀の形に形成して近接戦闘も可能にしている。「誘発式防御システム」はこの機体に初めて搭載されるが、ＯＳがまだ未完成で、処理能力に多大な負荷がかかってしまうが、無明完成までの間改善されることはなかった。通常通りのＳ．Ｅ展開によりユーザー保護の面では一定の評価を得るも、前述の機体バランスの所為で無明に専用機の座を譲ることになる。

単一仕様能力：無限装弾虚閃（セロ・メトラジェッタ）
粒子加速器を最大稼動させることにより、高出力のビームを乱発できる。高速連射は可能だが、一つを最大稼動できる時間が１５０秒、冷却に１８０秒を要する為、使用可能時間が極端に低い。ＯＳ自体が未完成であるため二つの粒子加速器を同時に稼動できず、Ｓ．Ｅ

の関係上連続使用の回数が両腕合わせて四回が限度である。

続いては、キャラクターのイメージ曲。

シャルル・デュノア　（シャルロット・デュノア）：ＣＨＡＮＧＥ　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＵＶＥＲｗｏｒｌｄ
一番変化の大きいキャラなので、変化に合わせた曲です。
この小説を考えている時からずっとコレだ！と思ってました。

ラウラ・ボーデヴィッヒ：Ｋａｋｕｓｅｉ　Ｓｏｎｇ　ｂｙ　ＲＩＤＥＲ　Ｃｈｉｐｓ
後の自分への目覚めと、変わる自分に合っているとは思います。

ヤヴァい。ほとんど作業用ＢＧＭになってる（＾＿＾；）

閑話休題　代替機&Image　2（後書き）

以上です。

指摘ありましたらお願いします。

第20話　The breaker's Turn（前書き）

壊れろ、壊れろ。

何もかも、全てを。

でも、壊せないものがある。

それは、愛する心。

第20話　The breaker's Turn

ただ、立ち尽くすだけ。形成し終わったＩＳ『群狼（ロス・ロボス）』を見ていたクラス一同は声を出せずにいた。
カウボーイ風のいでたちに、狼の毛皮をあしらったコート。左目にはポインターのようになっており、大腿部からの装甲にはホルスターが一体になっている。ウイングスラスターもなく、ただ人が立っているような感じ。だが、それでも…

「やっぱ、こういう風にスッキリしてるのが、一番良いな」

ゴテゴテくっついているのは性に合わない。それってＩＳ自体を否定してないかな……。
戦闘準備も出来てるし、そろそろ始めないと織斑（しゅら）先生が出てくる。そう考えると、山田先生と同じ高さまで飛び立つ。ただのジャンプでも端から見れば全力の跳躍には見えないだろう。

「お待たせしました。こっからは無礼講ってことで、良いッスか？」

「一応先生には敬意を払って頂かないと……でも、それでも良いですよ。何だか全力で戦えそうな気がします」

おお、山田先生が凛々しく見える。というよりかは、何か吹っ切れたのか…確か、一夏の試験の相手って山田先生だったっけ？
まぁ、いいや。今は目の前に集中しねえと、

「じゃあ、アンタのその力……見せてもらうとしますか」

そういうと左のホルスターから銃を抜く。デザートイーグル程の大きさの銃を山田先生に向け、ロックする。

「一応言っとくけど…」

「……？」

「最初から本気で行かねえと…怪我するぜ？」

その言葉を終えた途端、銃口からビームが放たれた。

その瞬間、山田先生は一瞬だけ驚いたようだが、そこは元代表候補生、すぐに切り替えて回避に入っていた。それと同時に瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使って俺の右側へ。既にロックオンされているが、俺は素早く左手の銃をホルスターへ戻し、右のホルスターから銃を抜きながら撃つ。ロックはしない。

先程の戦闘で、事前に相手の情報全てを入力し終えているからほぼ自動ロックに近い状態で砲撃に入れる。

今のも避けられたか。じゃあ、しょうがねぇ…

「これなら…どうだい？」

薙ぎ払いながら四、五発発射するが、当てる為じゃない。これで弾幕のように使って距離を取れる。しかも相手は第二世代後期に誕生した『ラファール・リバイヴ』、単純に性能を逆手にとっての戦術にしているだけだ。と、言いたいが……自分で撃っといてアレだけど…弾幕ってレベルじゃないな。ほとんど壁だ。

セイフティーロックの確認もされていない。って事は…

「こういう事だろ？先生」

「……っ！！」

やはり、下から接近戦を仕掛けてきたか。壁が正面なら下から来れば良い。ましてや空中だ。相手の真後ろ以外は移動し放題。バックステップで避けても接近してくる。振り下ろしてきたナイフを、銃口直下にあるブレードで受け止める。この武装は元々接近戦用じゃない。懐に入られたときの防御手段として装備されたもの、いわば申し訳程度ってヤツだ……けど、

「中々重い一撃……接近戦も得意とはな。らしくねえマネするなよ」

「織斑先生と組手を何回もしてますし、それに元々『打鉄』も使ってましたから…ねっ！」

ナイフで打ち負けるとは、腕力は相当あるようだ。しかも、薙ぎ払った力を逃がさずに、回転しながらもう一回、今度は横薙ぎに仕掛けてくる。が、当たらない。頭だけ動かすとその動きのまま後転して距離をとる。互いにそこで戦いを止めてしまう。間合いを確かめるように。

「らしくねえマネするなって言ったろ？先生」

「らしさの押し付けは良くないです。ちなみに『あっ』と驚かせたいのが私らしさです」

言ってくれるじゃねえか…たしかにらしさの押し付けは駄目だな。

「ちっ…アンタは同じタイプだと、思ったんだけどな」
織斑先生からは止められてるけど、本気で行くか。俺らしさも見せないと…後で痛い目を見そうだ。
「今はアンタのペースに振り回されてるんだろ？だったら…」
左手の銃を構える。そっちが本気なら様子見する必要は無いって事か…
「アンタ目がけて１０００発ぶちこみゃ…それを崩せるって訳だ」
―――単一仕様能力（ワンオフアビリティー）：無限装弾虚閃（セロ・メトラジェッタ）　発動
ウインドウの表示の直後、肩から延びている帯に光が溜まり始める。と同時に風を切るような音が聞こえてきた。粒子加速器が作動したのだ。
「１０００発って……そんな非現実的な…」
瞬間、山田先生の顔から表情が消えた。銃口から光が見えたと同時に回避行動に入ろうとしているが…遅い。

「……無限装弾虚閃（セロ・メトラジェッタ）」

チャージ終了と同時にビームを発射する。いや、相手からすれば光る壁が高速を超える速さで突っ込んで見えるだろう。当たる当たらないお構いなしに連射するが、右の視界の隅に山田先生を見つける。『ラファール・リバイヴ』での回避能力でも直撃は避けられたようだがシールドバインダーが焼け焦げている。相手のＳ．Ｅ表示を見ると１０３、それだけ削れりゃ十分だ。全ては避けきれてない。けど…

「逃げても無駄だぜ」

右に薙ぎ払うように連射し続ける。何せ１５０秒間は打ち放題だからな。時間一杯まで撃ち切らせてもらうぜ。

「ちょっ……それ、反則ですよ！？」

「戦いに反則もクソもあるかよ？無駄口叩いてる暇があったら仕掛けて来いよ」

その言葉に触発されたのか、一直線に接近してくる。ただの凄腕姉（ホットドガー）ちゃんじゃなかったようだ……ナイフとアサルトライフルを装備したまま突っ込んでくる、って事はどっちかが囮（フェイク）か…だったら、

そこで銃を打ち切る。予想より撃ちすぎたみたいだな。赤熱化した帯を目だけで確認すると、接近してくる山田先生はナイフを横薙ぎ

に振るってくる。そっちがフェイクか。そこで俺は山田先生が、ひいては下にいる皆が驚く程の行動に出る。
確かに山田先生はナイフを振るった。が、そこには俺はいない。俺がいたのはナイフの切っ先の上、つまり、つま先でバランスを取ったままナイフの切っ先に着地していたのだ。専用機でも出来るが、こっちの方が繊細な動きが出来る。

「それも……反則、ですよ？」

それは否定しない。右の粒子加速器を作動させ、右手にエネルギーを集中させると、『刀』を形成した。この機体の接近戦用の武器だ。

「言ったろ？戦いに反則は無え、って」

その『刀』を振るってＳ．Ｅを０にした瞬間、勝敗は決した。

第20話　The breaker's Turn（後書き）

以上が代替機デビュー戦です。

自分なりに再現出来たと思います。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第21話　Look at the respect teacher（前書

尊敬とは尊いもの。

敬意とは敬うもの。

そして、敬うとは、得てして美化してしまうもの。

第21話　Look at the respect teacher

「これで諸君にもＩＳ学園教員の実力が解っただろう。以後は敬意をもって接するように」

織斑先生の一言をもって実戦訓練は終了。

俺はと言えば、山田先生と織斑先生の間で正座させられている。「教師との約束を破るとはいい度胸だな」と同時に出席簿アタックが頭に直撃した。うん、ホントに痛い。あんなに痛いモノだとは正直欠片も思っていなかった。あんなん喰らってる一夏が気の毒に思えてきた。アイツその内記憶飛ぶんじゃねえか？

「専用機持ちはオルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな。十人グループに分かれて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがすること。いいな？」

「先生？俺はどうすれば…」

「お前はグループ分けが終わったら適当に指導に回れ。グループリーダーのサポートだけでいい」

「了解ッス…と言いたいンスけど、皆オロオロしてません？」

見れば、どこのグループに分かれるかで友達と話し合ったり、キョロキョロと見回したりしてる。友達付き合いも大切だけど授業なんだから…

「しゃあねえ……お～い、出席番号順に分かれてけ。日が暮れるぞ～？それとも、キッツ～イ指導でも受けるか？」

それとほぼ同時に出席番号毎にどんどん分かれていく。最初からそうすればいいのに…

「言ってくれるな。私の役回りを奪い取るとはな」

「生徒に自主性を持たせるのも、教師の仕事ッスよ？」

「そうだな……そろそろ行け。お前こそキツい指導を受けるか？」

「それこそ冗談を。行きますよ」

それぞれのグループリーダーが機体を取りに来た頃、俺もサポートに回る。最初に機体を取りに来たのはデュノアの班か……初歩的なことを丁寧な教え方をしてたのを端から見ていたが、アイツ…意外と教師向いてるかもな。

「ねえ…デュノア君って、やっぱり教え方上手いよね？」

「そうそう…専用機持ってるのに、それを鼻にかけないっていうか」

「男でＩＳ使えるのに、あそこまで上手いと何か…ね？」

たしかに…デュノア社社長の子、ってこともあるけど。

「どうした？何かの相談か？」

「きゃわっ！く、黒崎君！？」

声をかけるまで気付かれないって、俺そんなに影薄いか？まあ、いいや。

「な、何でもないよ…」

「そ、そうそう。何でもない何でもない」

「そんなに怖いか？俺」

「ちっ、違うよ！ただ…ねえ？」

「……？」

女子達揃って顔を見合わせながら、何か申し合わせてる。あまり声かけないから緊張してるのか？

「ど、どうしよ？思い切って聞いてみようか？」

「でも…なんか聞くのも怖い気がして…」

結局怖いのかよ！？まあ、接点ないと話しかけづらいよな。

「答えられる範囲で良ければ…良いけど？」

「……じゃあ、聞くけど……」

はいはい、お兄さんが答えてあげましょう。流石に無茶振りは困るけどな。

「「「「「「セシリア（オルコット）さんと付き合ってるって、本当？」」」」」」

……はい？

聞きたいことって、ソレかよ！？てか、何処でそんなん聞いた？

「えっと、新聞部とか…先週街にいた友達とか、に」

新聞部はともかく、あん中にも情報源がいたのかよ。世間って広いようで意外と狭い。

「それは…えっと…企業秘密？」

「「「「「そうは問屋がおろしません！！！」」」」」

だろうなぁ…本当の事言って早く逃げたいけど、話したら話したでセシリアに被害が及ぶんだよな。妥協策は早くも却下されたし、逃げられない…よなぁ。

「…まあ、たしかに「あら、何かのご相談でしょうか？」…は？」

声のした方を見ると、笑顔の山田先生。でも、何か違和感が…

「黒崎君。ボーデヴィッヒさんの班が遅れてるみたいなんです。行って頂けますか？」

先生？声がワントーン下がってますよ？

「返事が聞こえませんが…よろしいですか？黒崎君」

「はい…行きます」

こ、怖い。いつも穏和な性格の人を怒らせない方が身の為だ。来てくれたことに感謝しながらボーデヴィッヒの班へ向かった。

「貴様！そんな簡単な事も出来ないのか！！？あの人の下で何を学んだのだ！！」

「え……え、えっと…」

「落ち着いて。ゆっくりでいいから手順通りに、な」

もたつき加減に怒り心頭なボーデヴィッヒを無視するかのようにアドバイスする俺を奴は睨みつけている。いやいや、そこで殺しますよ、的な視線は止めてくれよ。

「邪魔をするな。お前は隅っこで眺めていればいい」

「そういう訳にいくか。こっちが遅れてるってんで来たんだよ。文句言うな」

「文句ではない。これは『命令』だ」

「命令、ねえ……そうそう、それでいい。後は確かめながらで良いから一歩ずつ前へ出てみよう」

言い合いながらもアドバイスする俺に業を煮やしたのか、班を離れて織斑先生の下へ向かおうとしている。

「何処行くんだよ？お前の班だろ？」

「教官に直接抗議してくる」

「……ガキが」

「何だと？」

俺の一言でその足を止める。よほど癪に障ったのか、先程見た怒った顔より更に怖い。

「自分の思い通りに行かないと気が済まない顔しておきながら、そうならなくなると途端に顔色変えて放り出す。お前こそ、織斑先

生の下で何教わったんだよ？」

「きっ…貴様！！」

すると、ボーデヴィッヒがＩＳを部分展開し、長大な砲身が水平に砲口が俺に向いている。生身の人間に武装展開か、沸点低いな。そこまで尊敬…いや、『崇拝』してるのか。

「てめえの言い分なんて要らねえ。教えるなら投げ出さずに最後までやれ。どんなに遅くても、どんなに失敗があっても、てめえがそこで投げ出したら、てめえの方が『ろくでなし』なんだよ。それすら教わらなかったてめえは『ケツの青いガキだ』ってんだ。祖国に帰って積み木遊びでもしてろ」

「……っ！！！！！」

怒りで言葉が出ないのか、何も言わずに長大な砲身が火を吹く。兵装から考えてレールガンか。何か特殊な武装かと思ったけど…案外簡単だな。

俺は右腕だけを部分展開すると、そのレールガンの弾を、手だけで、弾き飛ばす。まるで勢いよく引き戸を開けるように。

２０ｍ程先だろうか、弾かれた弾が着弾し、土煙を上げている。

「ば……馬鹿な。手だけでレールガンを弾く…だと？」

「ま、半分は勘…だけどな？」

残りの半分は兵器の知識としてだ。レールガンなんて電磁加速によって初速から最高速度で発射させるシロモノだ。つまり、それ以

上速度は上がらない。ましてや一直線に向かってくるんだ。予測なんてスピードだけでいい。

「都合が悪くなると強硬手段、か。てめえの身勝手振り回してそんだけで終わると思ってんのか？いい加減にしろよ」

「何の騒ぎだ？」

そこでようやく織斑先生到着。隣はアタフタしてる山田先生。

「原因はあえて聞かん。だが、お前の班はただでさえ遅れているんだ。さっさと続けろ」

「…はい」

「……」

さっきとは違って、親に叱られた子供のようにしおらしくなる。それを黙って見ていた俺は、これでいいのか？という疑問符ばかりが浮かんでいた。

「黒崎。お前はこっちに来い」

「はい」

他の班がどんな進み具合なのかがよく見える。隣には鬼…もとい、織斑先生がいる。何か制裁でも来るのかと思って身構えているが、思いがけない言葉から会話が始まる。

「すまんな、黒崎」

はい？いきなり何でしょう？事情が飲み込めない。

「アレがああいう風なのは、国が原因でもあるが、私にも責任がある」

「…どうしてまた」

「昔話は嫌いでな…知りたければ明日の朝までの宿題にしてやろう」

教えてはくれないんですね…やっぱりスパルタなことを。でも意外だな、織斑先生にも話したくない事があるのは当然か。

「じゃあ、そうします。それと、今朝浦原さんからの連絡で俺の専用機、明日こちらに送ってくれるそうです」

「そうか…暫くは私が預かろう。期間内に有事の際、お前に返す」

「了解です…」

それから授業が終わるまでの間、各班の様子を見たまま会話しなかった。

そして、昼休み。

あの授業後、各機体を倉庫まで運搬していた。人力で。
体が痛い痛い。あんなん人力で持っていけないだろ？人間の体なんだと思ってんだ？
まあ、全部終わったからいいんだけど。んでもって昼休み、一夏達が屋上での昼食を提案してきた。デュノアの為を思ってのことらしい。アイツ、頭叩かれ過ぎて遂に男に走ったか？
屋上に向かう途中、後ろから声をかけられた。声の主は眼帯に銀髪の少女だ。軍人の。

「お前に聞きたい事がある」

「……」

振り向いても答えない。言っておくけど嫌いではないし、好きでもない。ただ、コイツはどうしても『気になる』。どうすればあんなに個人を『崇拝』できるのか。が、それは聞かない。聞いたところで俺には理解できないし、したくもない。

「何故、あんな事を言った？私は軍人だ。あのように厳しくすることが、私が今まで教わってきたやり方だ」

「それがどうしたよ？ここは軍隊じゃねえんだ」

「だが、『ＩＳ』という戦闘兵器を扱う場所だ。そうして教えて当たり前だろう？」

「誰もがみんなお前みたいには強くねえ。いや…はっきり言っておく。お前は『まだ』弱い」

「…っ！！何だと！！？」

「俺からはそれだけだ」

そう言って屋上へ向かおうとするが、何故か釈然としなかった。言った俺も『まだ』弱い。強いとは言われても、どんな風に『強い』んだ？

『強さ』って……一体、何だ？

内容的には納得していますが、描写には少し不安が…

強制はしませんが、出来れば指摘程度でも良いのでお願いします。

はっきり言って、反省点だらけッス。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第22話　Lunch time and truth strong（前書

夢は儚い。

伝えたい想いもまた儚い。

真実は痛みを伴う。

目の前の出来事もまた痛みを伴う。

どちらも人に、希望をもたらすもの。

第22話　Lunch time and truth strong

屋上

ボーデヴィッヒとの対話も諍いで終わってしまった昼休み。丁度皆集まっている。
何でこうなってるのかさっぱり解らない。でも、友達(ダチ)同士でのこういった時間も悪くない。

「さて、一誠も来たことだし、メシ食おうぜ？」

「そういえば一誠さん？今朝は昼食は作れませんでしたわよね？」

セシリアの手にはランチボックス。あの中身はたしかサンドイッチだったか…なんか、嫌な予感しかしない。申請書を今日まで書き続けた自分を呪い始める。

「皆のを摘んで終わりにするさ。腹の足しになればそれで充分」

「それでしたら、ワタクシのを……」

「セシリア。頼む、勘弁してくれ」

自分の昼食を勧めてきたセシリアに涙目で答える。料理本と同じに作れればいいわけじゃないぞ、セシリア。

「何故そこまで懇願するのか解りませんが……」

じゃあ自分で食ってみろ。そうすれば嫌でも解る。同じ色の食材なら何でもいいじゃない。
肩を掴んで、首を横に振り続ける俺にセシリアは疑問符だらけの顔になってる。

「そういえばアンタ達って、付き合ってるの？同じクラスの娘に聞いたんだけど」

鈴音の爆弾投下。うん、お前空気読め。

「またここにも情報源が……俺、どうすんだよ？」

「何？どういうこと？」

まったく事情がつかめていないデュノアは両端にいる一夏と鈴音を見た後、俺に視線を向けてくる。やめて、俺、パンダじゃない。

「よろしいのではありませんか？隠していてもいつかは解ってしまうのですし」

そうだよ、確かにそうだけど。俺のプライドは音を立てて崩壊するのが解った。
いっか、どうせ俺は動物園のパンダだよ。

「そうだな……話したほうがいいか」

さらば、俺のプライベート。そして、こんにちは。新しい日常。

「「俺達(ワタクシ)は、付き合ってるよ（ますわ）」」

「……」

長い、この長い沈黙が痛い。

「ほらな？こういう顔されるの解ってたから言いたくねえんだよ」

「たしかに…そうですわね」

顔を見合わせてそんなこと言ってるけど、その呆けた顔は流石にどうかと思うぞ？

「……一誠、これは夢か？」

「最悪なことに現実だ、ドアホ」

言った後で凄え後悔してるけど、もういいや。平穏静かな生活にオサラバしたばかりで泣きたいぐらいの現実さ加減だよ。
その現実を教えるように、一夏の頭を思いっきり殴ってやる。勿論フルスイングで。

「いってぇぇ……何もそんなに強くしなくても良いんじゃないか

？いくらか脳細胞死んだぞ？」

「心配すんな、お前の脳細胞はココに来てから死に始めてる」

主にお前の姉ちゃんによって、だけどな。

「しかし…お前達いつからだ？」

ようやく浮上してきた篠ノ之からそんなことを聞いてくる。そこは答えたら色々マズい、というか。

「たしか……対抗戦の後から、だったか？」

「そうですわね。その時からでしょうか……」

「つい一週間前じゃない！！その頃アタシは医務室のベッドとお友達だったわよ！！？」

そうだったな。お前は軽症だったけど、精密検査やら何やらで医務室から出れなかったんだっけ？

「あんた等の甘い生活を、アタシの平穏として返しなさい！！今すぐに！！」

そんな無茶な。てか、何でお前に返さなにゃならんのだ。

そんな昼休みも過ぎ去り放課後。デュノアも一夏の訓練に参加するとのことなので、俺は手持ち無沙汰だ。あんな大人数で教えてたって何の実りも無い。てか、話の的になるから行きたくないのが本音。

んで、一人で学校内を彷徨っている。無駄に広いけど、そこは国立校。何百人も詰め込んでいるわけじゃないか。

と、そこに織斑先生と出くわす。何か廊下でのエンカウント率高いな、今日に限って。

「丁度いい、お前に話がある。職員室に来い」

連れらて職員室へ。何かした覚えは無いけど、何か嫌な予感がしなくもない。ただ、何故？としか考えられない。

呼ばれる理由としては…『専用機（アレ）』か。今まで基本スペック以外は開示出来なかったんだ。俺でさえ。出来るのは浦原さんだけだったけど、その事か。

職員室に入り、織斑先生が席に着くと開口一番そのことを聞かれた。

「お前、あのＩＳの事で何か隠しているだろう？」

やっぱり……聞かれたか。正直話すとややこしいことしか生まないから言いたくなかった。あの一件から覚悟はしてたが、こうもサッパリと聞かれるとは…

「ええ、ありますよ」

「何故今まで話さなかった？」

「聞かれてませんし、話せば先生が止めたでしょ？」

一応事実だし。スペックの開示は専用機持ちには必須事項だけど強制ではない。

「……では改めて聞こう。お前のＩＳの単一仕様能力（ワンオフアビリティー）は何だ？」

溜息のあと、織斑先生から切り出された。ここまで来たら話す以外に道は無いか。大きく深呼吸したあと、俺は『真実』を語る。

「アレの単一仕様能力（ワンオフアビリティー）は『死神（ソウル・リーパー）』。その能力の源は……

…『俺の命』です」

時計の振り子は戻らない。ただ、静かに時を刻むのみ。

第22話　Lunch time and truth strong（後書

ギャグパートすらも難しい。

それありきの原作なのに。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第23話　truth［and　fight］（前書き）

痛みを、苦しみを、

自らの力に変えた時、

自分の中の絶望も顔を出す。

第23話　truth［and　fight］

「い……命、だと？」

織斑先生が絶句してる。そりゃそうだ、ＩＳという現時点のブラックボックスの塊にそんな能力があれば、誰だってそういう顔する。

「正確には、『ユーザーの生命エネルギー』です。それをＳ．Ｅに上乗せして有り得ないほどの高出力を発揮できる…そんなトコです」

「では、自らの命を削って戦っている、ということか？」

「噛み砕いて解釈すると、そんなところですよ」

そこで織斑先生も黙ってしまう。生徒が命を削って戦ってるのを黙って見てるしかなかったなんて。でも、俺だって後悔してる。だって……織斑（アンタ）先生にそんな顔させちまってんだから。

「浦原博士が…開発したのか？」

「はい」

あの人にかかれば、たった数日でＩＳのフレームからＯＳまで完成しちまう。一応あの人の直属の部下ってことで専用機を使ってるけど、これが知れたからには普通には扱えないな。

「色々聞きたいがそれは私情だ。聞かずにおこう。ただ……一つ

だけ聞かせろ」

「何スか？」

「お前は、そのＩＳを使って……この学園で、何をするつもりだ？」

「俺は……皆が笑顔でＩＳ（ココ）学園を過ごせるようにしたいし、俺に関わった皆を、『護る』」

俺は誓ったんだ。自分に…セシリアに。

簡単に聞こえるけど、やるからにはキツいのも覚悟してる。卒業になれば俺はＩＳを国に返還するし、一人の人間に逆戻り。けど、護ってよかったって思える奴等と、ココで過ごしていきたい。

「その眼……そういう頑固さは、アイツに似ているな」

「いや、それは違うよ。先生」

違うのに驚いているのか、目を見開いている先生。だって、俺は誓ったものがあるんだから。

「俺は……頑固じゃないさ。俺は誓ったんだ」

「誓う？」

「ああ、護ることを、セシリアに、一夏に……そして…自分自身の……

……『魂』にだ」

翌朝、ＳＨＲ前に織斑先生から専用機を返された。預かる話はナシとの事らしい。まあ、あれだけの啖呵切ったんだ、元々剣術をやっていた織斑先生にも共感出来たんだろう。それでの返却なんだと思う。

「ただし、危ないと判断した場合は止めに入るぞ」

なんて、釘を刺されたけど…構うもんか。今更引き返すかよ。
以前思ったことを変える気はない。
俺は……俺の周りの常識を、打ち破ってやる！！！

それから五日後。

『学年別個人トーナメント』が三日後に近づいている日。個人からタッグに変更になったのを織斑先生から伝えられた俺は喫煙所にいる。勿論タバコなんて持ってないから密かに先生から一本頂戴してきたのだ。
半分まで吸いきってここ数日の間を思い出した。
何日か前、なんか女子達がヒソヒソ話をしていたけど…何なんだろう？噂話なんだけど、妙にはりきっていたのを思い出す。ホント、どの世代の女子もよく解らない。セシリアに聞いてもそれは興味ないとだけ言って話は終わった。
そして、一夏とデュノアだ。あいつ等何かあったのかな？ちょっと仲良くなったって雰囲気じゃないようだ。壁一つ隔ててたのが無くなったみたいな……。
なんて考えているとき、妙な地響きが聞こえる。方向からするとアリーナ、か。そこで俺の思考は切り替わった。

トーナメント三日前　＋　こんな時期に実戦訓練なんてするやつなんていない　＝　絶対に何かあった。

そういえば、セシリアが秘密の特訓をするなんて言ってたけど、まさか何かやらかしたんだろうか。

第三アリーナ

「ふん、やはりこの程度か」

アリーナに来てみれば、それは一方的な『殲滅』だろう。黒いＩＳ、ラウラ・ボーデヴィッヒが二人の代表候補生、つまりセシリアと鈴音の首を締め上げていた。黒いワイヤーがミシミシと二人の首に食い込んでいく。

「デュノア」

「あ……黒崎くん。アレ、何とかしないと」

俺の隣にいる一夏も我慢できない表情をして、今にも飛び出しそうだったが片手で制する。

「い、一誠……」

「俺が行く」

「でも、あのＩＳ……ドイツの第三世代機だよ？あの武装じゃ勝てっこないよ」

後ろにいた女子からそんな言葉が聞こえるが…

「知るか、そんなもん」

「っ！！？」

「相手が強かろうが何だろうが…戦うなら、『勝つ』だけだ」

そういって、瞬間展開。俺のＩＳを見たデュノアから感嘆にも近い声が聞こえるが、あえて聞かない。今は目の前のことにしか集中できそうにない。

「行って来る」

「ああ、頼む」

一夏からそんな言葉を聞くとは…

「その言葉、次は俺から言わせるように努力するんだな」

そこで刀を横薙ぎに一振りする。たったそれだけで、フィールドが破壊される。こんなに簡単に壊せたっけ？

まぁ、いっか。

慌てる仕草もなくアリーナに降りると、丁度背中を向けていたボーデヴィッヒはこちらに気付く。

「ふん、それが貴様のＩＳか……なんと脆弱な」

見下されるのはこれで二回目か。何か一回目がとても懐かしく思える。

「それ……お前がやったのか？」

俺の視線の先には、ワイヤーに吊るされる形で首を絞められている二人だ。

「見て解らんか？私の実力を知らんが故にこの無様な姿になったのだ。自業自得というヤツだ」

「言ったろ？お前は『まだ』弱い、って」

「…っ！まだ言うか。私の実力にひれ伏すがいい！！」

その言葉を聞き終わる前に、その場に刀を突き立て、同時に…消えた。

否。消えてはいない。高速でボーデヴィッヒの背後に回りこむ。ハイパーセンサーで感知して、追いかけたところで俺はもういない。

既に先程の場所に戻っている。肩と脇には鈴音とセシリアを抱えていたのだ。

「何だと？あの一瞬でその二人を助けたというのか」

ありえない、という顔をしているが俺はもう見ていない。静かに下ろすと、二人が痛みに耐え、笑顔で応えてきた。

「く、黒…崎」

「無様な姿を…見せて、しまいましたわ…ね」

「二人とも、ここを出てろ。すぐに片付けてくるから」

ボーデヴィッヒに背を向けたまま、突き立てた刀を抜く。それでも動かない。自分の中に語りかけるようにその場を動かない。

「どうした…来ないのか？やはりお前はスピードだけの腰抜けのようだな！」

その言葉と同時にロックオンされるが、それより早くに、構える。

まるで抜刀の構えのように。

『お前は、そのＩＳを使って……この学園で、何をするつもりだ？』

織斑先生の言葉を急に思い出す。何をするのか…それはアイツに問いかけるべき言葉かもしれない。

ただ……俺は許せない。たとえいがみ合っていても、どんなことがあっても…俺の大切な人に手を出すのが…許せない。

お前のプライドを粉々に砕いてやる。

俺のＩＳの真の名前をもって…

（退けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ。後ろは振り向かず、ただ前だけを進め！！）

『行くぜ』

（我が名を叫べ！！！我が名は……）

「『斬月』！！！」

第23話　truth［and　fight］（後書き）

仕事疲れなのに、はっちゃけすぎたかな？

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第２４話　ｔｒｕｔｈ　２（前書き）

いつかは老いる。

人も、心も。

だた、魂は老いることはない。

たとえ、その魂に『獣』が巣食っていたとしても…

第２４話　ｔｒｕｔｈ　２

某施設・研究棟内

『ピーーーーーーーーーーー……』

けたたましく鳴り続けるＰＣの警告音に近付いていく男。白衣ではなく、半纏を羽織った浦原だ。その画面を見ると、ＩＳの基本スペックを表示したまま、赤く点滅し続けている。

「……っ！これは！？」

その表示は専用機と一誠のリンク表示と同調率を表示したままになっている。しかも、同調率に至っては数字が凄まじいスピードで表示が変わり続けている。数字が一定していないのだ。

「マズい…このままでは……」

最悪の事態を想定した浦原はすぐさま部屋を出、手持ちの通信機であるところに連絡を入れる。

「アタシです…火契部隊をすぐに召集して下さい。ええ…行き先は、『ＩＳ学園』です」

それだけで通信を終えると、早足になる気持ちを抑えずに焦りを見せる。

（アタシが行くまで……間に合ってくださいよ）

外に出ると、すでに集められている女性達十人が整列している。
それぞれ女性達には鋼鉄の鎧を纏っている。ＩＳとは違い、両肩に形違いの肩当をしている。

「揃ってますね…では、これより封印作業へ向かいます！構築プログラムの再設定を、各自移動中に済ませてください」

帽子で隠れている目はいつもより鋭く、表情も険しくなっている。
これから起こることを想定しての険しさにも見える。手元には同調率を表示するためのコンソールを持っている。

（やはり同調率が安定してない……かなりマズいことになってますね…黒崎サン、アナタは飲まれないで下さいよ…）

ＩＳ学園・第三アリーナ

「何だ……『斬月』だと…それが奴の…」

煙はまだ晴れない。発動からずっと渦を巻くように一誠を護り続けている。だが……その渦の中では、

「くっ！！！……粒子変換が安定しない…どういうことだよ、コレ！？」

いつまでも、刀と粒子変換をせわしなく繰り返し続けている。この時点で、このＩＳの欠点をまだ解っていなかった。

それは、第一次形態移行（ファースト・シフト）等の形態移行の概念。

ＩＳは操縦者の特性に合わせて、ＩＳ自体が成長－つまり形状の変化を含め－していく機械なのだ。ただ、一誠のＩＳはほぼ初期設定に近い性能だけで戦っている。最適化（フィッティング）と初期化（フォーマット）は終わっているものの、名前自体を設定していないので形態移行は存在しないのだ。だが、今一誠はその名前を呼んだ。それだけではこの異常事態は起きない。粒子化と形状固定を繰り返しているのはつまり、

「俺との、相性の、問題、か…ぐっ！！」

ただただ疑問だが、形態移行自体が出来ないのがこのＩＳの特徴だとするなら、その行為が間違いだとするなら、何らかのエラーによって再起動すらうけつけないのかもしれない。

－－－再起動実行不可。エラーにより形態変更を強制終了。

「な…っ！？」

煙が晴れる。そこに現れたのは全く姿が変わっていない一誠。拍子抜けとばかりに肩を竦めるボーデヴィッヒだが、一点だけは安心できなかった。
煙が晴れても、刀は歪に明滅を繰り返しており、最早武器として扱うのは難しい状態だ。

「ハッ！あれだけデカい口を叩いておいてその様か。お前には失望したよ…黒崎一誠！」

瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使って、一誠に肉迫する。すでに形態維持を耐える為に体力を極端に消耗してしまっている。片膝を付いた状態から一歩も動けない。構えようにも既に武器がこの有様だ。戦おうにも無理だ。手刀を振り下ろしてくるか、一誠のＩＳは少し動作できる程度で何も反応しない。

「Ｓ．Ｅが、作動しない！？」

振り下ろした後からは、血を噴出す。絶対防御すら作動しない状態

のままではそれは当たり前だ。

「ハッ！！」

「ぐぁっ！」

ボーデヴィッヒは格闘だけで戦おうとしているようだが、避けるのが精一杯だ。が、いつまでもやられる訳にはいかない。

「くそっ！！！」

拳を避けられながらも応戦しているが、Ｓ．Ｅすら無いのではただの空振りに終わる。

「そんなものが！」

避けた動作のまま腹に蹴りを喰らわせる。衝撃を緩和出来ない状態では肋骨など簡単に折れる。折れるとは言葉違いで砕ける音がした。

「がぁっ！」

なんとか踏ん張るが、耐え切れないように口から血が滴る。倒れずとも衝撃はまだ体に残っている。

これで終わりとばかりにレールガンを構える。既にロックオンされていても、動けない。すでに動く力も残されてはいない。ただ立ち尽くすだけ。

「これで…終わりだ！！！！」

レールガンから放たれた砲弾は無情にも…

一誠の胸部を、直撃した。

誰もが目を疑った。アリーナにいる鈴音もセシリアも現実を受け入れられなかった。

「い…一誠さん！！！！」

展開を解除して一誠に駆け寄るセシリア。そこには胸部から夥しい量の血が流れ出ている。すでにセシリアの足元にまで及んでいる。

「……」

この出血で生きているはずもない。その事実だけがセシリアに叩き付けられる。

力なく膝から崩れ落ちる。

「そんな…こんなことって…」

観客席から見守っていたデュノアも人の『死』を実感できていない。たった数時間の交流しかしていないが、友達になりたい、とも思っていた。けど、これが…こんなことが…

一夏も青ざめていて声も出せない。一夏だけじゃない。他の皆も一様に何も言えない。

「はっ……コイツも、織斑一夏と同じだな。言葉だけのしょうのない愚図だ」

ボーデヴィッヒが再びレールガンを構える。事切れている一誠に狙いを定めるが、それを阻んだのはセシリアだ。

「邪魔だ。どけ」

「いやです。命に手をかけた方の言う事を聞く必要はどこにもありませんわ」

「そうか…ならば」

ロックオンを修正してセシリアに変更すると同時にレールガンが火を吹く。

「貴様もだ！！」

『何だ……何で動けない？それに、寒い』

何でだ。戦ってたのは覚えてる。いや、あれは戦いじゃない。一方的な喧嘩に近い。あれだけの破壊力だ。動けなくなるのは当然、か。

『…？誰か、泣いてるのか？』

この声は、誰だ？
誰が泣いてる？

だったら、助けなきゃ。
体が動かなくてもいい、この先、俺が俺でなくなってもいい。だけど、俺は決めたんだ。何があっても護る、って。

『護る。護るんだ』

待ってろ。今すぐ……

『オレガ……タスケル』

着弾。
流石に近距離では威力が強すぎたようだ。これでは確認できない。用心しなくては、近づいた瞬間に攻撃される。
その警戒心だけで、ボーデヴィッヒは動かない。ただ、勝利は確信できる。
それでは飽き足らず、黒崎(ヤツ)一誠を完膚なきまでに倒したのだ。その自信だけで充分。

やがて、ボーデヴィッヒはある違和感を感じた。未だに晴れない土煙の中に得体の知れない圧迫感を感じたのだ。二人共動けるとは思えない。誰かが加勢に来たのか。だがＩＳの反応はみられない。では、何故？

そんな彼女の視界の隅に、黒い何かが流れる。
流れてきているのはあの二人がいた場所。

「馬鹿な…二人共動けるはずが…」

そして煙が晴れた先には、気を失っているセシリアを抱えている一誠だ。その姿だけでも驚愕するが、彼から黒い力場(フィールド)が放たれている。

『オオオオオオオォォォォォォォ…』

彼の叫びか、獣のような咆哮を上げ、力を暴走させている。意図的ではなく、行き場を失った力が溢れ出ているようだった。

「う、動けるはずが無い……そんなことがあるかぁ！！」

その証拠に彼の胸からは血痕がある。あの量では助かってはいない。では、誰だ？

私の目の前にいる、この男は誰だ？

『オオオオオオオオオオォォォォォ…』

そして、彼は異形へと姿を変える。

彼に穿たれた弾痕はより一層広がり、そこから炎が走るように模様が浮かび、さらに首元、手首、足首に鬣が現れる。そして、彼の顔はすでに見えない。

髑髏に前方に伸びた角がついた仮面をつけ、更に髪が腰まで伸びている。そして肌は真っ白に染まる。

もう人ではない。

これは、すでにＩＳの領域を超えた…獣だった。

『オオオアアア

先程より高くなった叫び声にアリーナ全体が揺れる。いや、揺れている。
獣の咆哮は、空しく響き渡る。

「馬鹿な…こんなものが…ＩＳなはずがない」
緊急事態で管制室に呼び出された千冬が苦虫を噛んだような表情になる。モニターにはセシリアを抱えたまま叫び続ける仮面をつけた獣だ。この惨状に、真耶は手を口に当てたまま凍りついている。
そこに駆け込んできたのは、浦原だ。
「貴様！！何の用だ！？関係者以外は…」
「お叱りは後で受けましょう……状況は？」
モニターを見た瞬間、浦原は全てを悟った。あの獣は一誠で、すでに手遅れだという事を。
「成程、相当危険な状態ですね…やはり、彼に渡したのは…」
「…？どういう事だ？」

「説明しましょう……元々あのコアはアタシが数年前に亡国機業（ファントム・タスク）から奪い返したコアなンスよ」

「何だと！？」

「奴等の拠点から幾つか無傷のコアはありましたが、持ってこれたのは一つだけでした。それを厳重封印した上で保管していましたが、黒崎サンがココに来ることが解った時は正直焦りました。使えるコアは『群狼（ロス・ロボス）』のコアだけでしたし、今更切り替えるわけには行かなかった。そこで、苦渋の決断でそのコアを使用したんです。ですが、ああまで変貌するとは…正直予想外です」

「アレのコアは…危険なモノだった、と言う訳か」

「今更後悔しても遅いですネ。では、これで」

「何処へ行く？」

踵を返して出て行こうとする浦原を千冬が止める。勝手に帰り支度を始めて帰るところのようだ。

「何処って…アソコに決まってるじゃないデスか」

その浦原の視線の先には暴れ回る獣の姿だ。

「貴様に何が出来ると…」

その言葉が続かない。彼の杖から真剣が見えるからだ。あの杖は仕込み刀として護身用に持っていたものだ。鞘の部分を捨てると扉に

向かって進んでいく。

「出来ることはありますよ」

「なっ！？」

「そう何年も対抗策を講じないまま、封印していたわけじゃありませんからネ…やれる事はやってきます」

扉を開けた先には、数人の女性が壁際に整列していた。まるで主を待っていた番犬のように。

「アタシの尻拭いは…ココからです」

『キオアアアアアアアアアアアアアア……』

叫びながら刀を振り下ろす。

岩盤のように砕けると同時にボーデヴィッヒが空中に放り出される。

「くっ……何なんだ？あの姿は……ＩＳではない。まるで……『化物（モンスター）』」

そこから先の言葉を発する前に、追いかけるように角を掲げる。角の間に光が溜まっていく。
長い、長い。
その異様な長さに、ボーデヴィッヒは悟った。一撃で消し去るつもりだと。

「…っ！間に合え！！」

赤い閃光が走る。
が、すでにボーデヴィッヒはおらず、遮断シールドを紙のように貫く。
地上に降りていた彼女は無謀にも手刀で切り込んでいく。
しかし、それでも獣は怯むことなく、角を掲げる。その瞬間、ボーデヴィッヒに油断が生まれた。

（何だと…地上に、しかもこんな近距離で放つつもりか！！？抱えているソイツはどうするつもりだ？）

獣との距離は５ｍ弱。そんな距離ではボーデヴィッヒはおろかセシリアまでにも被害が出るだろう。そして彼女はそこで気付いてしまった。
踏み込む位置を、見誤ったのだ。
一瞬の油断が、この距離の違いを生んでしまった。その一歩を間違えた瞬間、ラウラ・ボーデヴィッヒは赤い閃光に飲まれてしまった。
Ｓ．Ｅも、絶対防御すらも撃ち抜き、壁に叩きつけられたボーデヴィッヒはすでに虫の息だ。そんな中、動く者がいた。

セシリアである。

今まで抱えられていた彼女がやっと目を覚ましたのだ。目を開いたセシリアが最初に見たのは…仮面をつけた獣だった。
大きく抵抗した彼女はその場に落とされるが、獣の手に握られている刀を見てすぐに気付いた。

「まさか……一誠、さん？」

その異形の姿にセシリアすらも固まってしまうが、その異形の口からは、惨状とは全く違う言葉が聞こえてくる。

「…ケ……オレガ…ケル……オレガ…タスケル」

何故？という疑問がセシリアの頭の中を駆け巡るが、彼との交流が一番深かった彼女だからこそ解る言葉だった。

「もういいです！！！ワタクシは大丈夫ですから……だから、もうお止めになってください！！」

足に縋り付くように止めるが、獣はそれでも歩を進める。まるで、止めを刺すかのように。

「待ってください！！お止めください！！」

その言葉も空しく、獣の角に赤い光が溜まっていく。そのさきには…ボーデヴィッヒ。

「止めてください……止めてェ！！！！」

「離れてください！」

その言葉と同時にセシリアは振り向くが、飛んできたのは楔が付いた鎖だ。
それが獣の腕に巻きつき、肩甲骨のあたりに刺さる。
鎖の先には、浦原がいた。鎖は彼の半纏の袖から出てきている。

『キアアアアアアアアアアアアアアアア…！』

角に溜まっている光をそのまま浦原に向けるが、それと同時に鎖を叩きつけるように下に払うと、もう一本の楔が地面に突き刺さる。
と同時に。

「火契部隊、前へ！」

獣の周囲に肩当を装備した女性が九人、円を描くように配置される。
部隊の一人がセシリアを避難させたあと、同じような楔が獣に突き刺さる。

『アアアアアアアアアアアアアアアア…』

肩に、脇腹に、足に。
九本の楔が穿たれたあと、それぞれがＵＳＢメモリを上腕のスロットに差し込む。

―――メモリ認証完了。プログラム構築開始。

「擬似コアバイパス、エネルギー流出の許可を……構築、開始」

「了解…構築、開始します」

それと同時に楔目掛けてエネルギーが流れ込んでいく。楔に辿りつくと、そこからどんどん結晶化していく。

『ギャアアアアアァァァァ……ギッ！！』

自分の中に異物が侵入してきたのを拒絶するように叫びを上げるが、叫びと同時に眉間に刀が突き刺さる。

「黒崎サン……こんな姿にしてしまったのは、本当に申し訳ないッス。けど、こうなったアナタを止めるには…こうする以外方法は無いンスよ」

浦原が刀を勢い良く引き抜くと、仮面が割れる。そこから見えたのは、生気を失った一誠の顔だ。すでに結晶化は、首から下を全て覆い尽くしている。パキパキと徐々に進む中、仮面は割れた箇所から亀裂が走っていく。

「出来れば、次に目を覚ましたときには……アタシを恨んでくれて構いません」

その言葉を最後に、結晶は一誠の体全てを包んだ。そんな時、不意にセシリアにプライベート・チャンネルが接続される。接続先は、黒崎一誠。

『セシリア……ありがとう』

それと同時に切断され、セシリアの絶叫がアリーナに木霊する。悲痛な叫びの中、一誠の表情は……それと違って安らかだった。

皆の心に、雨が降り始める。

第２４話　ｔｒｕｔｈ　２（後書き）

今回はちょっと長めに作ってみました。

構想に時間が…入力にも時間が…疲れた。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第25話　truth　3（前書き）

愛とは、無償のもの。

悲しみとは、苦しいもの。

では、怒りは……？

怒りは、心の中に燃やすもの。

第25話　truth　3

ＩＳ学園内・医務室

どうして、こうなった……何で一誠なんだ？

俺（一夏）は考えを巡らす。いつも気兼ねなく相談してたアイツが…何であんな姿に…？

頭の中はどうしてで一杯なのに、考えがまとまらない。すでに堂々巡りだ。医務室にいるのは俺、箒、鈴、セシリア、シャル、そしてカーテンの向こうにラウラが眠っている。軽傷で済んだようで、ダメージレベルも問題ないとの事で次のトーナメントには出場できるらしい。ただ、セシリアと鈴のＩＳはＣレベルに達していて、トーナメントには出られないそうだ。本人達も酷い傷を負っているけど、心の傷だけは塞ぐことは出来ない。

そして、皆無言のまま時間だけが過ぎていく。気の利いた言葉なんか出てこない。そんな時、医務室の扉が開く。

半纏を羽織って作務衣を来た人だ。一誠を……アイツを変な結晶で閉じ込めた張本人。

「皆さんお揃いのようですね……お二方、怪我の具合はどうですか？」

なんて事言っても、返事なんて返せるかよ。何をしたのか解ってるのか、この人。

「……相当嫌われてますね」

そりゃそうだ。箒やシャルだって凄く怒った顔してるし、鈴は明後日向いたまま剥れているけど、セシリアはずっと俯いてる。恋人同士になったばかりでこんなことになってるんだもんな。男の人が手近な椅子に腰掛けると口を開いた。

「まずは、皆さんに言っておくことがあります…」

そう言うと、折角腰掛けたのに椅子のそばで正座する。

「本当に、すみませんでした」

帽子を取って頭を下げると、セシリア以外は驚いた顔をしている。何か言い訳でもあるのかと思ったけど、まさか一番に謝ってくるとは思ってなかった。俺だってそれには驚いた。

「アナタ方の友達をあんな風にしてしまったのは、全て……僕の責任です」

一段と頭を下げると、箒が困ったように頭を上げるように言う。

「やめてくれ…そうして欲しい訳じゃないのに、何故……？」

「彼がこの学園に来たのも、彼がＩＳを動かせるのも、あの機体を与えたのも…全て、僕の身勝手が引き起こしたンです」

「あ、頭を上げてくれ……」

その言葉で頭を上げると、椅子に座りなおして帽子をかぶる。何だか無精ヒゲがとても良く似合ってるような顔立ちだったけど……

「教えてくれ。一誠は……俺達の友達はどうなったんだ？」

皆が聞きたかった事を俺が代わりに代弁する。確かに自分の事はあんまり話さない奴だけど、それでも、俺の…俺達の友達なんだ。

「それを話すには、アナタ方にも相応の覚悟があるンスね？」

「え…？」

「黒崎サンの事に関しては、現状を含めると、ただの思い出話ではないんですよ…とても重たい真実です。それでも…聞く覚悟はありますか？」

そこでまた皆が無言に戻る。そんなにキツいのか……でも、

「ああ、アイツが俺達に正面から向き合ってくれたんだ。だから…今度は俺達の番だ」

俺の一言で皆が覚悟を決めたようだ。男性も皆を見渡した後、帽子を直す仕草をした。

「解りました……では話しましょう。黒崎サンの、真実を」

同学園内・第三アリーナ

アリーナ内に残された水色の結晶の周りには九人の女性が未だ取り囲んでいる。その外には千冬と真耶がいる。
真耶が手元のコンソールを操作すると、一誠のバイタルデータが表示されている。彼の入学時と現在を比較し続けているのだ。

「！！……先生、やはり…彼は……」

「そうか。そういうことか…」

学園内・医務室

静かだ。やはりこの人も話しづらいのだろうか、ずっと黙ったままだ。話すことを順序立ててるのか思ったら不意に口を開く。

「今から話すのは過去のことですが、機密事項に順ずる場合があります。この事は他言無用になりますので、ご容赦下さいね」

そう言うと、手元のキーボードを操作して、あるデータが表示される。これって、一誠の……アレ？

「何か、コレっておかしくないか？」

「良く気付きましたね、織斑クン。そうです、誕生年を見れば解りますが、彼は戸籍上では君達と同い年なんです」

嘘だろ？だって、自分で二十歳って言ってたのに……

「どういうことだ？ヤツの言ってた事と矛盾してるぞ？」

「落ち着いてください。これは間違いでも無ければ、彼が提出したモノでもないんです。これが、真実です」

「なら…黒崎って、元々は十五、六って事？」

「そうです。彼がこうなったのは…過去にあったある計画の所為でもあるんです」

「計画、って……？」

「ＩＳのコアに対する実験…ＩＳのコアを効率よく解析する為の計画です。彼は君達と同じように産まれてきた訳じゃない…人工的に産み出された『強化人間（ブーステッドマン）』なんです」

外では雨が降り始める。まるでこの真実で涙を流しているかのようだった。

――今から五年前、ＩＳのコアを解析しようと躍起になっていた『ある組織』では、そのコアという、ブラックボックスを自分達の都合のいいようにプログラミングしようとしていました。しかし解析は難航し、遂には分解・破壊しようとしたとき、ある人がこう発言しました。「このコアは、操縦者の特性を理解し、その特性に合わせて成長するものだ」と。それを聞いたある科学者はある結論に至りました。

そのコアがそのようなシステムならば…人間に組み込んではどうだろうか？

その科学者は遂にタブーに走ったんです。在り得るはずの無い機械と人間の融合。それを実現しようと何人もの少年少女を被験体にして実験を繰り返しましたが、全て失敗に終わりました。焦った科学者は人工的に適合者を作り出し、実験しました。そして二年後、ある被験体がコアと適合したんです。それが……

「黒崎一誠……当時の被験体Ｎｏ－１００５０１……当時十歳」

「一誠が…成功例…」

「でも待って。それじゃあ年齢と全く矛盾してない？」

「たしかにそうです。ですが、ＩＳのコアにはユーザーとなった人間を治癒する能力があるんです。けどその機能が発揮されるのは第二次形態移行（セカンド・シフト）からです」

実験を繰り返された成功体は、外付けの適合機によって様々な状況下での実戦訓練を行っていきました。そして幾度と無く瀕死に追い込まれましたが、その回復機能を強制的に使用し続けた結果、細胞自体が急激な促進によって体を成長させていたんです。その成長の結果、十歳だった彼は、身体的には十五歳。身体能力は上昇し、自らの力でコアを制御出来るようになりました。

そして彼が十一歳の誕生日を迎えた日、ある事件が起きました。それは、その組織がある国でクーデターが起きたんです。その国の政権をひっくり返すほどのね。クーデターに巻き込まれる形で組織は解体され、成功体としての彼は一人の科学者によって引き取られました。その人は黒崎純一。彼の義理の父親にして、コアの適合計画に最初から反対し続けていた人です。

篠ノ之束を探していた僕はその人と偶然にも出会い、仲良くなりました。悲惨な彼にはこの先幸福な人生を送って欲しい。そういう気持ちもあって、僕は黒崎サンのお父さんに協力して、彼に偽りの記憶を刷り込みました。母親は死んだことにして……。

そして、彼に名前を付けました。『一誠』……一人の人間として、一つのことに誠実に生きて欲しい、という願いを込めて……。

雨が降る。話し始めてから一向に止む気配が無い。
帽子の人も話し始めてから、ずっと俯いたままだ。こんな重たい話なんか好き好んでする人なんていないだろ。

「彼のお父さんも、病に倒れ…それ以降は彼との接触は避けてきました。組織解体のどさくさに無傷のコアを奪い返して保管していましたが、黒崎サンがココに入学する事を知ったとき、僕は正直焦りました。バレてしまったら……どんな思いで黒崎サンを救ったのか解らなくなる。そこで、僕は彼の専用機を作ったんです。ですが、不運にもそのコアこそ、黒崎サンの適合実験に使われていたコアだったんです。危険を承知でそれを使って組み上げましたが…結果は皆さんもご存知のとおりです」

「じゃあ、あの姿は……」

「そうです。コアとの同調率が極限にまで上がる、もしくはユーザー自身が致命的な『損傷』を受けた場合にあの姿になります。あの胸の孔には、適合するはずだったコアが収まるはずでしたが…今回はどちらもほぼ同時に発生した為、胸に孔が開いたままになりました。あの姿は個々によって形状が変化するようですが…その根源は自らの『エゴ』だと、考えています」

「エゴ…？」

「そうです。何かを護りたい…どんな時でも絶対に助ける……その為には力が欲しい。そんなエゴによって生み出されたんでしょう」

エゴ…その言葉でセシリアはビクッと跳ね上がる。俺にだって思い当たることがある。ソレを教えようとしていた一誠はいつもより強い目をしていたのを。

「さて…ここからが本題です。現在、彼はS．E固定型の停止結界に封印しています」

停止結界……確かソレって…

「それってラウラも使ってなかった？アレと同じなの？」

「いえ、彼女の場合はA．I．Cを反転させて発動していますが、アタシが開発したのはコアバイパスを開放して、対象に侵入させることで停止結界として機能させるモノです。あの擬似コアバイパスには『群狼（ロス・ロボス）』のコアバイパスを細分化して発動を可能にしました。細分化といっても複製とは違って、S．Eの劣化は無いので、一人あたりが丸々一機分のS．Eを扱ったことになります」

てことはつまり、十機分のS．Eで封印してるってことか…でも、

「それって…封印を解除することが出来るのか？」

「いえ、出来ません」

即答デスネ……でも、どうすりゃ目を覚ますんだ？

「『封印』は『拘束』と違って、対象を完全停止させることです。

今の彼はS・Eだけで身体機能を維持している、所謂『仮死状態』に近いです」

「仮死状態……」

セシリアの呟きにも似た鸚鵡返しが聞こえる。死んでいないことには安心したけど、それって危なくないか？

「更に言うと、この停止結界自体がまだ未完成なので、S・Eを定期的に流入しないと結界を維持できません。簡単に言えば人工透析と同じ原理です。これを胸の孔が塞がるまで続けますが、完全に塞がるのは二日……それ以降に目を覚ますでしょう。ですが、目を覚ますのに許された猶予は…二十四時間です。それ以降に目を覚ますには強制的に結界を解除しなくてはいけません。それはつまり…黒崎サンの『死』に繋がります」

それは完全な死刑宣告だ。かといってそれを黙って見ていることは…俺達には出来ない。箒、シャルと目を合わせると、今度は俺達から切り出す。

「俺達に、出来ることは無いんですか？」

これは俺達にしかできないかも、俺達には出来ないかもしれない。でも、願うだけじゃ駄目なんだ。やらなきゃ…友達（ダチ）じゃない。だろ、一誠？

「あります……正確には『アナタ達』ではなく、『貴女』にしか出来ないかもしれない」

帽子の人の視線は俺達全員ではなく……セシリアを見ていた。

「わ、ワタクシ……ですか？」

「そうです。停止結界が完成する直前、貴女は黒崎サンからの回線を繋いだはずです」

「はい…確かに。プライベート・チャンネルは繋がりましたが…」

「これはアタシの推測ですが、その回線が切断されたのは停止結界が完成したからだと思います。裏を返すと、彼自身の回線自体はまだ生きてるはずです」

「つまり、接触は出来なくても…会話は可能、ってことですか？」

「その通りです。流石デュノア社社長のご子息、大正解ッス」

扇子を広げて扇ぐ。何だろ、とても似合わない。

「一時間でも構いません。彼と会話すれば、彼の意識を引き戻すことができるでしょう」

「それって、俺達じゃ出来ないんですか？」

「はっきり言えば、頭の弱い織斑クンと堅物の篠ノ之サンじゃ役不足もいいトコッスよ」

何だろ…今のでカチンときた。箒も一緒のようだ。じゃあ、やろうか？

立ち上がった俺達二人は箒が首を絞め、俺が脇腹に拳を連打で叩き

込む。ソレを見たシャルが必死に止めに入る構図が出来上がった。

「何だと、変態科学者！堅物とは誰の事だ、言ってみろ！！」

「いっぺん殴られないとわかんねえみたいだな、コノヤロウ！！！」

「や、やめなよ二人共。ここ医務室…」

「い、痛……そして締まる…極まってます、極まってますよ篠ノ之サン……」

そんな時、不意に笑い声が聞こえる。その主はセシリアだ。やっと笑ってくれた……鈴は何だろうって顔してるけど、セシリアらしい笑顔がやっと戻った。

「わかりましたわ、今度は……ワタクシが、一誠さんを助けます…必ず」

その笑顔と同時に皆が笑い合う。帽子の人も『結局こうなるのか』みたいにほくそ笑んでるけど、これが俺達だ。待ってろよ、一誠。今度は俺達の番だ。

雨は……止んだ気がした。

第25話　truth　3（後書き）

解説も含めて、時間かけてみました。

って言っても、プロット自体は一日で出来たんですけどね。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第２６話　ｔｒｕｔｈ　４（前書き）

眠りから目を覚ますとき、
まず最初にすることは……

朝食の用意と、
隣にいる君に声をかけること。

それが日常。

第26話　truth　4

あれから三日…

封鎖されている第三アリーナに、俺は立っている。目の前には一誠が眠っていて、結晶がゆっくりと明滅する。まるで呼吸しているように。

トーナメントは予定通り開催され、今日が一回戦。初戦は俺とシャルのペア対ラウラと箒のペア。初戦で遅刻は流石にヤバいけど、何だかコイツの顔でも見ておこうと思って来た。胸の孔は塞がったけど、一向に目覚めない。

「セシリアとの会話……全然しなかったのに、気分良く寝てるなよな」

この三日間、セシリアが朝昼晩問わず話しかけていたのに、全く反応しない。さっきもすれ違ったけど浮かない顔をしていた。ったく、お前の恋人だろ…声かけないでどうするんだよ。

「目ぇ覚めたら一発殴ってやろうか……っと、そろそろ時間だ」

時計を見ると、すでに一回戦が始まる時刻が迫っていた。急がないと間に合わないかも。急いで向かおうとした時、振り返って怒ってみる。

「とっとと起きろよ、寝坊助！」

言ってやったと同時に、激しく光を放ち始める。何かと思ったその

時、結晶に亀裂が走り始める。嘘だろ…さっきまで何もなかったのに。

「これって…まさか……」

踵を返して、ある場所へと向かう。行き先はアリーナじゃなく、千冬姉のいるところ。そこならきっと……

アリーナ・管制室

赤いライトに照らされた室内に、セシリア、鈴音、千冬、浦原がいる。この四人の話題といえば、やはり一誠だろう。まったく変化のない状態に、鈴音も千冬も業を煮やしていたのだ。それと違い飄々としているのは浦原だけだ。

「いや～…予想以上の人数ですね。中には他国の企業まで顔を出してるンですから」

「彼らの目的は三年生の技量だろう…進路には充分に響くのだしな」

観戦席には、スーツを着た中年男性がチラホラと居る。このトーナメントでの実力如何では、進路は決まったも同然なのだし、一年生、二年生としては実力アップと教師陣への評価に繋がる。一週間かけて行われるこの行事には全学年生徒は浮き足立っているだろう。

「それにしても、黒崎のヤツ……一体いつ起きるのよ？早くしないと日が暮れるわよ？」

「まあまあ…確かにこの三日間は、何の変化もありませんでしたし…後八時間あるんで、それまでには手は考えておきますよ…」

それと同時に管制室の扉が開く。入ってきたのは一夏だ。アリーナから走り通しだったのか、辿り着いた彼は肩で息をしている。落ち着く暇もなく、千冬が怒鳴る。

「織斑！！貴様、初戦から遅刻とは…いい度胸だな」

「千冬姉…ソレ、後に…して。浦原さん！一誠が……」

その言葉で全員が息を呑む。一誠の名前が出た途端、一番焦っているのはセシリアだ。

「一誠さんに…何が？」

「疑問は後です。アタシは彼の所に……セシリアさん、貴女も一緒に来て下さい。織斑クン、君は早く試合の方へ」

「は、はい！」

「わかりました！」

足早に出て行く浦原とセシリアに付いて行くようにして一夏も会場へと向かう。そんな中、千冬だけが表情を変えず、静観するようにモニターを見つめる。

（黒崎……これで起きなかったお前は大馬鹿者だ…起きてきたなら、補習も兼ねてお説教でもしてやるか…）

同アリーナ・カタパルト

すでに調整を済ませたシャルが遅く来た一夏を責めようとするが、一誠の状態を伝えると表情を一変させる。

「えっ……こっちに来ても良かったの？」

「いいんだ。俺なんて居るだけ邪魔になるだけだし……起きてきたらアイツに怒鳴られちまう」

その表情には曇りはなかった。ただ、目の前の事に集中している男の目だ。

「こうしなきゃ…俺らしくないしな」

右腕のガントレッドが淡い光を放つと、一秒も掛からず『白式』を展開する。それを見たシャルは驚きの表情。訓練中は時間の掛かる一と言っても、二、三秒ほどかかっているが一展開を即座にやって

のけたのだ。

「うん…それじゃあ、行こう！」

「ああ！！」

（俺らしく…俺であるために。一誠、お前に教わったこと…全部ぶつけてくるぜ！！）

そして、第三アリーナでは、

「停止結界、融解率三十一パーセント」

「循環も間に合わない！特定抑制剤（プリセット）を早く！」

「使えばユーザーが保たない！今は循環率を上げるんだ」

せわしなく部隊が動き回る。すでに結界が緩み始めてから十分が経とうとしている。結界が壊れ始めているのではなく、蝶が孵化するように徐々に解放しているのだ。

「これは…」

手元のコンソールを見ていた浦原がセシリアの疑念を解くようにそ

れを見せる。

「ど、どういうことですの？」

「今、彼を封印している結界はＳ．Ｅによって固定しています。ですが、彼のコアがそのＳ．Ｅを吸収しているんです。彼の意思なのか、コアの自立稼動なのかは判りませんが…」

「……ということは」

「ええ、彼は今……目覚めようとしています」

トーナメント会場

「はあああああぁぁ！！」

雪片を振りかぶり、上段から斬りかかる一夏だが、ボーデヴィッヒのは簡単に避けられる。そして、一定の間合いからレールガンを放つが一夏はそれを避ける。一見五分に見えるが、当たる確率としてはボーデヴィッヒがやはり上なのだ。

「ハッ！どうやら当てる気はないようだな…それでよくあの人の弟が務まるものだな」

最初から見下し続けているボーデヴィッヒだが、確実に距離を詰められている。今まで停止結界を一度も使わずに戦ってはいるが、踏み込みの段階ですでに近いところまで実力をつけている。

「だが…一つだけ教えろ」

「？」

「その踏み込みの早さ……お前は一体何を教わったのだ？」

「これは千冬姉から教わってない。アイツが…一誠が教えてくれたんだ」

「！！……ヤツが…」

＊＊＊＊＊＊＋＋＋＋＋＋－＊＊＊＊＊＊

ある日の剣道場、俺は一誠に『剣術』ってのを教わった。

「ってぇぇぇ……何だってそんなに踏み込めるんだよ？」

「ったく…馬鹿みてえに突っかかってきやがって…どっかの猪娘と同じだな」

「それって、アタシの事！！？」

「黙ってろ、それとセシリア。お前の説明に一夏がついてこれっ

かよ？」

「そ、それは……」

「あと篠ノ之……論外」

「な、何だと！！！」

やっぱり一誠も同じ気持ちか…俺、あれには一生ついてこれないかも。

「で、何で踏み込めるか…だっけか？」

「そうだよ。ほとんど零距離だろ？」

「それは…自分の『力』を自覚してるからだよ」

「自分の…力…？」

「そうだ。自分の、ってことは自分自身が元から持ってる力だ。ＩＳじゃあない」

そう言って竹刀を俺に放ると、話を続ける。

「いいか？お前は自分の力を全く理解してないまま、ＩＳを自分の力と勘違いしてるが、そうじゃない。ＩＳは一歩間違えれば人の命を奪いかねない危険なものだ」

確かにそうだ。今までＩＳ同士でしか戦ってないけど、生身の人間だったら本当に危険だ。俺だって人には向けたくない。けど……

「それと強さと、何の関係があるんだよ？」

「関係あるさ。強さってのはそれだけを使ってれば確かに『強い』。けど、それは『暴力』と同じだ。自分自身の『力』でその『強さ』を抑えてこそ強いんだ。それが出来ないってんなら……怖がれ」

「へっ？」

俺を含めて皆が「何で？」って顔をしてる。強さを聞いてるのに何で怖がるんだ？

「人の命を奪うほどの力を使うなら…自分にそれを抑える『力』がないなら…恐怖を持て。それだけで強さは変わる。これが自分なんだ、と…これが自分の『強さ』だ、と」

＊＊＊＊＊＊＋＋＋＋＋＋＊＊＊＊＊＊

『ただ半歩下がるだけでいい。それだけで自分が…どれだけ強くなれるかが解るだろ？』

（ああ。俺は剣道も駄目で…ＩＳを使っても駄目だけど……でも、それでも！！）

一歩、ただ一歩前へ出る。それだけなのにボーデヴィッヒは後ずさる。一歩行く毎に一歩下がる。見えない何かに気圧されているのだ。

「俺の『力』はそれだけじゃない！！！」

所変わって、第三アリーナ

……聞こえる…一夏か？

ったく、相変わらず耳に響くんだよ…あのバカ。

って…寝てる場合じゃないか。俺もそろそろ起きないとな。

体を起こそうとした時、目の前の何かが邪魔をする。黒い何かが俺の前で形になる。

『何処へ行く？お前はここで、ずっと俺と過ごすんだよ！！』

何寝ぼけたこと言ってやがる。お前は俺じゃねえ。

『お前こそ寝ぼけるなよ！俺はお前だ。ずっとそうやって生きてきたんだろ？』

今はそんなことどうでもいいんだよ！！俺には帰る場所があるんだ。邪魔するな！！

『て、てめえ！この光は……くぅあああああぁぁぁぁ…』

黒い影が消えると、今度は俺が光を発する。俺は…帰る。親父がくれた場所じゃなく、俺自身が決めた、帰るべき場所へ……。そうだろ？

…セシリア。

ガッシャアアァァン！！

結晶から硬質化しきれなかったＳ．Ｅが液体のように流れ出る。割れたのではなく、割った。中からは、右腕が伸びている。封印された状態のままだった右腕は外気に晒されると同時に変質していく。袖のように残っていた装甲が変換され、グローブに。亀裂から出てきた左腕が装甲ではなく、裾の広い袖に。更にＩＳスーツに重なるようにあった襟は装甲化し、細いベルトが肩に掛かる。上半身が出た頃には全く違う姿に変わっていた。

「おおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ……」

獣ではなく、人として今度は叫ぶ。結晶全てを破壊するように。

「黒崎、サン…」

浦原もそれ以上は言葉をなくし、セシリアは涙を流す。こうして、黒埼一誠は七十二時間ぶりに生還した。

何かの塊から降りる。まだ前のままの下半身の装甲はカーゴパンツにブーツへと変化をする。肩当も右肩だけになり、グローブと左腕の袖以外は素肌を晒す。髪は…まだ長いままだ。何だかうざったいな…後で切ってもらうか。

「一誠、さん……」

セシリアの声。ああ、何だか久しぶりだ。でも、泣きそうだな。表情を変えたいけど…変なノイズが耳の中で聞こえる。
の前に、浦原さんがこちらへ近づいてくる。

「よく戻ってきてくれました、黒崎サン」

「……浦原さん」

「先に聞いておきますが…その姿は？」

やっぱり気になってるようだ。俺だってこんな姿になるとは思わなかったけど。

「ああ、これが…俺の新しい専用機らしい……名前はもう決まってる。それを登録すれば完全に俺のだ」

最早ＩＳとはかけ離れた、服に近いＩＳ。だけど、これが俺の専用機だ。誰にも文句は言わせないし、言わせるつもりもない。

「敢えて聞きましょう。その機体の名は？」

「……『黒装刃（フェンリル）』」

ウインドウには名称登録完了の文字。やっと…俺のになった。俺だけの、世界に一つだけのＩＳ。

そんな感動を他所に、浦原さんが手元のコンソールを見て顔を顰める。

「こっちは大変なコトになってるようです。見てください」

二人でウインドウを見ると、ボーデヴィッヒのＩＳが形を変えている。変形、ではなく、変質。それで合ってるはずだ。

「何ですの？コレは」

「これは機密事項ですが、恐らくこの機体には『ＶＴ（ヴァルキリー・トレース）システム』が搭載されています」

「『ＶＴ…システム』……」

「更に言わせて頂くと、このシステムは開発・研究及びその使用が国際的に禁じられている代物です」

「そんな…」

セシリアの絶句も解らなくもない。俺の存在だって…アイツには近いし、やらされていることも一緒だ。

「勝手なことかもしれませんが……コレを止められるのは、黒崎サン、貴方しかいない」

ホント、勝手だよな…この人。確かに俺に期待したいのは解るけど、俺だって万能じゃない…ただの、一人の人間だ。親父との約束…忘れてたまっかよ。

「俺だけじゃねえよ」

「「え……？」」

「あそこには、あっちには……俺の背中を預けられる『相棒』がいる。それだったら…俺は、俺達は、『勝てる』」

多分、アイツがああなったのは一夏が頑張った証拠だ。誰の手を借りたって、アイツがここまで追い詰めたんだ。それなら……俺は安心してアイツに背中を預ける。

「そうですか……では、お願いします。ここの遮断シールドはあの日の後からずっと解除されたままです。そのまま飛んでいけますよ」

「ああ……アリガトな、浦原さん」

向かおうとした先に、いつの間にかセシリアがいた。隣まで歩いていくとそこで立ち止まる。

「い、一誠…さん」

何を言おうか迷ってるようだ。ここんところ、まともに会話してないからな……今日辺りにでも夜更かし覚悟でお茶会でもするか。っと、その前に、

「頼みたいことがあるんだ」

「はっ、はいっ！」

気をつけの姿勢で固まっているセシリアの頬を撫でる。冷たい感触しかないだろうけど、セシリアは撫でている手に自らの手を重ねる。

「髪……切ってくれるか？不器用でもいいから、頼む」

「……はいっ！」

戸惑った顔ではない、心からの笑顔。そうだ、俺はこの娘の……セシリアのこういう笑顔を一番護りたかったんだ。

ガキだよなぁ、俺も。

「黒崎サン……アナタがどんな存在になろうと、どんな姿だったろうと、今はアナタを焚きつけるコトしか出来ません」

その側には浦原さんが。いることはいるけど、神出鬼没だよ、アンタ。

「これから先、厳しい困難が待ち受けているでしょう。ですが、そこにいる大切な人と、頼ることが出来る友がいれば、アナタはアナタでいられる」

そうだ、親父がしてくれたように、俺も誰かを救えるようになりたい。体を張って護ってくれた義父（オヤジ）のように。

「行きなさい。この戦いを終わらせられるのは…黒崎サンだけです」

妙な期待されても困るけど、やらなきゃいけねえなら行ってくるさ。

「ああ……行ってくる」

俺は跳ねるように飛び立つ。ようやく俺にもＩＳ（つばさ）が出来た。大空へ飛び立つ為の、友を護る為の、

俺だけの『強さ』を……

第２６話　ｔｒｕｔｈ　４（後書き）

戦闘描写は未だ勉強中。

二話前のは、ほぼ殴り書き状態でしたね。反省です。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

閑話休題　ＮＥＷ専用機（前書き）

滅茶苦茶感丸出しですが、長い目で見てやってください。

閑話休題　ＮＥＷ専用機

専用機：「黒装刃（フェンリル）」

使用者：黒崎一誠

モチーフ：ＦＦ？ＡＣに登場するクラウドだと思ってください。

概要　：先に開発された専用機のコアを一誠自身が取り込んで形成された史上初の「人体融合型」のＩＳ。コアが融合したことにより、瞬間展開によるＳ．Ｅの莫大な消費はなく、Ｓ．Ｅも自身の体力として使用できる。Ｓ．Ｅは密着するように展開し続けているので、多少のことではダメージは通らない。また、初期の専用機と違い、武装も豊富になり、六本の剣（それらを合体させると合計七本）による多連携攻撃と、継承されている高速戦闘プログラムによってよりハイスペックの機体に生まれ変わった。以前は出来なかった武装の受け渡しが可能になったので、チーム戦でも能力を最大限に発揮できる。ただし、Ｓ．Ｅを通常の体力でも補っているので、通常の補給では回復できない。

単一仕様能力（ワンオフアビリティー）：高衝破（ハイ・ブレイク）

Ｓ．Ｅを自身の体力に上乗せし、高エネルギーを纏うことにより高速戦闘、大出力砲の直撃を防ぐことが出来る。また、高速戦闘の際、その残像に自身の脳波を載せて操ることも出来る。

武装：七衝刀覇（セブン・ソード）

（モチーフとしては、クラウドが使用している剣です。）

『黒装刃（フェンリル）』にて使用できる六本の剣。本体となる剣にそれぞれの剣を組み合わせることで多種多様な能力を発揮できる。ただし、剣同士の相性もあるので、全てにおいて強いわけではない。

1＝アン・ソード：主に使用する剣。剣の腹が展開するような仕組みになっており、戦闘、及び剣同士の合体の際に展開する。能力としては斬撃強化。

2＝アルディエイド：剣の切っ先に柄が付いた形の剣。アン・ソードよりも軽量なため、柄を軸にして回転させることで防御としても使える。能力はエネルギー強化。

3＝トロイアント：黒い柄の長い段平の剣。単体では両手剣として使用する。能力はエネルギーの充填。

4＝クゥエントス：3と同じ形だが、それよりも若干起動時間が長い。能力はエネルギーの解放

5＝クインネ：セブン・ソードの中でも小型の剣。柄の根元から折りたたんで、剣の腹に合体する。主な能力は牽制・粒子加速。

6＝セステル：クインネと同じく小型の剣。形状は同じだが、能力は他の武装の能力補助。

7＝A－1（アルティメット・ワン）：六本全ての剣を合体させた状態。パーツごとに外すことで、二刀流としても使える。主な能力は単一仕様能力（ワンオフアビリティー）の持続時間強化。

閑話休題　ＮＥＷ専用機（後書き）

ＢＬＥＡＣＨからかけ離れたよぅ。

ま、いいか。何だかこれにして納得してるから。

ご指摘ありましたらお願いします。

第27話　truth　5（前書き）

行こう、共に。

君に背中を預け、共に行こう。

その先に痛みが待っていても、

僕達は歩き続ける。

第27話　truth　5

ＩＳ学園内・トーナメント会場

俺の目の前に何がいる？

アレはラウラ・ボーデヴィッヒ『だった』ものだ。シャルが追撃をかけたところで、彼女に異変が起きた。ＩＳがラウラを取り込んで、全く別の形に変わったんだ。それだけじゃない、どこか面影がある姿。

「こ、これは……っ！！」

俺の表情は目に見えて怒りに満ちているだろう。何せアレは間違いなく昔の「千冬姉」だからだ。

「このヤロォォォォォォォォッ！！！」

上段から思いっきり振り下ろす。さっきとは全く違う踏み込みをした所為か、あっさりと止められ、押し返される。

「くっ！！」

更に押し返した力そのままに両手持ちに切り替えていた。俺の記憶が正しければ、あの技は千冬姉の得意な技のはず。
あんなもんに千冬姉の技を使われてたまるかよ！
その時点で俺は気付いた。先程の戦闘でＳ．Ｅはほんのちょっとし

か残っていなかったのを。
受けきれずに飛ばされてしまい、その衝撃でＩＳが展開できなくなった。でも、そんなの構うか。ＩＳスーツだけになった俺はそれでも、偽者に立ち向かっていく。
そこで同じくＩＳスーツだけの箒に止められてしまう。

「何をしている、一夏。どうしたんだ！？」

羽交い絞めにして止めるけど、止めてくれ。これは俺がどうにかしなきゃいけないんだ。

「離せ、箒！俺はアイツを……」

「まさか、戦うつもりか！？止めろ。死ぬ気か！！？」

「離せって言ってるだろ！！！さもなきゃお前も……っ！！？」

ぶっ倒してやる。そう言おうとした時、箒に頬を叩かれる。そこから熱を持って、痛みが走るが、逆に頭がスッキリと冷えていく。

「一体……何があったというのだ？」

叩いた所為か、箒は今にも泣きそうだ。

「アレは……あの技は千冬姉のなんだ。元々千冬姉が使ってた技を…アイツが使ってるんだ。それが俺には許せねえ」

俺には解る。一時期剣を習っていた俺には、あの力をよく知っている。使い方も……使う者の意味も。

「だから……あのＩＳを、それを使ってるラウラも…一発ぶっ叩かねえと気が済まねえ」

でも、それとは逆に教師陣がアイツを取り囲んでいる。もうＳ．Ｅが残っていない『白式』ではどうすることもできない。

だからって、ここで諦めるかよ。

諦められないんだ。

どうすれば、俺はアイツを『止められるんだ』？

一誠ならどうする？

アイツだったらそんなの関係なく終わらせられるんだけど、そんなの俺には出来ない。

「ならどうする？Ｓ．Ｅも無いのにどうするというんだ？」

「そんなの関係ない。これは俺が『やらなきゃいけない』んじゃない……俺が『やりたいからやる』んだ」

そうじゃなきゃ、ケジメつけられないだろ？今千冬姉に頼ったら、何の為に俺は『強くなる』って決めたんだ……

「だったら…俺も混ぜろよ」

オープン・チャンネル……何処から聞こえてくるんだ？周りを見渡しても俺達と教師、はてはあの偽者以外はアリーナにはいない。

そこに、俺に覆いかぶさるように影が移る。上空に目を凝らすと……いつも見ていたアイツが降りてきていた。というより遮断シールドを破って、俺たちの前に降り立つ。コノヤロウ…やっと起きやがったな。

「い、一誠！」

「…あいよ」

@@@@@〜@@@@@

何だか久しぶりだな、コイツの阿呆面も。しかも二人して泣きそうな顔するなよ。俺が死んでたみてえじゃねえか…実際は仮死状態みてえだったけど。

「いつ起きたんだよ、お前」

「ついさっき……後で浦原さんとセシリアもこっちに来るからな。一緒になって来るよりは、戦力になる俺だけで良いだろ？」

「戦力って……アレ？お前、ＩＳは？」

今気付いたのかよ？だから頭弱いんだよ、お前は。

「ＩＳって……もう展開してるぞ？」

一夏と箒も、俺の姿に注視する。

右肩の肩当と胴体部分にしか装甲が無く、肘までのグローブに肩当から伸びている袖と腰布、カーゴパンツにブーツ。一見してＩＳと判断できるのは無理だろう。背中の大型ホルダーは肩から斜めに掛かっている細いベルトで固定されている。

「それが……ＩＳ？」

「馬鹿な、そんなものがＩＳな訳が……」

「んなモン、見てりゃ解るさ」

俺は念じると、ＩＳを展開するようなプロセスである物を作り出す。粒子が俺の周りに集まると、六本の剣を形作る。二本は細長い段平

のような剣、もう二本は小型の剣。それぞれが二刀一対の形。そして、鍔もない柄が赤い剣と、両刃の鍔付きの剣が俺を囲むように形成される。手を広げたままの俺は鍔付きの剣『アン・ソード』を掴むと、前へ歩き出す。

「どいてくれ……俺がやる」

たったそれだけで、教師陣は波が引くように後ずさっていく。距離にして２m。会敵しているにも関わらず、向こうは全く動かない。というより、技の起こりを待っているようだ。

「お前は……『まだ』弱いって、言ったよな？そのまんまの意味だよ…勉強しねえお嬢ちゃんだな」

それだけで良かった。始まりはそれだけ。
その直後に俺と奴は鍔迫り合いに入っていた。金属同士がぶつかり合うその音が、奴との戦いの始まり。

@@@@〜@@@@@

管制室内

「あれが…黒崎か？だが、あの姿は……」

織斑先生も驚く。そりゃ最初は私（真耶）も驚きましたけど、起きてくれたのが一番嬉しかった。セシリアさんではなく、私が出来たら、なんて考えてたのが本当に悪い気がして……黒崎君、後でちゃんと謝ります。でも、普通の服にしか見えませんけど…アレって部分展開みたいなものかな？

なんて考えてると、浦原博士とセシリアさんが戻ってきた。凄く嬉しそうなセシリアさんとは違って、一昨日から見ている飄々とした浦原博士。

「間に合ったみたいデスね…」

「浦原博士…アレは？」

「ええ、あれこそが彼の本当の専用機、『黒装刃（フェンリル）』です」

「アレが…本当の専用機……」

格好いい名前です…あれ？でも、

「装甲が展開されてませんけど……」

「あの服と、上半身の装甲が…ＩＳなんですよ」

……ハイ？

「一見ただの洋服にしか見えませんけど、あの服は極小サイズの軟性繊維装甲と剛性繊維装甲を織り交ぜ、積層化させることで強固になってるんです」

「あれで装甲……それだけではアレに耐え切れるパワーとは言えんだ……っ！まさか…」

「察しがいいですね…『黒装刃（フェンリル）』のコアは先日の暴走のモノ…そして、そのコアは、今は黒崎サンの体内に取り込まれました」

「そ、そんな馬鹿な……」

「机上の空論かもしれませんが、目の前のことが事実です。結界として使われていたS・Eを吸収、体内に循環させた事で、コアが適合し、改造されていたプログラムも修繕されたんです。それによって、元々あった高速戦闘用のプログラムが使える、ってコトなんです」

今の説明だけ聞いててもサッパリ解らないです。でも、強さは変わらない、いえ、前より強くなってます。今だってあの変質したISと互角以上に渡り合ってますし。黒崎君のISの反応だってしっかり表示されてる。これは信じざるを得ませんね。

「人の形をした…人と融合したIS、か……」

「すでに彼は我々の想像の上にいるようです。彼に『教える立場』から『見守る立場』へ変えたほうがいいかもしれません」

「教師としては、教える立場を優先したいが…そうも言ってられんな」

腕を組みなおして納得する織斑先生。私も見守ります。一人の教師として、一人の女性として……

@@@@@〜@@@@@

ほぼ互角。だけど、切り結んでどれぐらい経ったんだろう。
なんて考えはとうに捨てた。
斬りかかり、捌かれ、斬りかかられ、捌き、の繰り返し。捌くたびに周囲は土煙を上げ、衝撃波で地面には斬撃の跡が残る。しかも、何回目からだろう。奴は両手持ちなのに、俺は片手だけ。互角以上に差が開き始めている。

（そろそろ本気で…行くか）

鍔迫り合いの後、俺が距離をとると奴は一足跳びで肉薄してくるが、微動だにせず立ち止まったままの俺は気圧されずにいる。
全力の横薙ぎだろう、それを俺は……片手で受け止める。ついでにその衝撃波が俺の背後で地形を変えるほどに突き抜ける。グローブ、ブーツにはナノマシンによるパワーアシスト機能が付いてるけど、それでもこれは正に非常識だろう。
本来避けれる速度ではないが、避けるなら誰でも出来るだろう。しかし、今俺は受け止めた。しかも片手で。
その場に居る全員が信じられないような表情をしている。だけど、今の俺にはこれぐらいしか相手との力量の差を見せ付ける手段が他

にない。

「…『アルディエイド』」

呟くと、鍔の無い剣が跳ねるように俺の手元に飛んでくる。『アン・ソード』をホルダーに預けると、それを奪い取るように受け取り、その勢いのまま斜めに斬り上げる。

その斬撃で奴の剣は砕け俺の手は、砕けた切っ先を持ったまま後ろへ飛ぶ。

「一夏」

「あん？……って、おい！！」

一夏の返事を待たず、持っていた『アルディエイド』を投げ渡す。

「これＩＳ用の…って、あれ？」

「そいつの柄にはパワーアシスト機能がある。そのまま振れるはずだ」

軽々持っているが、あれ自体数十ｋｇ程の重さだ。その機能が無ければ、今頃地面に手ごとめり込んでる。

「一夏…アイツをぶっ叩きたいなら、お前が『終わらせろ』」

「おう！任せろ！！」

「それと…背中、預けるぜ……『相棒』！」

頼りない相棒かもしれないが、こうと決めたアイツは誰よりも『強い』だろう。
俺は斜めに跳び、奴の注意を逸らす。素手になった奴には攻撃オプションは無い。見た限り、あの姿は誰かのデータが使われていて、その武装すらもそのまま使用してるはず。

（だったら…これで、終わりだ！！）

動きを止めようとしていた腕を避け、奴の胴体に一撃を与える。先程の斬撃と交差する形に斬りつけると、そのまま離脱。残撃によろめいているところに、一夏が上段の構えで追撃をかける。

「おおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉっ！」

その叫びと共に、一刀。＊の形についた傷からズルズルとボーデヴィッヒが出てくる。左目が金色に輝いていたが、彼女はまだ意識を失っているだろう。崩れ落ちるように、一夏の腕の中に落ちる。それと同時に、誰かを象っていたＩＳは液体のように崩れる。

「一発ブン殴るのは、勘弁してやるか」

寝顔のようなボーデヴィッヒの顔を見て、安心する一夏。お前、叩くんじゃなくて殴る気だったのかよ。はるか後ろでは箒が安堵の表情を浮かべる。

（次はお前の手も借りるからな…覚悟しろよ）

まったく……長い三日間だったな。ほとんど寝てたけど。
でも、護るモノがまだいてくれて良かった。それだけ再確認できただけでもよしとするか。

一夏達をピットに連れて帰ると、そこには織斑先生、浦原さん、セシリア、鈴音、シャル、山田先生が待っていた。

「一誠さん！！！」

俺の首に抱きつくセシリア。倒れそうになりながらも、一回転してセシリアを着地させる。その彼女の顔は泣きそうだけど、笑顔だった。本当に、心からの笑顔。

「お帰りなさいませ」

多分、ずっと聞きたかったんだ。帰るべき場所に、帰ってきたんだ。俺も笑顔で、

「ああ、ただいま」

それと同時に皆が俺達を囲んでくる。よく帰ってきた、とか皆言ってくれるけど、俺だって帰ってきたかった。ココに、皆が待っているこの場所に。

「皆……ただいま！」

その言葉に、皆が一斉に返事を返す。

「「「「「「「お帰りなさい！」」」」」」」

雨は……ようやく止んだ。

第27話　truth　5（後書き）

一誠復帰。そして長い三日間終了。

度々見られる『止んだ気がした』ではなく、この形にしました。

その方がメインキャラのキリがいいかなと思って。

若干一名はまだ雨降ってますけど…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第28話　truth　5．5［tea　time］（前書き）

優しさ。

それは、尊いもの。

常に持っているもの。

そして、心に響くもの。

第28話　truth　5．5［tea　time］

ＩＳ学園内・食堂

トーナメントの一件から数時間後。

夕食後のティータイムを楽しんでいたセシリアの隣には一誠、ではなく箒、シャル、鈴音の三人がいる。

簡単な事情聴取と誓約書を終え、皆それぞれの時間を楽しんでいたが、偶然にもこの四人が揃ったので同席していたのだ。個々にお茶を用意して、和気藹々と、というわけにはいかないようだ。

「で？何でアタシ達一緒にこんなに和んでんの？」

最初に口火を切ったのは鈴音だ。手にはウーロン茶。半分ほどになったコップをもてあそぶように左右に揺らしている。

「そうだな……別に違う席でも良かったはずだが…」

続いて箒。啜っていた緑茶をテーブルに置くと、周りを見渡す。席が全て埋まっているわけではないのに、何故同じ席になったのを最初から気になっていたようだ。

「そうですわね…どうしてこうなったのでしょう？」

「いいじゃない。僕としてはこういう風に揃うのは悪い気はしないし…」

シャルはコーヒー。なのだが、ここでは男としての参加か、あるいは一夏の代わり、という立場なのだろう。

「でも、シャルルさんがいるのにもちょっと違和感が…」

「そうよ。でも何で一夏がいないワケ？それに黒崎も……」

「たしか、一夏さんは織斑先生に呼び出されていて、一誠さんは精密検査ということで遅くなるそうですわ」

再会後、一誠は浦原と一緒に精密検査へ向かった。コアとの同調率とその後の身体の異変などを調査するらしい。

「男共は皆して大変よね～…それに引き換え、アタシ達って怪我とかの類だけだったから」

それに傷ついたのはセシリアとシャルだ。シャルは兎も角、セシリアは先の私闘のお陰で、参加を見合わせていた。

「そうですね…あんな安い挑発にのってしまった自分が恥ずかしいですわ」

「そっちはまだいいよ…僕なんて一誠と会ってから何か影薄くなってる気がして……」

最後の方がワントーン下がっている。デュノア社長の息子というある意味広告塔の役割のはずが、いつの間にかただの一生徒としての扱いをされているようだ。

「そんな事ないぞ……私としては、あれ程の実力で黒崎の目に

留まらないはずが無い」

「それに、アンタだってちゃあんと目立ってるわよ……ってか、あの噂って結局どうなったの？」

噂…トーナメントで優勝すれば一夏と付き合える、という噂が、数日前から飛び交っていたが、トーナメント自体が一回戦のみ開催されるにあたり、噂自体が消滅してしまったのだ。一回戦のみの開催理由としては貴重なデータ収集の一環であるらしい。

「データ収集の為、一回戦のみの開催。人の噂はどうせその程度ですわ」

「余裕だね～～～？もしかしたらその噂の中に黒崎が入ってたのかもよ？」

「それはありませんわ。ワタクシは黒崎一誠という男性を信じていますから…」

なんてセシリアは余裕の態度だが、内心はハラハラしてたのを誰も知らない。

「でも、何で二人は付き合い始めたの？それは僕知らないんだけど…」

「というより、ここにいる全員は知らないと思うぞ？」

シャルの爆弾投下に箒が追い討ちをかける。付き合っているという噂はあれど、理由については誰も知らないのだ。

「さぁ吐きなさい。吐いちゃえば楽になるわよ？」

「何時の刑事ドラマだ……」

箒のツッコミにも動じず、セシリアに詰め寄る鈴音。箒も冷静にツッコンではいるが、お茶を啜りながら聞き耳を立てている。シャルにいたっては何を話すのか、固唾を呑んでいる。

「……そ、それは…」

三者三様ではあるが、無言の圧力というのは正にこのことだろう。妙な圧迫感に遂にセシリアも根を上げる。

「わ、解りましたわ……話しますから、そんなに詰め寄らないで下さいな」

「最初に自分の気持ちに気付いたのは、一誠さんとの決闘の後です。その時は、父より強い理想の男性、という印象でしたが『決闘に勝ったら一つだけ言う事を聞く』という約束に負けてしまいました」

「え……それってまさか…」

「ち、違います。そんな如何わしいコトではありませんっ！」

「じゃあ、何だったの？」

「そ、その……『笑顔を見せて欲しい』…という、約束…でして」

それには鈴音もホッとした表情。

「そこからは、自分の気持ちを抑えるのに必死でした。誰かに相談というわけにはいきませんわよね？このご時勢ですから……でも、一緒に過ごすうちにそれを抑えきる自信が段々無くなっていきました。あんなに安らげるものだとは思わなかったんですもの……」

そこでセシリアは一旦話を切って深呼吸する。自らを振り返るのはこんなにも恥ずかしいものなのを今日初めて知ったように。

「あとは皆さんに話したとおり、対抗戦の後にお付き合いを始めました。特にこれといって変わったわけではありませんが、学園では非常に充実した生活をしておりますわ」

「ふ～～ん、お嬢様のそういう生活ってどう変わるのかな、って思ったけど…案外普通よね？」

「そういうものじゃないかな？誰だって一人の女の子だもん、普通でいいんじゃない？」

シャルの言葉に安心したのか、口をつけようとしたティーカップを

見て気付いた。自分だけ話に夢中で紅茶に手をつけないまま冷めてしまったのだ。

「あら…ちょっと淹れなおして「ホイ、紅茶」……え？」

不意に置かれたティーカップの出処を見ると、トレーを持った一誠がセシリアの隣に立っていた。それを見たセシリアは、途端に首まで真っ赤になった。

「い、一誠さん……いつからそこに？」

「今。てか、お茶してたなら持ってきたのは損だったかな？」

「いっ、いえ！！丁度冷めてしまったので、淹れなおそうかと……」

「そか…俺も一緒していいか？」

トレーの上にはブラックのコーヒーがある。食事はココに来る前に簡単に済ませたらしい。

「ど、どうぞどうぞ」

まるで定位置であるかのように、セシリアの右側に座る。歩くときも、食事のときも常にそこが一誠のいる場所なのだ。それにあてられたのか、三人が手元のお茶を冷ます仕草をし始める。やはり、こういうのは熱を持つのだろう。三人ともいたたまれない気持ちになった。

で、何話してたんだろ？
セシリアに聞いても、誤魔化されてるんだけど。かといって他の三人に聞くのはちょっとなぁ。

「ねえ、一夏は？」

「アイツとは行く場所が違ったからな……何処ほっつき歩いてるのかなんて知るか」

意外と冷たい言葉だけど、腹すかして辿りつくのは結局ココなんだし。

「まあ、アイツが来るまではこうやって話すのも悪くないわよね…アイツへの愚痴でも何でも話しようよ」

鈴音、それ自爆するやつの台詞だぞ？

「そうだな。あの朴念仁へは誰もが不満を持ってるだろうからな」

箒もそれには賛同しているけど、お前もその仲間入りしてるんだぞ。
なんていっても、次には真剣振り回しそうだから黙っとこ。

「で？話のネタは一夏か？」

「何言ってんの？さっきまでアンタだったんだから」

「ふぁ、凰さん！？」

あん？俺？ってことは……

「セシリア、話したのか？」

「も、申し訳ありません……どうしても無言の圧力というのに耐えられず、つい…」

話したのか…別に落ち込んではいないが、こう、精神的に痛い、というか……なあ？

「いいじゃない。減るモンじゃないんだし」

「鈴音！てっめえ、俺の心読むな！てか、てめえにそんなんで同情されたくねえ！」

「同情じゃなくて、アンタがそんなんでヘコんでんのに呆れてるの」

「それでも、ンなことで俺の心労増やすな！ただでさえ一夏で絶えねえんだ！！」

「そんだけ髪があれば抜けはしないわよ？心を広く持ちなさい」

ねえ胸をはるな。ハタくぞ？てか、髪そのまんまにしてるから重く感じるんだよ。早くスッキリしたい。

でも、考えてみればこうやって落ち着く時間なんてセシリアとのお茶会以外ではなかったな。いつも訓練やら騒動やらでそんな時間無かったし。

そうやって無駄話…じゃなくて、安らぐ時間は一夏が戻ってくるまで続いた。その後、食堂の利用時間をオーバーしたことで織斑先生から出席簿アタックを皆して喰らったのは、また別の話。

第28話　truth　5．5［tea　time］（後書き）

トーナメント後の話をオリジナルで展開してみました。ギャグパート込みで。

如何だったでしょう？

また機会があれば、やってみます。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第29話　meet again（前書き）

こんにちは、
新しい日常。

こんにちは、
新しい私。

そして、こんにちは。
私の思い人。

第29話　meet　again

翌日。

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」

教室中が静まり返る…そりゃそうだ、昨日まで男だったのがいきなり女になるんだから。昨日で思い出したけど、大浴場の解放だって聞いたな。まさかと思うが……

「だと思った……『美少年』じゃなくて、『美少女』だったんだ」

「そういえば、昨日大浴場って男子使ってなかった！？」

「それより織斑君。相部屋なんだから知らなかった、なんてないわよね！！？」

そりゃそうだ…知らないはずはないだろ……まあ、事前にボーデヴィッヒのの分も含めて調べておいて正解だった。

デュノア社社長に、実の子供は居ない。

では誰だ？

あらゆる方法で調べた結果、正妻ではなく愛人の子供である事。その事実と女であることを隠し、ＩＳ学園に転入する。そして、自社の広告塔の役割に加えて『白式』のデータを盗んでくる事が、彼

女の真実。
そんな事に子供を、今までひた隠しにしていたのにいきなり自分の子供として公の場に出ろ、って都合の良いことに使うのは、親としては失格でしょうに。
なんて、過ぎたことはしょうがないか。てか、一夏の身の危険だけは何とかしないと……
「い～ち～かぁ～！！」
不安を他所に、ＩＳを展開した鈴音が壁をブチ破って入ってきた。すでにエネルギーを充填し終わった衝撃砲を一夏に向けている。アイツへの香典…いくらにすっかな……。

あれ？爆音ないんだけど？

一夏に視線を戻すと、ボーデヴィッヒが停止結界を使って衝撃砲を防いでいる。聞けば、予備パーツを使って組み上げたらしい。でもたった一晩で組み上げる根性には脱帽だ。
「いや～、それにしてもたすかっ……！！？」

ハイ、ごちそうさま。そして、ご愁傷様。にしても、思いっきりディープなキスですこと。

「お……お前を私の『嫁』にする。決定事項だ、異論は認めない」

ハイ？…嫁って何ですか？婿の間違いでわ？

疑問符だらけの俺をさしおいて、篠ノ之、デュノア、鈴音がすでに臨戦態勢で一夏に詰め寄る。デュノアさんや、盾殺し（シールド・ピアーズ）だけは仕舞ったほうがいいですよ？教室中をグロデスクに染めたいんですか？

…冗談です。ごめんなさい。そろそろ助けるか。

武装を展開していたデュノアと鈴音の首根っこを掴んで、窓の方へ連れて行く。コアと同化してるからＩＳのパワーそのままを使える。正に『生きた兵器』そのものだ。

「ちょっ……離しなさいよぉ～～っ！！！！」

「ね、ねえ、黒崎君！？」

「てめえら揃って……頭冷やして来い！！！」

全開にしてある窓から外へ全力で放り出す。お二人さん、妬きもちはそこまでにしなさい。篠ノ之？無茶言うな、腕は三本ありません。とりあえず無言の圧力で黙らせましたよ。

「ったく、大概にしろっての……山田先生」

「ふわっ！は、はい！？」

「たしか部屋割りの変更、ありますよね？」

「はい……また時間かけて変更しないと…「手伝いますよ」…ふぇ？」

落ち込んだ顔したと思ったら、今度は顔を赤らめてる。軽く百面相してますよ？

山田先生が寮の部屋割りを受け持ってたのを思い出したんで申し出ては見たけど、生徒がやっちゃマズいかな？

「手伝いますって……ただでさえ迷惑かけてるんです。これぐらいは良いッスよね？」

「い、いいえ！！これは生徒には流石に手伝ってもらうわけには

「いいんじゃないか、山田先生？」…って、織斑先生！？」

教室の扉には織斑先生。腕を組んで落ち着き払っているが、流石にこの騒ぎじゃ腸煮えくり返ってるでしょ？

「職員会議での決定事項だ。黒崎、お前の処遇についてだ」

やっぱり、な。こんな騒ぎを大きくしておいて、終いにはコアと融合して『生体兵器』になってるんだ。通常の扱いじゃ収まらないだろう。

「お前の身体異常は見られないが、事情が事情だ……生徒会に入ってもらうまではいかないし、年齢が年齢だ。お前は『準教員』扱いになった」

え～っと、つまり……どういうこと？

「掻い摘んで言えば、お前は『教員』待遇で迎えるが、学園に『入学』している、ということだ。どっちつかずではあるが…現状では最良の判断として、決定した」

「それって、ぶっちゃけ教育実習生に近いンスか？」

「まあ、そんなところだ。かといって他の生徒と違うからと言って特別扱いはしない。今までどおりに授業には出席してもらう」

「はい」

ここは言いよどむところだろうけど、ここまでしてくれたんだ……応えなきゃ損するのは自分だ。恩を仇で返したくないのは親父から口酸っぱく言われてっからな。

「良い返事だ…それと、凰には早く教室に戻れと伝えておけ。まったく、二組にも転入生が来てるというのに」

最後の方は誰にも聞こえないように言ったようだけど、俺には聞こえてますよ？変なところで身体強化されてるからなぁ…気をつけよ。

そして、その日の昼休み。約束どおり、職員室で山田先生の手伝いをしてきた。でも、あんなキツいのを一人でやってたんだな。何十人分の部屋を確認しながらだから余計に時間掛かる。こういう部屋割りって、一人を変えるだけで周りも変化するから手間をかけてやらないと後で痛い目を見る。おかげで十四人分の変更から、五人に減ったからまだ良いけど……それで文句言われるのは山田先生だからなあ、火の粉は出来るだけ浴びさせないように。でもこういう作業になると、煙草が欲しい。デスクでの作業はある意味多大なストレスになるからな。必要と言えば必要かもしれないけど、生徒としても扱われるから吸わないようにしよう。

で、それも終わって始業十分前。メシ食わずで作業したから腹減ったな……ここまで時間掛かるとは思わなかったし、あんまり山田先生の負担は減らそうとしてたらもうこんな時間に。

「さて、メシは…いいか。別に食わなきゃ死ぬってんじゃないんだし」

教室へ戻ろうと階段へ向かったとき、誰かとぶつかった。向こうも教室へ行こうと急いでいたのか、全力疾走だったようだ。その勢いのままぶつかったから二人してシリモチついた。向こうは頭からぶつかってきたから痛みがあるところをさすっている。

「てててて……ゴメンね、急いでたから…って、男？」

謝りながら、男であることにビックリしてる。金髪に青いバンダナをした、活発そうな女の子。その活発さを表しているのか、あんまり整えていないセミロングの髪に、制服を動きやすそうに改造してある。

「男で悪かったな…それに、前方不注意もいいトコだ。気を付けろよ？」

「悪かったって…時間見ずにゴハン食べてたら間に合いそうになくってさ…走ってたんだけど」

バツの悪そうな顔してる。余程気にしてるんだな……

「で？何処のクラスだ？」

「えっと…一年二組なんだけど…教室ドコだっけ？今日転入してきたばっかだから解んない」

もしかして、今日来た娘ってコイツだったのか？てか、案内してくれた子は何処行った？

「用事があるとかで、いなくなって…」

おいおい、どんな用事だよ？思い当たる猪娘ではないだろうか…何だか不安だ。

「しょうがねえ…隣のクラスだし、来いよ」

「え？…良いの？」

「こんなんで授業遅れました、なんてカッコ悪いだろ？」

その子の手を取って立たせると、歩いて教室まで送っていく。その間は一夏に間違われたようで、「こんな大人びた人じゃないもんね」

なんて言ってた。ドコで聞いたんだ、アイツの人となり……
途中、くだらない事で笑ったりしてたが、まだ授業には間に合う内に教室に到着。そんなに急がなくても着いたんですけど…とりあえず隣であることを伝えると礼儀正しくお辞儀をして礼を言ってきた。そこまで感謝されてもなぁ。

「あ、そうだ。名前教えてよ…これから三年間一緒の場所で暮らすんだし」

「あぁ、俺は黒崎。黒崎一誠」

「一誠ね…うん、覚えた」

いきなり呼び捨てかよ……年齢(とし)は教えてないからいいんだけど。年上には敬意を払いましょうね？
聞くだけ聞いたのか、そのまま教室へ向かおうとしたところを呼び止める。

「ん？何？」

「お前の名前、聞いてねえんだけど…」

「あ、そだった。あたしはリューネ。リューネ・ゾルダーク」

「ゾルダーク、か。覚えたよ」

「ゴメン、そっちで呼ばれるの嫌いなんだ。リューネで良いよ」

語呂的に似合わないもんな、確かに。

「解ったよ、リューネ」

「よし。それじゃあ今度こそ、またね」

「おお、またな」

後日、リューネの話を鈴音から聞いたところ、ある異名を聞かされた。その後に知る彼女の真実と……

『御転婆娘（フラッパー・ガール）』という異名と共に…

第29話　meet　again（後書き）

変なブッコミ方で申し訳ないッス。

まさかたつきを入れるわけにはいけなかったんで、まじめなツッコミが正拳てのはちょっと…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7920w/

IS [Soul Reaper]

2011年10月19日03時01分発行